
カオス・クロニクル

岡村 としあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カオス・クロニクル

【Nコード】

N3140Z

【作者名】

岡村 としあき

【あらすじ】

MMOの黎明期はとうに過ぎ、数々のタイトルがサービスを終了してきた。サーバー統合。つぎはぎだらけのアップデート。放置されたバグ。このカオス・クロニクルもまた、混乱の時代にあった。サービス終了目前と囁かれるMMOで、一人のベテランプレイヤーと一人の初心者プレイヤーが会う。

*MMOの特性上、チャット内の会話を表現するため、文中には顔文字を使用しています。横書きでお読みいただくことを推奨します。

押し切れなかったEnter

一瞬の迷いが命取りになる。たった一度のミスが原因で全てが台無しだ。そうならないように、ただただ最善を尽くす。

秀麗な鎧を着込んだ金髪の若い男や、下着同然の派手なローブを着込んだ銀髪の若い女、2メートル近い体軀をした緑色の肌の大男。彼らの命を守ることが、ここでのオレの役目。

目の前で火花が散る。薄暗い洞窟の中で、戦いが始まった。ロックアントと呼ばれるモンスターの討伐……それが今回の仕事だ。

近隣の村人を襲う悩みのタネで、これを数体討伐すれば、村長からたんまりお礼がもらえるというわけだ。

アントの巣と呼ばれる洞窟は、入り口が一人一人入るのがやっとだった。中に入ると中は迷路のように入り組んでいて、一度はぐれると死体で再会……なんてことになりかねない。

今回組んだのはオレを含め4人だ。鎧の若い男が、シュレン。エロいねーちゃんがマリABEL。大男がパツクン。そしてオレ……エルト。

入り組んだ迷路を進むこと数分。大きな空間に出た。その直後だ。所々の穴という穴からアント……バケモノアリが湧いてくる。

シュレンが切り込む。盾を持つ左半身を前に出し、右手の剣で襲い掛かってきたアリの前足を切り落とし、そこに畳み掛けてきた別のアリの攻撃を左の盾でガードする。

しかし、次の瞬間そのアリは自分の頭を失っていた。パツクンが左右の手に握った鉄のハンマーで背後から飛び掛り、頭を叩き潰したのだ。返り血にも似た粘液を顔に受け、パツクンは笑う。シユレんのほうも、鎧を緑色の何かで汚していた。

横穴から湧いて出たアリに、マリABELが火属性の中級魔法『ブレイズアロー』の詠唱を始める。マリABELの足元に六芒星の魔法陣が発現し、彼女の掌からバスケットボールほどの大きさの火炎球が3つ放たれ、アリを焼き尽くす。

耳障りな『ギギギ』という音を立ててアリは灰となって大地に還る。

今日初めて組んだ彼らだが、チームワークは即席にしても、うまくまとまっていた。

「3匹来た！ スリを頼む」

「わかった」

オレの出番らしい。オレには彼らの様に、強固な盾も無ければ、一撃必殺の技もないし、圧倒的な火力を持っているわけでもない。やれることはただ一つだ。

彼らのサポート。

対象の意識を数秒間奪うことのできる催眠魔法『スリープ』の魔法を使う。オレの足元にもマリABELと同様の六芒星の魔法陣が発現する。

白い霧がアリ共を包み込み、意識を奪うことに成功。その間にシユレンの体力を回復するべく治癒魔法『ヒールライト』を唱える。

シユレンの体は白い光の柱に包まれ、傷付き、血がにじんでいた皮膚が即座に修復された。

「よし、あと一息で目標数達成だ」

このチームのリーダーである、シユレンの掛け声で士気があがった。パツクンもマリアベルも、やる気をたぎらせている。オレはそれを後ろから冷静な目で観察していた。

ヒーラーであるオレまで熱くなるわけにはいかない。状況の変化を見極め、敵との適切な距離を保ちつつ、味方に絶妙なタイミングでアシストを入れる。生命線であるオレが無闇に前に出るわけにはいかない。

それがヒーラーだ。

シユレン達の活躍もあり、程なくして予定数の討伐が終わった。

討伐が終わったオレ達は、村に帰還すべくオレを中心に集まった。帰還魔法『リターン』を発動させる。発動と同時に、一瞬視界が暗転し、景色がのどかな山村の風景へと様変わりした。

「おつかれ、またよろこばせ」

「おつですー」

「おちゆ^^」

オレ以外のメンバーはそういい残し、パーティーを解散すると、村長の家へと報酬……クエストアイテムとお金を受け取りに行った。

『またよろしく』。ディスプレイにそう表示された文字。あとはエンターキーを押すだけ。たったそれだけの事を、一瞬躊躇^{ためら}った。

夕闇が空を支配しつつある午後5時。窓辺にまで闇の魔の手が伸び、室内は真っ黒だ。

学習机の上に設置したノートパソコンのディスプレイ……。そこには、青い髪の少年が映し出されている。

先ほどまで、動かしていたキャラクター……エルト。

エルトはまるで、プレイヤーと同じ様に面白くなさそうな顔をして、鋭い視線で空を見つめていた。そういう顔に設定したのは自分だが。

しばらくエルトと同じ様に天井を見上げる。そして、キーボードを6回叩いた。

メッセージウィンドウには何も表示されていない。Backspaceで消したからだ。

もう誰とも関わりたくない。彼らともこれっきりだ。ソロのほうが気が楽でいいし、時間に縛られずに済む。

足を引っ張るのも嫌だし、引っ張られるのはもっと嫌だ。

一匹狼でいい。

再び視線を天井に向け、イスの背もたれに全体重を預けると、大きく伸びをする。

席を立ち、パソコンの電源を入れっぱなしにしたまま、自室から出ると下の階へと降りていった。

まるで……ゲームからも逃げているみたいでなんだか嫌な気分になった。

出会いとターニングポイントなネタ師の初心者

カオスクロニクル。純国産MMOである。サービス開始から8年……日本のMMOの黎明期を生き続けたゲームだ。

美麗なグラフィックと6つの種族と8つの職業。プレイヤー同士が戦うPVPシステム。

当時のMMO業界に新風を巻き起こし、最盛期はサーバーが混雑しすぎて臨時サーバーメンテナンスが週に2、3度あった。

それから7年経った今は……サーバーも統合され最盛期の見る影もない。それまで月額制だった課金システムも、基本無料になり、プレイヤーの数は一時的に増えた。

育成も大幅に楽になり、新規プレイヤーが増加したのだが、それも一時のこと。無料になった事で、低年齢層のプレイヤーも増加した。

彼らの中にはモラルに欠ける者も少なくなかった。それが古参プレイヤーとの軋轢を生むのにそう時間はかからなかった。

現金でゲーム内通貨を購入するリアルマネートレード……RMTや、ゲーム内のキャラをプレイヤーの代わりに育成する、育成代行が蔓延はびこり、それに手を染める新規プレイヤーも後を絶たない。

そんな新規プレイヤー達がいわゆる『害プレイヤー』になって、面白半分にPVPを初心者や低レベルプレイヤーにしかけ、低レベル帯の狩り場は一時、害と古参プレイヤーの死体が転がる戦場とな

った。

それから1年。害プレイヤーの多くは飽きてしまったのか、姿を見せる事はなくなり狩り場は以前の姿を取り戻した。

MOBだけのフィールド。静か過ぎるダンジョン。入場制限無しにいつでも入れるインスタントダンジョン。

それが、元の平和なカオス・クロニクルの姿だ。

ゲームに戻ってきたオレは、空を見上げながらふと思い出していた。CGで描かれた青空には雲の塊がゆっくりと現実世界さながらのように流れている。

時刻は午後9時。外は真っ暗だが、カオス・クロニクルの世界では昼間だ。日曜の夜。普通ならば、回線が込み合ってラグが多くなる時間帯なのだが、依然快適である。

パーティーマッチの画面を開く。まばらだが、いくつかパーティーメンバーを募集しているパーティーがあるらしい。ご苦労なことだ。

とりわけ、ヒーラーが不足しているのか、ヒラ様募集中のコメントがよく目に付く。すると、案の定だ。

「”どもっすー。今ヒマしてません？ よかったら悪魔の森にでも行きませんか??”」

「”どうも。他のパーティーに誘われちゃったんでまた今度お願いします”」

「りよーかーい^^」

「ご苦労な連中からたくさんのお金……プレイヤー間同士で会話するウィスパーマードでラブコールが飛んでくる。そのすべてを同じ理由で断って、うんざりしながらパーティーマッチ画面を閉じた。

興味本位で開くべきじゃなかったな。

インベントリを開いて、所持品の確認をする。すると、MPポーションが切れていたので買出しに行くことにした。念の為、自分の倉庫を覗いてみたがストックがなかった。

シュレン達とクエを受けた村『オルティアの村』を出て、街道を一人行く。川沿いの道を歩いて、草原を走る。ここまでの道のりで、他のプレイヤーとすれ違う事はなかった。

当然か。いまさらこんな死に掛けのゲーム……新規で一から始める物好きはまずいない。このあたりは低レベル帯ゾーンだから、プレイヤーよりもNPCの数が多いんだろう。

……快適だな。そう考えていると小高い丘の上に出て、目的地が見えてきた。

『ハリの村』……通称、初心者村だ。カオス・クロニクルを始めたプレイヤーはこの村からスタートする。

基本的なチュートリアルを兼ねたクエストを受け、レベル15程度で外の世界によく繰り出せるわけだ。

ハリの村は、基本的にすべての物品が低価格だ。初心者が買いやすいように値段が設定されていて、他の村に比べ2割ほど安い。

オレは、消耗品は週に一度ここに買いに来て、倉庫にぶち込んでおくようにしている。他にも何か切らしている物はあったかな？とそう考えていたときだ。

珍しい。村の前で、ラグが起こった。

ラグの原因は目の前……それを見てオレは声をあげそうになった。恐ろしい数のMOBが渦巻いていた。50くらいだろうか？それらが村から少し離れた平原でぐるぐると竜巻のようにうねっている。

大量に集めて範囲スキルをブチ込むまとめ狩りだろうか？それとも、初心者を対象にしたMPK？

どちらにせよ、関わるつもりは無い。無視して村の入り口に立った時。MOBの渦が突然散らばりだした。どうやら、渦中のプレイヤーは戦闘不能になったらしい。

いったいどこのアホだと思って、そこに近づいた。

珍しい。素直にそう思う。そして、納得した。

カオス・クロニクルには、6つの種族が存在する。ヒューマン。エルフ。ダークエルフ。ドワーフ。オーク。フェイブ。

ヒューマンや、エルフなどは他のMMOでも良く見かける種族だ

が、カオス・クロニクルにはオリジナルの種族が一つある。

それが、フェイブ。

フェイブは、古代人が神と戦う為に作り出した^{ホムンクルス}人造人間だ。ヒューマンの遺伝子を元に、エルフのビジュアル。ダークエルフの魔力。オークの力。ドワーフの器用さ。

それらを兼ね備えた戦う道具として、愚かな古代人が神様ごっこ
の果てに生み出した最終兵器の一つである。

白く美しい肌に、流れるような銀髪。宝石よりも美しく輝き、闇
の中で不気味に光る赤い瞳。

ヒューマンの手足として、死すらも恐れない殺戮人形。ここまで
語ればこの種族は最強なんじゃないか、とか考えてしまいが唯一に
して最大の弱点がある。

寿命だ。所詮は古代人の神様ごっこ。凄まじいまでの戦闘力を持
ち、死すらもおそれない彼らだが、その寿命はたったの20年。

というのが歴史的な設定で、ゲーム的な設定はというと防御が紙
なのだ。

高い攻撃力、高い魔力、底を見せないMP。そして、あってもな
くても同じ0に等しい防御力と、一撃食らえば即死レベルのHP。

6回目くらいのアップデートで追加された種族で、追加当時はチ
ート性能で右を見ても左を見てもフェイブ、フェイブ、フェイブ。

そして次のアップでネタに早変わり。今も、野良のパーティーでフェイブを使って紛れ込むと、即追い出される。

ネタ師か、初心者か、よっぱどの熟練者でなければ使いこなすのは難しい。そう。

オレの目の前で倒れているのは、フェイブの少女だった。

「おい、大丈夫か？」

蘇生魔法くらいはかけてやろう。久しくお目にかかっていないフェイブだ。

案外、大量にMOBを引いたのも何かのネタだったのかもしれない。いな。

しかし、30秒立っても、1分立っても返事は無い。離席しているのかもしれない。そう思って、その場を離れかけたときだ。

「おんがいsmすっすしゅ」

「はあ？」

意味の分からない、初めて耳にする……いや、初めて目にした言語だった。SMとか言ってるからやっぱネタ師か、こいつ。

「おねがいします」

どうやら、単なる打ち間違えだったらしい。

スキルアイコンから、蘇生魔法『リザレクション』を選び、フェイブの少女を蘇生する。

光の羽が上空から舞い降りて、少女は起き上がった。

それが、オレとこいつの出会いで、ターニングポイントだった。

フェイスナイト

「助かりましたあ^^w」

フェイスの少女は立ち上がるやいなや、ソーシャル『喜ぶ』を使って、子供のようにきゃっきゃっ飛び回った。

キャラクターの真上に表示されている名前を見る。…… punpun321という名前だ。なんだこりゃ？ プンブンさんにーいち？ マジでキレル3秒前とかいう意味か？

「punpun321です^^v プンって読んでくださいね」

プンはそういうと一人で拍手したり、一人で泣いたり、一人で笑い始めた。もちろん、これもソーシャルによるものだが。『褒める』、『悲哀』、『笑い』を使ったんだろう。

「いや、驚いたよ。まさかフェイスのネタ師がまだ全滅してなかったなんて」

「プンはネタ師じゃありませんよぉ；；； 頑張つてレベルを上げていたのです！ そしたら、まわりのモンスターさんがいっぱい寄ってきてちゃって……」

どうやら、無闇にMOBの群れに突っ込んだ挙句、大量にリンクさせてしまったらしい。初心者によくありがちなミスだ。

「でも、助かりましたあ！ 蘇生ありがとです^^」

プンは再び、ソーシャル『踊る』で一回転してみせる。プンのシルバーの長い髪とワンピースの裾が優雅になびいて、銀色の妖精が草原に舞い降りたかのように錯覚する。

女フェイブはビジュアル面だけでいえば、女性キャラの中でもっとも人気が高い。

特に、カオス・クロニクルの女性キャラクターの装備は、露出が多く、ローブ系の装備などは下がミニスカートになっていて、スキルを使う瞬間カメラの角度を変えれば……見える。

女フェイブはエルフ並みの美しさを持ちながら、出ているところはけっこう出ているのだ。

プンが装備しているのは、クエストでもらえる報酬アイテムの、グレードがかなり低いローブなのだが、白いワンピースのようになっていて、丈が膝上20CMくらいしかない。

それを纏ったプンが、さっきからやたらとオレの目の前で乱舞している。その度、危うい角度で聖域がこの不浄なる世界にさらされているのだが……後で注意してやるか。

とりあえず、このまま去ってしまったてもよかったのだが、いくつか忠告でもしといてやる事にする。また村の前でラグ起こっても嫌だし、何度も『蘇生してください』なんて、ウイスが来たら鬱陶しい。

「オレはエルト。レベル44のビショップ……ヒーラーだ」

「ブンはレベル12のフェイブナイトです！ よろしくね、エルくん^^」

ナイト……フェイブナイト……レアだ。とりわけ紙装甲のフェイブに一番ミスマッチな職業の組み合わせ。

敵の攻撃を一手に引き受けるナイトは、パーティー狩りではとても重要な職だ。ヘイトスキルを使って、敵のターゲットを自身に集中させれば、ヒーラーにとってもHP管理がしやすい。

高い防御力と、敵のターゲットを自身に向けさせるスキル。パーティーでは文字通り盾であり、壁なのだ。

それ故、どのパーティーも必死にナイトを勧誘しようとするのだが、いかにせん数が少ない。敵のターゲットを集めるという事は、それだけ死亡率が高いということでもあるからだ。

カオス・クロニクルでは死亡すると経験値が減少する。それも、20分くらい狩りをしてようやく取り戻せるくらいの量だ。パーティープレイには困らないが、それ以上にリスクが大きいので敬遠されがちな職業である。

それに……フェイブナイトは不遇職かつ、不人気職のナンバーワンで、ナイト募集のパーティーでも、『それならローブを来たヒーラーのほうがマシ』だなんて、冷たく言われてしまう。

レベルが60になれば神スキルと呼ばれる『ヴァンガード』が使えるのだが……そこまでマゾな奴はそうそういない。

こいつは、何でこんなマゾいを選んだらう……ふとブンを見

ると、いつの間にかMOBの群れに突っ込んで、仲良く鬼ごっこに励んでいた。

しかも、さつきよりも数が多い。……あいつ、絶対何も考えずに外見と名前だけで選んだな。

「いや〜〜〜〜〜〜〜>< 助けて、エルくん……」

チャットとキャラの操作が同時に出来ないらしい。急に立ち止まったプンはボコスカMOBに殴られて、悲鳴を上げて倒れた。その10秒後にさつきのセリフが流れたわけだが……。

それにしても……誰もこいつと組もうとは思わないだろうな。初心者で、不遇職で、プレイヤースキルもないし、何も考えてない、チャットも遅い。……オレもこれ以上関わるのはよそう。

初心者に関わるとロクな事がないのは、オレ自身がよく知っているはずだ。それは一年前、嫌と言うほど思い知っただろう？

クソ……思い出すだけで……腹が立つ。

「プン。お前、ギルドは？」

リザレクションをかけ、再び蘇ったプンにそう問いかける。

プンはまた一回転して、ワンピースの裾を危うく舞わせると、おもむろに派手な紋章の入ったマントを装備して、こちらに振り向いた。

「入ってるよー^^ これがプンの所属しているギルド『灰色の狼』」

のギルドマントなのだ。>< どうだ、マイツタか@@w」

背中をこちらに向けて、プンはそう言った。

その小さな背中にくっ付いているマントの紋章を見て……マウスを握る人差し指が……一瞬停止する。

ギルドに加入したプレイヤーには、無償でギルドエンブレムが入ったマントが支給される。

プンの背中には猛々しい狼の顔がドット絵で描かれていた。

「お前……『灰色の狼』のメンバーなのか」

灰色の狼はオレがプレイするサーバーで最大手のギルドだ。ギルドメンバーは常に100人以上いて、エリアボス討伐を独占していたり、各職業ナンバーワンを決める『トーナメント』にその名を多く刻んでいる。

ギルメンは廃人ニート共がほとんど。さっき組んだパツクンも『灰色の狼』のギルメンだった。

「プン、それならギルメンに声掛けて育成手伝ってもらえよ。こんな所でソロなんかしてないでさ。手伝ってもらったほうがすぐに転職もできるぞ?」

後はギルメンさんに任せよう。元々、こいつに興味があったわけでもないし、そもそもオレは、初心者支援の優しいベテランプレイヤーなんかじゃない。

だが、プンはすぐに返事を返さない。

「……」

わざわざ沈黙をチャットにして表して、先をもったいぶってみせる。何が言いたいんだ、お前は？

キーボードの上に載せたFキーとJキーの上で、軽く指を動かし、苛立ちながら辛抱強く待つ。

「……」

数秒間を置いて、プンが喋りだした。

「皆、忙しいから無理って言われた><; ギルメンなのに助けてくれないよーどうしよう、エルくん……」

どうやら、ギルメンにも煙たがられているらしい。大手のギルドなんて、そんなものだ。勧誘するだけしといて、あとは放置。

あとは各自、自由にギルメンと仲良くやっってくださいねー。とか言っただけとかれる。周りにすぐに溶け込めるようならいいが、そうでなければ孤立してギルドに居場所は無い。

孤独なのだ……プンは。

狩り場に行っても誰もいないから、同じレベル帯の友人もできないし、ギルドでは初心者扱いされて、半分バカにされているんだろ。

「かわいいそうと言えはかわいいそうだが……。ボランティアで友達ごっこなんてオレはごめんだ。」

「ねえ、エルくん？」

「ブンがオレに疑問形で何かを問いかける。解っている。その先の言葉は。オレに超能力はないが、その先の言葉は解る。」

だから。

その言葉が出る前に。

ブンよりも早くキーボードを叩いて。

その言葉を紡ぎ出す。

「一人でも大丈夫な狩り場、教えて！　ブンがんばって狩りうまくなるから^^」

オレの言葉よりも早く、ブンがオレの予想を裏切る言葉を紡いだ。

それでも、オレの心は変わらない。

すでにメッセージウィンドウには文字の羅列がセリフとなって、Enterを押されるのを今か今かと待っている。

キーボードを操作して、オレはオレの意思をブンに伝える。

『彼女に送るプレゼント』

「ありがとうございますあ」

能天気そうなセリフを背中に受けて、村の道具屋から一步外にでる。

道具屋の看板娘ホリーちゃんは、村一番の美人らしい。そう何度も村の警備員マーシーが独り言を繰り返しているので、これはプレイヤーの間でも有名な話だ。

クエスト『彼女に送るプレゼント』は、14レベルで一回だけこのストーリー警備員から受けれるが、その報酬が経験値と装備のセツトなのでこれをやらない手はない。

内容も、一匹だけクエストモンスターを狩るだけでお手軽だ。

道具屋を一人出たオレは、倉庫に向かった。倉庫番のドワーフに話しかけ、消耗品をたくさんブチ込んでおく。

隙間なく押し詰められたポーション類に、癒される。やっぱり、物がぐちゃぐちゃしている方がなんだか落ち着く。ちなみにオレは掃除が苦手だ。

今も部屋の床には色々物がちらばっている。両親がそれを見るたび溜め息をついて『片付ける』とうるさい。余計なお世話だ。

いや、そんな事は今はどうでもいい。問題は別にある。

倉庫を後にして、村の塀にそって外に向かう。見えて来た。

ストーカー警備員マーシーが今もうつむいて、『ああ、ホリーちゃん……』とか、『今どうしてるんだろう、ホリーちゃん……』と、ホリーちゃんへの思いを募らせている。

そのマーシーの前に、軽量の鎧に身を包み、剣と盾を持った銀髪の小柄なフェイブの少女がいた。

「クエ、ちゃんと終わったか？」

「うん、エルくんのおかげだよ！ ありがとう！>|<」

ブンがオレに近寄ってきて、飛び跳ねる。子犬のような奴だ。

「レベルも15になったから、違う村に行けるね、やったー^^v」

「そうか、15になったか。じゃあ、『ミロンの村』に行こう。うまいクエをいくつか知ってる」

「ほんと@@ お世話になります、師匠m) (mペコリ」

ようやくナイトらしくなったブン（装備だけが）を背中に、ハリの村を出る。

目指す先は、ミロンの村……近くにゴブリン前線基地という、少し難度が高めの狩り場がある。そこでこいつのレベルを上げる。

「ブン。ちょこまか動き回るな。アクティブモンスターを引っ掛けるぞ」

「ひゃあ、助けて@@!」

言う前にすでにプンは何匹かのウェアウルフと戯れていた。本当に世話の焼けるお姫様だ。

それら全てを杖で叩きのめし、静かにさせた。

「うわあ、エルくん強い!」

「いや……いくらオレがヒーラーとはいえ、レベル1のウェアウルフを倒すのは、高校生が幼稚園児に電気あんまをかけるような物だ」

小学生の時、二つ年下の弟にかけて泣かしてしまった事があったな、そういえば。

「電気あんま (?!?)」

プンが頭を疑問符でいっぱいにしている。

「なにそれ、楽しいの? プンにもやってみて、エルくん^^」

「ぐぐつてみる。その上でやってほしいというなら、オレの奥義を見せてやるっ」

「うわあーい^^」

プンは嬉しそうにはしゃぎながら街道をかけていった。……数引きのウェアウルフを引き連れて。まったく、世話が焼ける。

だが、それも少しの我慢だ。こいつがレベル40になれば……。そうなれば、用済みだ。

オレはブンと一つの取引をした。

このゲームでは、レベル40未満のキャラと40以上のキャラは師弟関係を結ぶことが出来る。師弟関係を結んだペアには様々な恩恵がある。

二人がログインしていると互いの取得経験値が増加する。40以上は1.2倍。40未満は2倍になる。

さらに、ペアの片割れがレベル40に達成して転職を終えると、40以上のキャラ（この場合はオレが該当する）には、高価な武器が送られる。

オレの目的はそれだ。でなければ……。ブンのような問題児を抱える気にはとてなれない。

ブンが40レベルにさえなればいいのだから、最初は適当に付き合っつて、あとは狩り友を作らせて勝手に40になってくれればいい。

オレはそれまでログインしなくてもいいし、別のゲームで遊ぶか別のキャラでプレイして、ブンが40になるのを待てばいい。

今だけの辛抱だ。ブンの奇行に振り回されるのも、ブンのお世話係をするのも、今だけの……。

「っつておい、ブン！ どこ行った!？」

気が付けば、プンの姿はどこにもなかった。ゲームから落ちたか？

「ここだよおおお……」

どこからともなく、プンの泣きそうな声（本日6度目）が聞こえてくる。

カメラをぐるぐる回してようやくプンを発見すると、ディスプレイの前でオレは大きな溜め息を付いた（本日23回目）。

「お魚泳いでるキレイな川眺めてたら、落ちちゃった。てへ（＾－＾＊）」

何がてへ（＾－＾＊）だ。ふざけんな。またリザレクションか。

プンのHPは川に落下した時1になり、呼吸できずにダメージを食らい水死体になって、ミロンの村の前の川を流れていた。

ディスプレイの前でオレは本日24回目の大きなため息を付く。

まだ時刻は午後10時になったばかり……一時間でオレは24回もため息を付いたのか。

さっさと40レベルになってオレから卒業してくれ、プン……。

初めての狩り友

ミロンの村は海に面していて、小さいが港もある。村の前を流れる川はそのまま海に繋がっていて、プンは川で蘇生された後、泳いで海に出ようとした。

『お魚いっぱい取ってくるね、獲りたてはきつとおいしいよ^q^じゅるり』などと言って、犬掻きで大海原へ漕ぎ出したプンは、またもHPゲージがやばいことになっていた。

リターンを使って、強制的にミロンへプンごと帰還させる。即座に周囲は石造りの簡素な家が立ち並び、閑散とした風景に早変わりした。

「エルくんのイジワル！ お魚はDHAがたくさん含まれてるんだよ！ お肉ばかり食べてたらダメなんだゾ！ ぶんぶん><」

「お前はアホか」

プンがぶんぶん言い出したので、一蹴してやる。そもそも、このゲームに狩猟とかの要素は無い。

海中を行けば、たまに水中型のMOBと出くわすこともあるが、狩ったところで手に入るのは経験値と少量の金だけだ。それにオレの食生活は野菜が中心だ。ピーマンは苦手だが……。

「プンはアホじゃないよ！ プンだもん><」

意味が解らん。

けれど……確かにオレも始めたころ、ミロンの村の前で川に飛び込んだことがあったな。その時、偶然近くにいたヤツも泳いで……一緒に泳いだことが縁で狩り友になって……色んな所に行ってバカをしたものだ。

世界が新鮮に見えた。目に映る全てが、キラキラ輝いていた。場違いなくらいレベルの高い狩り場へ迷い込んでしまっただけで、ザコモBに瞬殺されたり、エリアボスと知らずに殴ったら、他のパーティーメンバーまで巻き込んで全滅したり……。

ブンもそうなのか。今のブンには、この死に掛けのカオス・クロニクルが、とてもキラキラと眩しい世界なんだ。オレにとっては……ヒマな時間を潰す、ゴミ箱みたいな所なのに……。

ブンもやがて思い知るはずだ。この世界は、自分が思っているほどキレイなんかじゃないことに。

MMOと言っても、リアルと一緒になんだ。なりたい自分になんかなれない。結局、ここにいるのは現実の自分だ。

それは他のプレイヤーも同じ。『人間』なんだ。『人間』は……残酷だ。昨日まで友達だと思っていたら、今日は平気な顔して、裏切れるんだ。

だからオレは……誰も信じない。リアルもMMOも、信じられるのは自分だけ。他の奴らは、最後には敵だ。友達ごっここの果てにあるのは、残酷な結果だけ。

ブンにもそれを教えてやらなければならない。実際、ブンだって

ギルドに誘われておきながら、誰にも相手にされていないじゃないか。

「ブンなら、解るはずだ。」

「って、またか！ どこ行った、ブン！」

「ここおおおおお……」

なんと、すぐ真横からプンの悲痛な叫び声が聞こえるではないか。カメラを右に向けるが、そこには誰もいない。

「ブンは確かにそこに存在するのだが、石の壁以外何も無い。すると急に、石の壁から人の顔が生え出てきた。」

「うわあああああ!?!」

「壁にめり込んだじゃった、もうお嫁にいけない、つ……ぐすん」

移動不可状態になって、壁と同化していたらしい。再度リターンを詠唱し、プンを救出すると、村長からクエスト『ゴブリン討伐』を受けさせ、当初の目的地、ゴブリン前線基地へと向かう。

村から歩いて移動すると時間が少しかかるので、テレポーターを利用することにした。

テレポーターは、少々お金を使うが、一瞬で狩り場や他の村に移動できる便利な機能だ。村の広場に突っ立っている若いヒューマンの女性がテレポーターだ。

彼女の前に立つと、プンにゴブリン前線基地へのレポート代を手渡し、移動する。

一瞬で目の前の景色が移り変わり、不気味な背景が画面いっぱいに広がっている。

BGMも、それまでのどかだった村のそれから、緊張感のある、今にも戦いが始まりそうなRPGっぽいのに変わる。

前線基地と言っても、切り崩された岩山に木で出来た簡素で居住性のなさそうな小屋が数軒と、丸太を縦に並べただけの柵が周りを覆っているだけ。

所詮ゴブリンの巣である。MOBのHPもそう高いほうではないので、楽に倒せる。

とはいえ、ここをナメてかかると痛い目に合う。このMOBはHPが20%以下になると、命乞いをしながら、小屋に逃げ出そうとする。

逃してしまつたら……その時は終わりだと思つたほうがいい。

数匹のエリートゴブリンを引き連れて戻ってくるのだ。数は2か3と大したことは無い、問題は奴らの能力が他のザコモOBと一線を画しているという事だ。

その分、倒したときの経験値と獲得金額もバカに出来る量では無いし、高確率で装備アイテムをドロップする。

上級者の中には、あえてこれを狙う者もいる。だが、装備が貧弱

な上、フェイブのプンではまず詰むだろう。

そこで、オレの出番というワケだ。ターゲットを引き離すのは何も、ナイトのヘイトばかりじゃない。

ヒールライトを連発すれば、MOBの優先はヒーラーに向かう。ヒール系のスキルは敵対心を煽りやすく、無闇に連発すればヒーラーが襲われてしまうのだ。

そこを逆手に取る。あえてプンにヒールを連発してターゲットをオレに向けさせる。このレベル帯の攻撃なら、ローブ装備のオレでも十分に耐えられる。

その際にプンに各個撃破させ、一気に成長させる。ちんたらやっている暇は無い。明日は月曜日。学校もあるし、0時には寝ておきたい。

「行くぞプン。オレについて来い」

「あい！ @ @ 〃 なんだかエルくん、頼もしい〜。もしかして、エルくんて弟さんか妹さん、いるの？」

オレの後ろをぴよこぴよこ付いてくるプンが、無遠慮に質問を始める。

「いるよ、二つ下の泣き虫な弟が一人」

「やっぱりー！ エルくんて頼りになる優しいお兄さんって感じがしてたもん^^」

「違つよ、オレは」

と、そこまで喋りかけて後悔した。基本的にオレはリアルを語らない。ゲームはゲームだ。ここは出会い系サイトじゃない。

相手のリアルにも興味がない。オレは、ゲームをしているんだから。

「プンはね。一人っ子なんだあ。いいな。兄弟><」

「そうか」

「エルくんエルくん！ エルくんはどんなお仕事してるの？ プンは高校生だよ^^」

高校生か。確かにそんな感じがするな。リアルのプンも、のほほんとしてて、天然なヤツかもしれない。

「エルくんって落ち着いてるよね。@@ もしかして、30代の大人だったりする！？ キャー！ 渋い！」

「誰が30代だ！？ オレもお前と同じ高校生だよ。高校2年生だ、17歳だ。文句あるかコラ！ あるなら20文字以内で言ってみやがれ！」

しまった。つつい熱くなって個人情報の一部だが開示してしまった。にしても、なかなか失礼なヤツだな、プンは。

「えー@ @ 同い年なんだ。エルくんってやっぱりすごいんだね。プン、尊敬しちゃいます><」

どこに敬意を表す部分があるのか解らないが……やっぱこいつ、
苦手だ。ペースを崩されるし、行動が読めない。

「……ここでもいいか」

ゴブリン前線基地はそれなりに面積が広い。入り口付近は比較的
MOBの数が少ないし、レベルも低めだが、奥のほうに行くと、前
述の小屋もあるしワンランク上のゴブリンも出てくる。

岩山の崖になっている所に、木でできたお粗末な小屋……その周
りには、6匹のゴブリン。当然、リンクする。適正レベルのプレイ
ヤーが突っ込めばたちまちピンチだが、オレはその適正レベルから
20以上高い。

ゴブリンの群れに突っ込んで奴らの注意を引き付ける。一斉に奴
らから袋叩きに合うが、ダメージは一ケタ台だ。

「よし、オレが引き付けている間にやれ、プン！」

「あい！ @ @」

プンの装備している剣が、背後からゴブリンを切り裂く。数回の
斬撃を繰り返すとゴブリンは力尽き、地面に倒れフェードアウトし、
消える。

やはり、ナイトであってもフェイブだ。攻撃力は他の種族のウオ
ーリア並みである。

瞬く間にプンは全てを平らげる。思ったよりもプンの火力は高い

らしい。これならレベル上げにそう時間はかからないかもしれない。
時間が経てば、すぐにゴブリンが出現するのだがそれだと時間が
惜しい。別の場所から数匹引いてくるか。

そう思って移動しようとしたときだ。

スピーカーから、戦闘音が聞こえた。剣撃のSEや、ダメージを
食らったときのSEに、男の太い声。

「他にも狩をしているプレイヤーがいるのか」

「珍しいね@@」

ここからそう遠くない距離にいるようだ。そうだ。丁度いい。そ
のプレイヤーとプンを一緒に狩らせよう。二人が狩り友になってく
れば、プンの育成をそいつに任せてしまえる。

「プン。一緒に狩りをする友達が欲しくないか？」

「欲しいー><」

「なら、ちょっと行ってみよう」

プンを引きつれ、音の発生源のエリアまで行くと、そこでは緑色
の肌の大男が巨大な剣を両手で振るい、ゴブリンを力任せに切り裂
いていた。

「オークだ。オークウォーリアだな、あれは」

6つの種族の一つ、オークは非常に高いHPと高い攻撃力を持っている。特に近接武器を得意とするウォーリアとの相性がいい。

反面、足が遅く命中率も低いが少数の人間には好まれている。おおくの人間は、そのビジュアルで好き嫌いが分かれるところだろう。

かつこよくもなければ、かわいいわけでもない。肌は緑色で、髪もスチールウールみたいに硬そうで、筋肉モリモリ。

はっきり言って、イロモノだ。だが、オーク間での友情は厚いらしく、オーク専用挨拶があるらしい。それくらい一部には人気がある。

「プンもオークにすればよかったのにな」

「えー嫌だよ、かわいくないもん><」

あのオークの大男がプンのようなセリフをしゃべって、死にまくるとする。

……うん。蘇生してもう一回殺すな。オレなら。

「フェイブでよかったな、プン」

「@@@?」

オークがその場にいたゴブリンを全滅させたのを確認して、オレは近寄った。

「すみません、もしよかったらこの子と一緒に狩りしませんか？」

オークは剣を構えたままの姿勢で硬直する。数秒間があつて、返事がきた。

「ぬを。ぼくちん如きでいいんですかい？ レベルも低いし、装備もシヨボーンですぞ（・・・）」

「こつちも似たようなものだし、オレが外部でヒールするんで気にしなくておk」

「ぬを。ほんじゃお言葉に甘えて！ ぼくちんキラ・ヤマモトです、オークウォーリアのレベル21です。別のサーバーから移住してきますた」

「へえ、何で？」

「PKギルドが我が物顔で狩り場占領するんですよ。ぼくちんのメインキャラだったラクス・クラタや、アスラン・ザマもよく彼らの毒牙にかかり……コロニーへの移住を決断したのです。地球の重力の井戸に引かれたままでは、ニュータイプに覚醒できないと思いますて」

……オタクかよ。

それにこのサーバー名、コロニーじゃねーし。

「なんだか解らないけど、すごい理由があつたんだね@！ p u n p u n 3 2 1 だよ〜プンって読んでね^^」

プンがヤマモトの前に出て、くるっと踊って見せた。

「ぬお。フェイブっ娘！ プンちゃんハアハア」

「ヤマちゃんおもしろーい^^ よろしくね！」

またひらりと舞ったブン。ヤマモトは無言であっちにいったりこちのうにいたり、プンの周りをうるちよろしていた。

「何やってんの、ヤマモト？」

「どのアングルが、一番ベストになって、白っていいよねえ。うぶぶ。中尉もそう思わんかね？」

「^^？」

ブンはヤマモトの変態行為に気付いていないらしい。あと、誰が中尉だ。

「この変態が！ やっぱりお前はいい！ あっちいけ、しっしー！」

「ぬお。変態とは失敬な！ 僕は」

ヤマモトのソーシャル『笑う』でオークの巨体が反り返り、豪快な笑い声がスピーカーを振動させ、部屋に響いた。

「ド変態だー！」

GMコールは慎重に

ド変態と開き直ったヤマモト。むさ苦しい、暑苦しい、息苦しい。そして、今もなおプンの背後を動き回っている。ド変態の鑑のような男だ。

はつきり言っただ後悔している。へたをこくと、プン以上に厄介な存在かもしれない。

「やっぱいいや。他を当たるんでさようなら」

こういう事は、さっさと行ってしまった方がいい。失礼だが、なんとなく危ない香りがするのだ。

「そんな！ ぼくちん、プんちゃんの為なら何でもやるよ！」

「そうだよ、エルくん。ヤマちゃんかわいそうだよー><」

プンの心は広い。ヤマモトに背を向け、オレに向き直るとソーシャルで、泣き始めた。そして、その後ろでヤマモトが座って、『プんちゃんおパンツ鑑賞会 ハアハア』をどうどうと開催している。

「ぬを。心優しき我が女神！ あれですか！？ あなたは死なないわ、私が守るもの。でございまするか！？ ぼくちん、プんちゃんとシンクロー率1000%オーバー！ プんちゃんに向けて、ぼくちんのエントリープラグ強制射出！」

最後のは下ネタじゃないか。もう我慢も限界だ、少し脅してやる。

「おいブン。GMコールだ。へんなプレイヤーに粘着されています、セクハラ発言で不快な思いをしているので対応お願いします。ってGMさんに伝えるんだ」

「はい^^」

その後に、『もちろん冗談だ』とブンにウイスを送っておく。

「ぬお、GMコール（。。）」

GM……たぶん、ゲームマスターという意味だと思う。一言で表せば運営だ。不具合が起きたときの報告や、規約違反者を通報する時、GMにメッセージを送る。それがGMコールだ。

もちろん、本当に通報するつもりはない。ブンだって、解ってるはずだ。これは単なる脅し。

ちなみに、重大な規約違反者については、アカウントの停止や、最悪削除される場合もある。

「まあ、もちろんウソだ。だが、これ以上バカな事を言って付きまとうなら」

「エルくん、終わったよ^^」

「ん？何がだ？」

「GMコール^^ 目の前に変態さんがいます>< 私襲われそうで怖いです;; 捕まえてください！ ってGMさんにメッセージ送っておいたの」

「……」

「ガクブル（。）。（）」

「プン、やればできる子なんだよ。いえーい^^v」

「お前はアホか！ 本当にやるなんて何考えてんだ！ そもそも、冗談だつてウイス送っておいたろうが！」

「えー……；； あ、ほんとだあ、気付かなかった。あは（）（）」

あは（）（）じゃねーよ。

すると突然、ヤマモトがフェードアウトして消えて行った。まさか。

「……噂で聞いたことがあるな。規約違反してGMに睨まれたら、特殊なフィールドに転送されるって……」

「え！ ヤマちゃん……ご冥福を祈ります（>人<）」

祈るな。

しかし、また突然ごつい緑の巨人が現れ、豪快な笑い声がスピーカーを振動させ、部屋に響いた。

「ヤマちゃんふつかあああつ！ なんか回線の調子悪いみたいだったけど、直った！」

「回線が切れて落ちただけだったか……。」

「おかえりヤマちゃん^^ノ プンいっぱい心配しちゃったよお」

さつきまで「冥福を祈っていたお前はどこにいった。」

「まあ、もうどうでもいいや。ヤマモト、あつちで一緒に狩ろう。オレがMOB引いてくるからプンと同じのを攻撃してくれ」

「なんだかんだで、貴重なプンと同レベル帯のプレイヤーだ。今日だけは我慢してやる。今日だけは。」

それからさつきまで、プンと一緒に狩りをしていた場所に戻ると、ヤマモトを加えて再開する。

プンだけでもお代わりが必要な状況だったので、周囲からありつたけを引いてくる事にした。他に人がいないのが、こういう時は助かる。

オレがMOBを引つ張る。プンとヤマモトがそれを倒す。オレがMOBを引つ張る。プンとヤマモトがそれを倒す。それをかれこれ20分は繰り返した。

その成果で、プンは瞬く間にレベルが22になり、ヤマモトも25になった。

ヤマモトの火力もまた相当なモノだ。プンと違い初心者ではないので、狩での立ち居振る舞いをよく心得ている。特にスキルを使うタイミングが絶妙だ。

このままレベルが上がっていけば、上級狩り場でも貴重な戦力として色んなパーティーから引つ張りだこになるだろう。

……これさえなければ。

「『オレがガ ダムだ！』……」

「『オレがガ ダムだ！』……」

「『オレがガ ダムだ！』……」

「『オレがガ ダムだ！』……」

「『オレが』……」

「うるさい」

ヤマトはどうやら、攻撃スキルを発動する際にマクロを組んでいるらしく、スキル発動と同時に、上のセリフがメッセージとして表示されるらしい。

他にも、『虎牙 斬！』とか、『オレのこの手が光ってうなる』とか、『分の悪い賭けは嫌いじゃない』とか言っていた。

何を言っているのか、さっぱりわからない、最後の一つだけは。

「しかし、戦ってるときのプンちゃんかわゆす。ハアハア」

「ハアハア言うな、オタクが」

「エルくん、ハアハア^q^」

「ブン、お前まで真似するな」

「中尉、ハアハア」

「エルくん、ハアハア^q^」

「ハアハアうるせえ！ あーもう、10分休憩！ オレ、飲み物取ってくる！」

「いてらー^^」

「あ、ぼくちんコーラでいいおー。ストロー付けといてね、あと、おいしくなるおまじないも、かけてね」

ヤマモトつげえ。

席を立ち、足早に部屋を出て一階のリビングへと向かう。家族はもう寝てしまったらしく、リビングは真っ暗で誰もいなかった。

時計を見ると、すでに11時を回っていた。もう少し狩をして、今日は終わろう。

インスタントコーヒーの粉を愛用のマグカップに入れ、ポットからお湯を注ぎ、それをかき混ぜる。少し、冷ましてその場で一口含む。

やはり、コーヒーはブラックに限るな。

マグカップを片手に階段を昇り、自分の部屋へと戻る。机の前にたどり着くとイスを引いて、こぼさないようにパソコンから離れた場所にカップをそっと置く。

「何だこれ……」

席に着いたオレはその光景に絶句する。エルトが……。HPが0になり、戦闘不能になっていた。

オレ以外のメンバーは無事のようにだ。離席しているのか、キャラが突っ立ったまんまで、虚空を見つめている。

急いでログを確認する。すると、1000を超える大ダメージを数発くらっていたことに気が付く。

バカな。このレベル帯でここまで強力な攻撃を仕掛けるMOBはいない。一体何が……。

その時だ。画面の端を何か横切って行くのがかすがだが見えた。あれは……プレイヤー？

ダメージを一体誰から食らったのかを調べると、オレのキーボードを打つ手がかすかに震えた。

『斬魔』……。

PKだ。

PK襲来

PKとは、Player Killerの略称である。名の如くプレイヤーを殺すプレイヤー……Player VS PlayerのPVVとは違う。

高レベルプレイヤーの一方的な虐殺を差す場合が多い。

特にこの『斬魔』というPKは、1年前からずっと活動を続けている有名なPKだ。

種族はダークエルフ。職業はローグで、レベルは60代後半。武器はデュアルダガー……両手に装備した二振りの短剣だ。一撃の威力は低いものの、攻撃速度とダガーによる必殺のスキル『デュアルスタップ』は高いHPを誇るオークでも、一撃で戦闘不能にする事が出来る。

また、短時間だが姿を消すスキルもあり、気が付くと地面に転がっているなんてこともある。

強敵だ。

それも、『斬魔』はPKギルドのギルドマスターで、うかつにPKKをしようものなら、そいつの所属しているギルドに前面戦争を仕掛けてくる。

畜生……人が席を離れている間にPKとは……。

オレの頭には、先ほど淹れたコーヒーよりも熱く煮えたぎった血

液が駆け巡っていた。

……いや……落ち着け。確か持ち物の中には完全に経験値を復旧させる『神秘の復活薬』があったはずだ。ブン達にこれを使って蘇生してもらえれば、減った経験値は取り戻せる。

とにかく今は……ブンとヤマモトを早くログアウトさせるか、村に帰還してもらおうしかない。

「おい、ブン！ ヤマモト！ 早くログアウトしろ！」

しかし返事はない。まだ席を離れたままらしい。どうする……？

「たっだいまー^^^／」

ブンが能天気にも今帰ってきたらしい。

「あれ？ エルくん何してるの？」

「バカ！ PKされたんだよ、一旦ログアウトしろ！ もたもたしてるとお前もやられるぞ！」

『わかった^^^』。そのブンのセリフが画面に表示されたのと同じ時、短い悲鳴がして、ブンは地面に横たわった。

その後ろに立っていたのは、漆黒の塊。全身を黒いレザーアーマーに身を包み、黒い長髪を風になびかせ、褐色の肌の男が右手の短剣を構え、静かに立っていた。

斬魔だ。

そして、すぐに掛け声とともに画面から消えてしまう。姿を隠し、一撃で仕留める……ヒットアンドアウェイの戦法を得意とするダークエルフロークらしい殺し方だ。

「ヤマト！ いるならすぐにログアウトしろ！」

しかし、ヤマトからの返事は無い。このままでは、全滅だ。

「ぬを。何ぞこれ！？」

「PKだ。早くログアウトしろ。20分後にまたログインしてくれ。その頃にはあいつもここを離れているはずだから」

「わかった。ぼくちゃんがPKKしやる！ プンちゃんをこんなけしからん格好にしたPKは許せん！ ハアハア」

「やめろって！ 相手はレベル60代のダークエルフロークだぞ！ 生き残ってるのはお前だけなんだ！ 神秘の復活薬を渡すからこれでオレを蘇生して」

しかし、ヤマトはオレの言葉を聞かずに飛び出していった。バカな事を……敵うはずがないのに。

ヤマトが走っていた背後に、忽然と姿を表した斬魔。ヤツの体が光を放ち、足元に光が渦巻く。スキルが発動したのだ。

『デュアルスタップ』が。

しかし、スキルは失敗してしまっただけ、ヤマトのHPは1

ミリも減っていない。ヤマモトはそれを実力差と勘違いしたのか、振り向くと大剣を頭上高く掲げ、それを一気に斬魔へと振り下ろした。

だがしかし、その攻撃は虚しく空を斬る。今度は横からの一薙ぎ。それも軽くかわされてしまう。

斬魔が消える。とっさにヤマモトは背後に振り返りデュアルスタツブの一撃に備えようとする。しかし 斬魔が姿を現したのは、ヤマモトの背後。

つまり、もともとヤマモトの正面に出るつもりでいたのだ。

斬魔がヤマモトに攻撃を仕掛ける。スキルではなく、通常攻撃に切り替えたらしい。獣が吼えるような、双剣による連撃。息を付く暇すら与えない。

しかし、ヤマモトはそれに耐える。まったくHPが減っていない……減っていない？

注意深く斬魔の両手を見してみる。ヤマモトのHPが減らない理由がすぐに解った。

素手だったのだ。斬魔は、最後に残ったヤマモトをすぐにPKしようともせず、遊んでいるのだ。

「てめえ！ ふざけんじゃねえぞ！」

激昂したヤマモト。通常のチャットではなく、エリア一帯に響き渡る、シャウトでそう叫ぶ。

なおも素手で殴り続ける斬魔。ヤマモトはその斬魔を攻撃しようとするが一向に当たたる気配を見せない。

当然だ。40近いレベル差に加え、オークの命中率とダークエルフの回避率。分が悪い所の話では無い。相手が悪すぎる。

「「「オレがガ ダムだ！！！！」「」」

ヤマモトのスキルが斬魔に襲い掛かる。奇跡的な確率で命中したその一撃は、斬魔にとっても予想外のことだったらしい。

急に素手で殴るのをやめると、双剣を装備して音も無く消える。

そして次の瞬間にはヤマモトの大きな体が崩れた。

「キモオタザマアwww テラワロスwww」

斬魔がソーシャルで笑う。そして、シャウトでそう言った。

「ちくしょう……」

ヤマモトはそう呟く。完全に遊ばれた上に瞬殺された。だから……やめると言ったのに……。

斬魔はすぐにここを去ろうとはせず、不意にヤマモトへと向かって歩き出した。

そして、ヤマモトの死体の前に立つと、その上に座り込んだ。さらに、ガラクタやゴミアイテムをヤマモトの周りにバラ卷いて、周

困を埋め尽くす。

「ここは緑のゴミ箱。あーくっさ。ゴミはゴミ箱に捨てちゃう俺様
SUGEEEE」

「くそ」

PKは……最悪だ。オレも今は手も足も出ない。……不意打ちでなくとも、オレだって一撃でPKされてしまうだろう。

せつかく積み上げた経験値も、狩り友と過ごした楽しい時間も……こいつらは平然と踏みにじって、その上に唾を吐きかけて嘲笑う。

オレの視線はリスタートボタンに注がれていた。エルトでは勝てない。けれど……あいつなら……。『本当のオレ』なら……こんなヤツ、簡単に……。

リスタートボタンにカーソルを合わせた時。白い小柄な少女が、斬魔の背後に立っていた。

誰だ？

「ヤマちゃんをこれ以上いじめんな><」

ブンだった。

隣を見ると……戦闘不能で横たわっていたはずのブンがいない。まさか、こいつ……蘇生を……経験値の復旧をあきらめて、村に戻ったあと再びここに……戻ってきたのか。

「WWW」

プンが斬魔にしかける。しかし、当たらない。

「フェイブってWWW ちょWおまWWW」

斬魔は依然座ったままである、それでも攻撃が当たらない。だが、プンはそれでも無意味な攻撃を繰り返す。

「ネタやんWWW しかも、灰色の狼って。これは戦争やなWWW」

斬魔はやれやれと言った感じで、起き上がると姿を唐突に消した。

ダメだ。早く逃げろプン。お前の安っぽい友情だか正義感で立ち向かって、どうしようもないんだ。だから、もうやめろ。

そして、再び姿を現した斬魔。

プンは背後を取られて。

斬魔が吹き飛んだ。

吹き飛んだのだ。

斬魔の背後にいた、銀髪の白い素肌をした赤い目の青年に。

フェイブナイト。フェイブナイトの青年である。

「?@.@」

ブンは何が起こったか理解できず、その場に立ち尽くす。

斬魔が体勢を立て直し、フェイブナイトの青年の姿を認めると、ターゲットを変更し、そちらに向かう。

フェイブナイトの青年も、斬魔に向かって走り出した。

……ムダなことだ。

あいつには、勝てない。

フェイブナイトの青年はヤマモト以上に巨大で凶悪そうな剣を構える。

斬魔は、馬鹿の一つ覚えのように姿を消して、青年の背後へと回り込もうとする。

フェイブナイトの青年の足元に光の渦が巻き起こり、それが体全体に行き渡る。

そして、その刹那に姿を現した斬魔が間髪入れずにデュアルスタツプを叩き込んだ。

しかし、青年には何のダメージもない。ヤマモトの時のようにスキルが発したわけではない。確かに命中していた。

だから、斬魔はあいつには、勝てない。

「ブン。よく見ておけよ……あれが、このサーバーで最強のナイト……フェイブナイトの椀だ。そしてあれが、60レベルで覚えるフ

エイブナイトの神スキル、ヴァンガード……」

椛、舞う

ヴァンガード。確か英語で前衛っていう意味だったと思う。

このスキルが神スキルである理由は、フェイブの特性と関係している。これまで何度も触れてきたようにフェイブは他種族よりも飛びぬけた攻撃力を持っている。

それは、近接物理職で一番攻撃力の低いナイトですら、他種族のウォーリア以上の攻撃力を持つ。

しかし、最大の弱点が打たれ弱さだろう。それを克服するのがヴァンガードである。

ヴァンガードは、スキルを使用したプレイヤーの攻撃力と防御力を入れ替えるスキルなのだ。

仮に攻撃力2300 防御力 560なら、それが攻撃力560
防御力 2300となる。

このスキルはトグル型……ようするにスイッチのように、オン・オフする事が出来るもので、リアルタイムに使用することができる。

椛はこれを絶妙なタイミングで、攻撃の瞬間にオフにし、防御の瞬間オンにすることができる。はっきり言ってかなり面倒というか、細かい作業であったりする。

そのお陰か、1年前から『トーナメント』で勝ち続けており、現在ではナンバー1の地位にいる。

その椀が……目の前にいる。

何故ここにいるのか？ 理由は簡単だ。斬魔がプレイヤーを狩るPKKなのに対して、椀はPKKを狩るPKKなのだ。

おそらく、この辺りに網でも張っていたのかも知れない。斬魔に対して個人的な恨みを持つものは少なくないので、斬魔を見かけたという情報を誰かが椀に流した可能性がある。

不意に斬魔が動いた。ヤマモトの時と同じ様に姿を消し、椀の前に現れる。椀はすぐさまヴァンガードを展開。嵐のような斬撃を大剣で受け止める。

椀はナイトでありながら、盾を持たない。その代わりに武器の中で一番攻撃力の高い、大剣を装備している。これは、ヴァンガードの恩恵を大きくするためだろう。

オレは二人が戦っている間に、プンに神秘の復活薬を渡して、蘇生してもらおうと、すぐにヤマモトにリザレクションをかけた。

再び視線を彼らの戦いへと移す。斬魔が押されている。ヴァンガード状態の椀に傷を付けるのはそう容易いことではない。あとは時間の問題だろう。

再び斬魔が消える。椀は不意打ちに備える。しかし、5秒経っても10秒経っても奴の姿は現れない。

「あ！ エルくん下見て！」

プンの言うとおりに、崖の下を見ると逃走中の斬魔の後姿があった。
……逃げたか。

「プン、ちょっとあの人にお礼言ってくるね^^」

プンは戦いが終わり、大剣を背中に背負い、戦闘状態を解除した
椀に駆け寄った。

「助けてくださってありがとうございます」

早速、打ち間違えたらしい。

「いえ、別に。PKを潰すのが趣味なんでね」

椀は素っ気無くそう答える。

「強いですね、ビックリしちゃいました@@w」

「俺なんか……大したことないですよ。カインさんに比べたら……」

「カインさん(?!?)」

「ああ、初心者の人ですか？ なら知らないのも当然ですかね。カ
インさんは、一年前までこのサーバー最強のナイトだった人です。
俺も初心者だった頃、色々お世話になったっけ」

「へえ、その人。今はどうしてるんですか??」

「一年前くらいに……ちょっと事件があっつてね。それが原因で突然

誰にも言わずに引退しちゃったんですよ。今はどうしているのか…」

椀は、背中を向けこの場を去ってゆく。

「斬魔がまた別の狩り場に現れたようなので、行きます。狩り…頑張って下さい。それでは」

次の瞬間、椀の姿はそこには無かった。

「あの人、すつごく強かったね@@w プンもあんな風になりたいなあ〜><」

「ぬを。プンちゃんの好意がさっきのフェブ男に向かっている！？許すまじ、あの男め！」

ヤマモトのほうも、落ち着いたらしい。目の前で椀が仇を討ってくれたこともあるのだろう。……逃がしてしまったが。

「あれね。そういえば、エルくんって椀さんと知り合いだったの？椀さんの事、詳しくかったみたいだし@@」

「別に。このサーバー最強のナイトの情報くらい、ベテランならみんな知ってるさ。椀はPKKとしても有名だしな」

「ふーん、そうなんだあ。」

椀が消えた方向へとカメラを向ける。

ふと、思い出す。あの日、オレの前で装備も何も付けず、スキル

の使い方をまったく知らずに狩をしていた、一人の初心者プレイヤーの事を。

……強くなったんだな、椋。

目覚め リアル

椛が去って、数分後。日付が変わってすでに午前0時10分。オレ達は今日はもう、狩りを終えて解散することにした。

リターンを使用して、ゴブリン前線基地から一瞬でミロンの村へ。村の広場で輪になって別れの挨拶をそれぞれ告げる。

「ぬお。もう月曜か……ああああああああ！ うつだ。明日からまた仕事だ（。）。上司ブチ殺してええええ」

ヤマモトがうなった。社会人だったのか、こいつ。もう少し落ちて着いてもらいたいものだ。

「ヤマちゃん、がんばらっば」

「早く寝ろ」

「あゝい。そんじゃ、ブンちゃん、中尉おやすも」

ヤマモトの姿はすぐに消えうせ、広場に残ったのはオレとブンだけになる。

「エルくん。ありがとねー！ プン、今日だけでレベルが9も上がったよ！」

本来ならば10上がったはずなのだが、斬魔にPKされたお陰でプンのレベルは一つ下がってしまった。

「明日もよろしくね」

明日……いや、今日の事か。インするわけがないだろう。お前にはヤマモトという、頼りになる狩り友ができたんだ。

これ以上オレを……振り回すな。

「オレは、今日用事があってインできない」

「じゃあ、明日だね^^！」

「明日も用事がある」

「じゃあ、明後日^^」

「明後日も用事がある」

「明々後日も用事がある」

すると、急にブンから返事がなくなった。沈黙すること3分……。そのままログアウトしてやるうかと思っただが、不意にブンが何かしゃべりだした。

「ごめんね、ちょっとギルドチャットに夢中になってた」

オレの事は無視してギルメンと仲良くおしゃべりか。

「まあ、そういうことだから、しばらく忙しくてログインできないんだ。なんだったら、ギルメンに声掛けてみるよ？ きっとお前の育成手伝ってくれるって」

「無理だよ」

「は？ 無理ってことないだろう」

消極的な奴だな……。もう一言いつてやるか。しかし、オレの言葉はプンの一言で遮られる。

「だって……プンのギルド……もうないから」

「え？」

「追放されちゃった^^； プンが斬魔って人に攻撃したから、それを理由に戦争を仕掛けるっていわれたらしいの」

あの時か……斬魔も確かにそんな事を言っていたな。

「だから、戦争を起こさなかったためにプンを追放するんだって。しょうがないよね。みんなに迷惑かけたくないし。プンが抜けてみんなが喜ぶんだったら、しょうがないよね」

あの斬魔がそれくらいで引き下がるとは思えないが……。これが、今の灰色の狼のやりかたか。変わったんだな。

「だからね、プン、もう一人だよ。でも、エルくんがいるから平気
^O^」

厄介な事になった。狩り友ができたとはいえ、ヤマモトは社会人だ。そうなれば、学生であるオレ達よりもインする時間は短いし、平日は夜くらいだろう。

となれば、同じ学生であるオレを頼ってくる頻度が非常に高い。ギルドすら抜けてしまったブンに、もはや知り合いというのはオレかヤマモトだけだ。

オレは一人がいいのに……。このままでは、ブンが40レベルになるのが遠ざかってしまう。他にも狩り友が必要だ。

くそ……。仕方がない。もう少し付き合ってやるか。

「ブン」

「？」

「明日の予定なんだけどな、オレの見間違いだった。明日はなんとかインできそうだ」

「やったあ」

ほんの少しだけ……。けどな。目下の目標は、こいつに狩り友を作ること。オレがいなくても、一人で野良のパーティーに行ったり、ソロできるだけのプレイヤースキルを身につけてもらう。

問題山積みだな……。

「じゃあ、寝るな。ブン、お前もさっさと寝ろよ、遅刻するぞ」

「おやすみ、エルくん^^」

オレは、ログアウトした。

PCの電源を落とし、ベッドの上に頭から突っ伏する。すると突然眠気が襲い掛かってきた。

……風呂は朝起きたら入ろう。

それにしても、厄介なことになったな。p u n p u n 3 2 1 ……リアルはどんな奴なのだろうか？

一度、顔を拝んでみたいものだ。

そんなことを考えているうちに……オレの意識は闇の中へと沈んでいった。

眠い。これは相当に眠い。昨日、夜遅くまでゲームをしすぎたせいか……。

学校の自席で、俺は何度もあくびをかみ殺した。なんとか遅刻せずに済んだものの眠気が何度も俺を襲ってくる。

季節は9月。夏休みが終わって、今だ休み気分が抜けきらないクラスメイト達は、朝から元気いっぱいいでうるさい。少しその元気を分けていただきたいもんだ。

と、まどろみながらそんな事を考えていると、チャイムが鳴って担任が教室に入ってきた。

朝の挨拶と、連絡事項の確認。ホームルームも終わり去っていくのかと思いきや、唐突に教室の扉を開けて、外に向かって手招きをしている。何だろうか？

クラスメイト達は皆、扉に注目する。そして、そこから一人の女子生徒が顔を出す。

同時に、クラスの男子生徒ハイエナどもは、歓声をあげる。もちろん、俺もだが。

ゲームで例えるなら……カオス・クロニクルで例えるなら、エルフ。涼しげな眼差しと、柔らかいシルクのような肩甲骨あたりまで伸びた髪。チェリーピンクの唇から紡ぎ出されるのは、どのような声なのか。

日本人形の様な美しい顔。胸も……適度に大きい。美少女だった。

「えっと……相羽あこば 真理奈まじなです。親の仕事の都合でこの近くに越してきました。転校してまだ右も左も解らないので、助けていただけると嬉しいです」

転校生……相羽 真理奈。担任からの紹介と自己紹介を終えると、彼女はそよ風のように優しい歩調で歩き、指定された席へ……俺の右隣へ舞い降りた。

「よろしくね」

柔らかい微笑み。微かに漂う石鹸の香りが鼻腔をつき抜ける。まるで、夢を見ているようだった。

「あ、俺。渡辺翔しゅう。これからよろしく」

120円の転校祝い

なんとか自分の名前を言えたが、俺は内心かなりどきどきしていた。こんなかわいい子が俺の隣にやってきた。どこぞのギャルゲーじゃあるまいし、まだ俺は夢を見ているんじゃないかとも考えてしまっ。

こっそりと右へと視線を向ける。ホームルームを終えた教室は、一時間目までの僅かな間に少しでも相羽さんと仲良くなつてやろうという下心丸出しの男子と、自分達のグループに引きずりこもうと画策する女子達で人口密集地となっている。

転校生というのは、それだけで話題性があるものだ。それもこんな美人じゃ、話しかけたくもなるか。だが、俺にはお隣さんというアドバンテージがある。

何も焦ることは無い。

話しかける機会なんていくらでもあるさ。そう思つて、再び右へと視線を向けると……。

相羽さんの横顔を偶然視界に捉えることが出来た。

違和感。そうだ、些細なことなのだが……そこに違和感を感じる。

すぐ右には、にぎやかなクラスメイト達を絵に描いたような光景があるのに、その中心の相羽さんは楽しそうじゃない。

口は笑っているけども……目が笑っていない。

どれだけ価値があるのか解らない、ダイヤモンドのような輝きを放つキレイな瞳は、何も写していない……そんな気がした。

やがてチャイムが鳴り、クラスメイトはすぐに自分の席へと戻るため散っていく。そして、唐突に訪れた静寂。

相羽さんは緊張しているのかもしれないな。転校初日に一気にこんなに話しかけられたら、ウンザリしてしまうかもしれない。そっ
としておいてあげるのが、一番なのかも。

やがて、一時間目の授業が始まり……二時間目、三時間目、四時間目が終わって、昼休みになった。

俺は席を立ち、学食に向う。

「ナベ！ 学食？ 俺も俺も。一緒に食おうぜ」

クラスメイトの一人が俺に話しかける。そうそう、俺のあだ名はナベとか言われてる。一時俺の事をオナベとか冗談で言い出した輩がいたが、そいつにはデュアルスタップ（割り箸でだが）を決めてやった。

ナベとオナベじゃ意味が全然違うだろう。

数人のクラスメイトと一緒にじゃれ合いながら学食へと向う。適当に空いている席を見つけてそこを拠点に、半分を食券係りにして半分を拠点防衛に当たらせる。

俺と稲田というクラスメイトが席に残り、他の奴らを待つことに

なつた。

「なあ、相羽つてさ、この前お前が貸してくれたエロいDVDに出演してた、AV女優に似てない？ いや……この前のエロゲーのヒロインかな？」

自称エロゲー博士。通称歩く下ネタ製造機。それがこの稲田大河という男であった。当然、クラスの女子からは嫌われている。

運動系の部活に入っているでもなく、スポーツ刈りでメガネをかけたその風貌は地味という言葉がピッタリと似合う。

「ナベはさ……もう見たの？」

「何が？」

「相羽のパンツ」

赤面しそうになる。こんな学食のど真ん中で、パンツ見たのとか、ありえない。

「見るわけねーだろ！」

見たいけどな。そんな機会があるものなら。

ちなみに、稲田は純白が好みらしい。クマさんも捨てがたいらしいが……まるで健全な男子高校生の鑑の様な奴だ。もちろん見習うつもりなどないが。

……俺はしましまがイイな。

その後、稲田を放っておいて俺とクラスメイト達は昼食を済ませると、それぞれ学食で別れて昼休みの余暇を過ごすことになった。

俺は学食の隅にある自販機へと向かい、カフェオレでも買うことにした。財布の中から小銭を取り出し、一枚一枚入れる。

ボタンを押そうと手を伸ばしたとき、石鹸の香りがたちこめた。

この香りには覚えがある。そう、彼女だ。

相羽さんが隣に立っていた。彼女は一体、何を買おうとしているのか。普段なら、クラスメイトの女子が青汁を飲もうがプロテインジュースを飲もうが知ったことでは無いが、今日は特別気になった。

視線は彼女に向けていないので、気付かれていないはず。そっと、慎重に。隣に視線を移す。

不意に俺の指先に何かが触れて、ガコン。と音が鳴る。足元の取り出し口を見ると、黒い缶が吐き出されていた。

「……………あ」

間違えてボタンを押してしまった。しかも……………缶コーヒーのブラツクだ。

まずった。今日はブラックという気分じゃない。少し甘いカフェオレが飲みたかったのに……………。

「それ、どうしたの？」

と、ふと隣から小鳥のさえずりが聞こえてくる。

「あ、相羽さん。いや……間違えちゃって。困ったな、俺、カフェオレ飲みたかつたんだよね。もう一本買うか……」

「ちょうだい」

「え？」

「私、ブラック好きなんだ。コーヒーはブラックしか飲まないから意外だった。女の子がブラック飲むのって、俺にとってはちょっと意外だ。素直に尊敬した。」

なんか、大人っていう感じがだ。

「あ、うん。お金はいいよ、転校祝いあげる！」

「ほんと？ えーと……渡辺くん？ だったよね？ 転校祝い。ありがたくいただくね」

微笑んで、缶のプルタブに白い指が触れる。今、俺は思った。

プルタブになりたい。

そして、黒い缶が……チェリーピンクの唇に……吸い寄せられ。

触れる。

直後、黒い液体が俺のコーヒーが……彼女の中に進入する（この表現工口いな）。

苦さに顔をしかめるでもなく、おいしそうに飲み干す相羽さんの顔には、幸せという字が顔に書いてあるといったような満面の笑み。天使だ。

今、俺は思った。

コーヒーになりたい。

「転校祝いごちそうさま。また教室でね、渡辺くん」

そつとゴミ箱に缶を捨てた相羽さんは、まるでテレビのリモコンの消音ボタンを押したかのように静かに音も無く去っていった。まるで、風のように。

俺はそつと願った。120円の転校祝いが、恋の始まりになりますように。

目標を持つことは、ステキな男性への一歩？

突如俺の願いを遮るように稲田がやってきて、目の前のゴミ箱におもむろに右手を突っ込んで黒い缶を取り出した。

「ふひひひ！ ナベ、悪いがこいつは俺がもらう。相羽の飲んだコーヒー……」

稲田は気持ち悪い笑みを浮かべながら、学食を去っていった。缶をどうする気だ。

ちゃんと言ってやるべきだったか？ 学食の自販機の横にはゴミ箱が二つある。うち片方には先ほど相羽さんが捨てた缶が入っており、もう片方には柔道部3年生の佐藤先輩……身長1.9メートル、体重0.12トン。マウンテンゴリラ佐藤の異名を持つ、彼が飲み干した缶が入っていたのだが……どんな味だったのか、後で稲田に聞いてみよう。あいつには相応しい末路だ。

学食から教室へと帰還すると、自分の席に着こうとしたら生徒の山ができていて、それは不可能となった。

相羽さんを中心とした人の渦は、楽しそうな笑い声を教室に振りまき、それに参加しなかった者は教室の片隅で暗く寂しく一人の時間を過ごしている。

邪魔だな……こいつら。だいたい、相羽さんにそんな付きまとつたら迷惑だろう。彼女の気持ちも考えてあげるべきだ。

溜め息を付いて手近の空いてる席に腰を落ち着かせ、会話の内容

に耳を傾ける。

「相羽さんって彼氏とかいるの？」

早くもプライベートに突っ込んでいる奴がいるな。いいぞ。もっと聞き出せ。

「いないよ」

相羽さんは、はにかんだような声で、恥ずかしそうに答える。ついでに誰か好きな異性のタイプも聞き出してくれるとありがたい。

「じゃあじゃあ！ どんな男の子がタイプ？」

「マジメな人かなあ。しっかりと目標を持っていて、それを最後まで成し遂げる強い意志を持った人」

むむ。マジメというのは、俺にピッタリと当てはまる。目標を成し遂げる強い意志……か。

とりあえず、投げっぱなしにしていたジグソーパズルを帰ったら完成させよう。

と、そんな事を考えていたら昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴って、人の渦はバラバラと散っていった。

その後、5時間目と6時間目を終え、今日一日の授業が全て終了する。

ホームルームが終わると、相羽さんは女子数名に連行され、教室

から出て行った。カラオケに行くらしい。

俺も誘われたが、今日は用事があるので泣く泣く見送った。相羽さんの歌……聴きたかった。

何を歌うだろうか？　もしかして、アニソン？　アニソンとか歌わせたら、萌えるな。ああ、行きたい。けど、行けない。

俺は、教室から去っていった彼女の後姿の残像を目に焼き付けたまま、我が家へと帰宅した。

晩御飯を食べて自室に戻ると、オレは机の上のノートPCの電源を入れ、立ち上げる。

食後のコーヒーを机の端に置いて、カオス・クロニクルの世界へ。

IDとパスワードを打ち込み、キャラクター選択画面へと移動すると、そこには二人の少年が青空をバックに草原で佇んでいた。

オレは、金髪の少年の隣に立っている青い髪の少年、エルトを選択する。

ローディング画面が表示され、待っている間にコーヒーを一口すすする。舌の上に広がる香ばしさと、ほんのりとした苦味が脳を刺激し、意識を覚醒させる。

これがないければ始まらない。

やがて、ディスプレイにはミロンの村の景色が映し出され、目の前にはフェイブの少女が立ち尽くしていた。

「エルくん、遅い……」

「よう、ブン。ってずっと待ってたのか？」

「うんー！」

よほどヒマなんだな、こいつ。勉強とか大丈夫なんだろうか？いや、案外これでいて頭はかなりよかつたりするのかもしれない。

「さて、今日は……そうだな。お前、パーティーリーダーになってメンバーを集めてみる」

「ええ@@@」

「ええ。じゃないよ。一番早いのは、同じレベルの仲間を集めることだ。それを繰り返している内に、仲が良くなって友達になる。そうなると、その仲間と固定メンバーで狩りにいくこともあるだろう」

「でも、ブン。知らない人とお話するのは苦手。。」

「じゃあいい機会だ。苦手を克服しろ。お前には明確な目標がない。いつまでもオレにぶらさがっているだけじゃダメだ。独り立ちできるだけの知識とスキルを身に付ける。オレはお前の保護者じゃないんだからな」

ちょっとキツイ言い方になったかもしれないが、これはプンの為でもある。プンの職業はナイトだ。ナイトはソロ向きの職業じゃない。今のレベル帯ならばソロはまだなんとかできるが、高レベルの狩り場になればなるほどソロは困難になる。

だから早めにパーティーに慣れさせる必要がある。

「いいか、プン。まずメニューを開いて、そこからパーティーマツチを選ぶんだ。そしたら、パーティー作成ボタンを押して、コメントに『狩り友募集。一緒に炎の祭壇で狩りしましょう^^』と入力しろ」

「わ@@@ ちょっと待って><」

トロ臭い奴だな。再びコーヒーを口に含み、プンの作業が終わるのを待つ。パーティーマツチ（以下マツチ）を作ってもすぐに他のプレイヤーが来るわけでもない。

少し、このカオス・クロニクルの世界観と職業についてお勉強させてやらないとな。

猫耳魔法少女は？

カオス・クロニクルは、6つの種族と8つの職業の組み合わせでキャラの能力が変わる。

まずは種族。

ヒューマン。平均的な能力値を持つ初心者向けの種族で、どの職業とも相性がいい。

エルフ。攻撃力と魔力が低く打たれ弱いですが、回避率や攻撃速度、詠唱速度が高いので、アーチャーや、ヒーラーと相性がいい。

ダークエルフ。攻撃力と魔力はヒューマンを少し上まる程度だが、クリティカル率とクリティカル時の攻撃力が非常に高い。その分エルフよりもさらに打たれ弱い。ローグ、ウィザードと相性がいい。

オーク。全種族中最高のHPを誇り、一撃一撃の攻撃力が高い。しかし、速度に関しては全種族中最悪で、特に後衛の魔法系職業とは相性が悪い。とりわけ、ウォーリアが一番相性がいいが、ナイトという選択もある。

ドワーフ。能力はヒューマンを劣化させた感じになる。どの職業もこなせるといえば、こなせるが反面特にとの職業と相性がいいというわけでもない。しかし、ドワーフは唯一生産系のスキルを使えるという魅力がある。

フェイブ。低いHP。低い防御力。それを補って有り余る攻撃力、魔力、MP、速度、回避率。基本コンセプトは『殺られる前に殺れ』

、『攻撃は最大の防御』と言ったところか。実装当初はここまで極端なパラメーターではなかったのだが、ナナメ上行くアップデートのおかげでネタと化した。

次に職業。

ウォーリア。剣、槍、斧・鈍器、デュアルソードを使いこなす近接戦闘のエキスパート。スキルはジャンプして目標に飛び掛る『メガクラッシュ』や、ダメージを与える『クリティカルブレード』など、多彩で派手なエフェクトのスキルが充実している。

ナイト。剣と盾を装備する。パーティーの壁。ハイトスキルを使用して自身にターゲットを固定させたり、スキル『ファイナルプロテクション』で防御力を一時的に底上げすることができる。

ローグ。デュアルダガーを装備する。暗殺者。一撃で敵を仕留める事も可能な『デュアルスタップ』に、5秒間姿を消す『サイレントステップ』で敵を不意打ちできる。

アーチャー。弓を装備する。遠距離からちくちくと攻撃でき、視点モードを切り替える事で、ピンポイントで相手の部位を攻撃できる『スナイプ』が使える。

ウィザード。攻撃魔法を使いこなす。魔法書を装備する。地水火風の属性攻撃魔法を使いこなせるが、覚える魔法は種族によって一部異なる。例えると、ヒューマンが覚えるブレイズアローはフェイブは覚えず、代わりにダークアローを覚える。

ヒーラー。回復魔法の使い手。杖を装備。回復魔法全般と、一部だが強化魔法^{バフ}も覚える。このヒーラーの技量によってパーティーの

生存率が大きく変動する。

サマナー。召喚獣を使役する。装備は杖・魔法書。使役できる召喚獣は、狩り場に出現するMOBである。自分のレベル+5までのMOBと召喚契約を結べるが、最大3匹までしか契約できない。使役できる召喚獣は原則一匹のみである。主人のレベルに合わせ召喚獣もレベルが上がるので、こだわりのあるプレイヤーは、ゴブリンを最大レベルまで育て、それを最高狩り場で使役するという。

エンチャンター。強化魔法（バフ）を使いこなす。装備は特に何の縛りもなく、全ての武器を装備できる。が、攻撃スキルもないし、攻撃魔法もない。しかし、自分を含めたパーティーメンバーの能力を大幅に強化する強化魔法（バフ）を使えるので、ある程度のソロは可能である。ナイト、ヒーラーに続いてパーティー狩りでは必須の職業だ。

「……こんなもんかな。わかったか、ブン？」

返事がない。

「ブン」

しかし、返事はない。

「ああああああ、ごめん。寝てたzzz」

「寝落ちとは、やってくれるな」

「だって、エルくんの説明長いんだもん；O；」

「お前はアホか。これくらい頭に入れておけ。基本だ。できる前衛つてのは後衛の経験もあるし、できる後衛つてのは前衛の経験があるもんだ。互いが互いを思いやれば、それは自然に理想のパーティの動きになる。だから、公式に載ってる全種族、全スキルのデータを頭に入れておけ」

「そんなの無理だよ…… あ、それならエルくんもヒーラー以外の職で前衛やったことあるの??」

一瞬答えるべきか躊躇した。しかし、自分で吐いた言葉を自分で踏み潰したくない。ここで『やったことがない』なんて言ったら、できる後衛じゃないと自分で言ってしまうようなモノだ。プンにナメられるわけにはいかない。

「まあ、な」

「おおw@@w」

それ以上答えるつもりは無いので、話題を変えようとした時、いいタイミングでヤマモトがログインしてきた。

オレとプンの真後ろにヤマモトの巨体がうつすらとフェードインして、カオス・クロニクルの世界に形作られていく。

「ソロモンよ、私は帰ってきた!!」

何のセリフだか解らないが、またもシャウトでエリアー帯にヤマモトの声が響く。

「ヤマちゃんこん^^」

「ぬお。ブンちゃん、今宵も一段とハアハア」

「ハアハア^q^」

「お前らヤメロ」

ブンがヤマモトに連られ、ハアハア言い出したので止める。それにしても、予想よりも早くヤマモトがログインしてくれたので助かった。

「いや〜とりあえず、仕事放り出して帰ってきた！ 上司が何か言っただけ無視してやったw」

……ダメな大人がここにいる。

「そんなことしてたらクビ切られるぞ。オレはよく解らないけど、再就職って難しいんだろ？ てか、それって大人としてどうなのよ？」

「てへ、中尉にほめられちった（ノノノノ）」

何を言ってもダメなようだ。それ以上何も言わないことにして、ブンの開いたパーティーマッチに再び目をやる。

「おい、ブン。パーティー希望者が来たみたいだ。えっと、すperiおる……だな。このすperiおるって奴を招待しろ」

マッチには一人のプレイヤーが顔を出していた。名前はすperiおる。職業はドワーフエンchanター。エンchanターか。都合がい

いな。

ブンが四苦八苦しなからすぺりおるを招待する。事前にオレとヤマモトもパーティーに入っていたので、4人分のHPバーが画面上に表示される。

「よろしくう」

すぺりおるの発言。と、それと同時にオレ達の前方にドワーフの少女がとことこと歩いてきた。

このカオス・クロニクルにおいて、ドワーフはヒゲもじゃジジイという想像は間違いである。

ドワーフは男女とも、小学校高学年くらいの幼い少年少女である。こちらもおークとは違う意味で人気が高い。特に、ドワーフ女は。

目の前に現れたドワーフの少女は、頭に猫耳を装着し、ピンク色のローブ（これまた丈が短い）、杖を装備していて魔法少女然としていた。

「ぬお。す、すぺりおるたん、ハアハア」

案の定、ヤマモトのハアハアがすぺりおるに炸裂する。

「かわいいー！><w すぺりおるちゃん、かわいいー！」

ブンは、ドワーフ女を見るのが初めてなのか、近寄って抱きつくソーシャルをする。ちなみに抱きつくソーシャルは、相手側の了解を得られないとできない。

「レベル28のドワーフエンチャンターだぜい。緑のおっさん、ムサイから近寄るな。ねーちゃんエエ尻しとるのう」

「ぬを。まさか、すperiおるたんって……」

「ああ、俺、ネカマだから」

ドワーフ女の8割は中身が男だという噂があった。噂は真実らしい。

いつかあの日のように

すperiおるの中の人。まあ、ヘンに女言葉を使われるよりもオープンな方が、さっぱりしていいかもしれない。

ドワーフ女、通称ドワ娘は一部に熱烈な人気があると先ほど説明したが、ドワーフ男、通称ドワ坊も人気がある。これもまた、一部に。

そのドワ娘とドワ坊だけで構成されたギルド『幼稚園』は、ドワ信者の巣窟である。待て、そういえば……幼稚園のギルドマスターの名前はスペリオルだったはず。

こいつ……スペリオルのセカンドか？

ちなみにセカンドは、二番目に作成したキャラクターという意味で、サブキャラとも言われる。

すperiおるの装備を見れば、一目でこいつが上級プレイヤーのセカンドキャラだという事が解る。

今のレベル帯で装備できる最高グレードの装備品に、アクセサリの猫耳。猫耳はけっこう高価なアイテムであるし、そもそも初心者プレイヤーはそんな所に金を使う余裕は無い。

「もしかしてあんた、スペリオルか？」

オレは思い切って聞いてみた。

「ありゃ？ なーんで俺の事知ってんの？ メインで会ったっけ？」

「いや、名前を見てなんとなく……」

本人だつたらしい。これは助かる。スペリオルはこのサーバーでも屈指のウォーリアである。彼女……いや、彼か。彼のプレイスキルがあれば、オレのアシストもそんなに必要ではないかもしれない。

「んー？ プンってばかなりキャラメイクいじくつたなあ？ 珍しいぞ、それ」

すperiおるがプンの周りをちよろちよろと動き回る。そして、プンを凝視したまま呟いた。

「うん^^ 5時間かけてこの子を産んだのです><v」

カオス・クロニクルのキャラクターメイキングは自由度が高い。鼻の高さ、位置、唇の大きさ、耳の大きさ、輪郭など……いじりだしたらキリがない。

だから、サンプルがいくつか用意されているのだが、キャラに愛着がある奴は最初ここで大いに悩むらしい。それにしても、5時間つて……オレなんか、サンプルAの目つきと髪色いじっただけだぞ。

「ぬを。そうだったのか、プンちゃんハアハアの秘密はそこに！」

普通、5時間かける奴はいないと思うが……やはりプンは変わっている。

「それじゃ、早速『炎の祭壇』に向うか。おっと、その前にちよっ

と飲み物入れてくるよ」

「いてら^^」

机の端に置いてあったマグカップを手に取り、リビングへと向う。リビングのドアからは光がもれ出ていて、テレビの賑やかな音が暗い廊下に響き渡っていた。

「あら、またコーヒ―？ 成長期なんだから、あんまり飲んだら体に毒よ？」

ドアを開けると、母親がテーブルで家計簿を付けていた。マグカップを右手に持つオレの姿を見て、飲みすぎないように注意をかける。

「別に……あれ、お父さんは？」

「残業よ。あんたと潤の学費を稼がなくなっちゃならないんだから、頑張ってもらってるの。お母さんも来週からパートに行かないと……あんたも来年受験だから、予備校か家庭教師を付けないといけないわね。あゝ出費がかさむわ。宝くじでも当たらないかしらねー」

母親の声を背に、戸棚からインスタントコーヒ―の瓶を取り出し、マグカップへとそれを入れると、その上にお湯を注ぐ。白い蒸気が立ち上りそれが鼻腔を突きぬけ、コーヒ―の香りが脳を刺激する。

「学校はうまくいってるの？」

「別に……」

「お母さん、心配なのよ？ 潤はたくさんお友達を連れてくるけど、あんたはいつも家でゲームばかり。成績は下がったりしてないから、やめろとは言わないけどね。友達をつくる事も大切なのよ？ 解ってるの？ まり」

母親の話が終わる前にリビングのドアを閉めた。会話の中に出てきた潤というのは二つ年下の弟だ。

小さい頃からそうだった。父親の仕事の都合で転校を繰り返し、長い付き合いの友達が出来たことは無い。弟は正反対で、すぐに誰とでも仲良くなれる性分らしい。

確かに、現実には……リアルには友達が少ないけど、ネットには……どんなに距離が離れていても、場所が変わろうとも、何でも話せる仲のいい友達がたくさん『いた』。

そうだ。1年前までは……こんな風に打算で物を考えるズルい人間じゃなかった気がする。プンのような初心者とたくさん狩りに出かけてすぐに仲良くなって……。

でも……。

また作れるだろうか？ 新しい場所で……新しい仲間を。

脱ぎ散らかした制服と、今日の授業で使った教科書。ゴミ箱をひっくり返したような床。そんな地獄絵図のような部屋の中で、そこだけは輝いていた。

机のイスを引いて、腰を落ち着かせると淹れ立てのコーヒーを口に含み、カオス・クロニクルの世界へと戻る。

「ただいま」

「エルくんおかー^^」

「ぬを。中尉、おかえり」

「おかえりい」

待っていてくれた。昨日今日出会ったばかりの3人は、確かにそこにおいて、オレの事を待っていた。

「行こう、炎の祭壇へ」

エルトは歩き出す。その背中を追うように3人が付いてくる。いつかまた……1年前のようにオレはこいつらと仲良くなれるのだろうか？

狩り場はみんなのもの

村のテレポーターまで歩いて、そこから一気に炎の祭壇へとテレポートする。

炎の祭壇は30代前半の狩り場だ。けっこう格上のMOBがうるちよろしているが、今日はエンチャンターもいるし、HP管理はオレが一手に引き受けるので、全滅することは無いだろう。

ちなみに、MOBと9レベル以上の差があるので、オレには経験値が入らない。だから、あえてそれを利用してオレもパーティーに入っている。こうすれば、オレが経験値をムダに吸ってしまうこともないし、パーティーメンバー全体に効果が及ぶ『グループヒールライト』が使える。逐一メンバーのコンディションが確認できるというのも大きな利点である。

めらめらと燃え盛る炎の沼。辺り一体は炎以外に何もなく、火属性のMOBがうじゃうじゃと沸いている。中央の祭壇……単なる岩山にはしごをかけた程度の物だが、そこにエリアボス『フレイムガイスト』が待ち構えている。

このメンツでは心許ないので討伐はしない。

カオス・クロニクルは最大で6人までパーティーを組める。基本的には、ナイト、ヒーラー、エンチャンター+それ以外の職3人という構成がスタンダードだ。討伐するにしても、もう一人くらい欲しい。

それに、種族ボーナスも考えると、エルフとダークエルフがいれ

ば文句がないのだが……。

種族ボーナスについて説明すると、各種族ごとにパーティーを組んだとき、メンバーに強化魔法が適用されるのだ。種族それぞれに固有のボーナスがあるのだが、6種族それぞれがバラバラに参加していれば6種のボーナスが得られるわけだ。

とはいえ、一人でもプンの狩り友候補が来てくれたのでこれ以上の文句は言えないか。

「さて……プンのためにも少しパーティーらしく狩りをしてみるかな。ヤマモトはTL。プンはFA。オレは状況に応じてスリープとヒールを。すperiおるは臨機応変に攻撃」

「ぬを。TLか、了解！」

「あいよー」

「@@@」

ヤマモトとすperiおるはすぐさま理解してくれたが、プンだけはまったくわかりませんオーラを放出していた。

「プン、TLってというのはターゲットリーダー。それぞれがバラバラにMOBを攻撃したら効率が悪いだろ？ だから誰のターゲットに合わせるかを決めておくんだ」

TLは非常に重要な役柄でもある。優先して倒すべきMOBを選定するのもそうだが、ナイトのヘイトからもれたMOBや、予期せぬMOBとのリンク時に適切な判断が必要になる。

もう一つの意味として、トーカーリーダーというのもあったりするのだが……これもまた、重要だ。パーティー内のチャットを盛り上げ狩りを退屈にしない。これは誰にでもできることではないが。

「FAは、ファーストアタック。要するにMOBを最初に攻撃するプレイヤーだな。これは性質上ナイトの役割だ。MOBへの攻撃を優先して繰り出し、ヘイトスキルを使って敵対心をあおる。そうすればMOBの攻撃はお前に集中する……大丈夫。お前のHPは常にオレが見ているし、危ないと思ったら即リターンする。損な役割かもしれないけど、これができればお前は立派なナイトだよ」

「うーん、わかんないよお……」

「そうだな……簡単に言えば、ヤマモトのターゲットしているMOBにヘイトをかける。それを倒したらまたヤマモトのターゲットしたMOBにヘイト。その繰り返しになるな」

「わかった！ ヤマちゃんに合わせればいいんだね！ それならおバカなブンでもできちゃうw><w」

「そうか。それじゃ早速始めよう」

「……」

「なんだ、ブン？」

「ブンはおバカじゃないよ^^ っていうフォロー待ってるのに、どうして誰もそう言ってくれないの!」

しばらく皆沈黙して。

「プンはおバカじゃないよ^^ これで、いいのか？」

素っ気無くそうタイプングしてみた。

「心がこもってないよ@@@」

「お前はアホか。初心者なんて皆最初は解らない事だらけさ。やってる内になれりゃいいんだ。オレだって最初はそうだったんだし、気にするな」

「そうそう！ ぼくちなんか、最初ダークエルフのおねーさまのお尻ばかり見てたら、今度はエルフのおにゃのこの生足に目が行って、ドワ娘のツインテールでうっとりしてたら、いつの間にかパーティー追い出されてたよ！ プンちゃんはハアハア指数が半端ないから、いっぱい失敗しても大丈夫！ 初心者さんにはよくあることだよん！」

「ヤマモト」

「ぬを。中尉、何か？」

「お前がミスったら即追放する」

「ひどすー！」

ひどくないだろう。ここまでエロバカいとは、想像できなかったが。……男キャラでよかった。そんな風に見られてたらと思うとゾっとする。

「じゃあ、プンも注意しなきゃ。エルくんの横顔にうつとりしてる暇はなさそう。。。」

男キャラでも、見られることは見られるらしい……。

「……そろそろ始めねえ？ 俺もう、プンのスカートの中のぞくの飽きたよ」

のぞくなよ。

とりあえず狩り場での諸注意を話し終えた後、オレ達はさっそく狩りをする事になった。狩りに入る前にすperiおるが習得しているバフをかけて、戦闘力を上げスタート。

ヤマモトがファイアスピリットというザコモOBにターゲットし、プンがそれをヘイトする。プンめがけて襲い掛かるMOBをヤマモトが攻撃し、すperiおるがその補助をする。

「ヤマモトっついで」

「ヤマモトにはヒールなしだな」

「ヤマちゃんづるさい^^」

「ぬお。これなんてイジメ。。。」

順調にMOBを倒していく。初めはミスを重ねていたブンだったが、次第に慣れていき、今では攻撃しながらチャットできるくらい余裕が生まれていた。いい感じだ。

ブンは成長している。チャットの速さもだが、順調にレベルも上がっているし、自分の立ち位置をちゃんと理解できるようになった。昨日今日でここまで成長しているのを見ると、付き合った甲斐もあるというものだ。

……やればできる子なんだな。

とはいえ、ブンはフェイブナイトだ。気を抜けば一瞬で瀕死状態になってしまうので非常にヒヤヒヤさせられる。常にHPゲージが4分の3以上ある状態をキープしておかなくてはならない。

狩り始めて、20分ほどした時……それは唐突に起った。

ブンがヤマモトのターゲットしたMOBにヘイトをかける。MOBがこちらにやってきて、いきなり倒れた。まだ、攻撃していないはずなのに。

「はりゃ？」

「ぬを。ブンちゃん攻撃した??」

「ううん、してないよー？」

倒れたMOBをよく見ると、矢が3本刺さっている。カメラを回して周囲を見渡すと、炎の向こう側に3つの人影があった。

「横殴り……か？」

オレが呟いてすぐ、3つの人影がこちらにやってくる。それは、3人のエルフの女性だった。3人とも同じ装備、同じ髪型、同じ顔である。ただし、髪色だけは違っている。

「げえ。肉屋だ。うっぜ。ここ、あいつのナワバリだったんかあ」

「すperiおるちゃん、お肉屋さんなんてどこにもないよ@@?」

「ブン。あいつらの名前見てみる」

「えっと。豚肉500g、牛肉500g、鶏肉500g……?」

『肉屋』はエルフアーチャー3人の事を指している。豚肉500g、牛肉500g、鶏肉500gという3キャラではあるが、あれを操作しているのはたった一人の人間なのだ。

3PC……3つのPCでマクロを駆使して同時に3キャラクターを操作する風変わりなプレイヤーで、キャラの名前から『肉屋』と呼ばれるようになった。

しかも、この肉屋。狩りのマナーがすこぶる悪い。一旦狩り場に引きこもると、5時間はずっと独占していて他のプレイヤーが近づこうものなら、周囲のMOBを全て乱獲してまで独占しようとする。

一般プレイヤーからは嫌われている存在だ。その肉屋がここにいる……ということは、この狩り場もあいつに独占されてしまつたろう。

「ここ、使ってます」

真ん中の金髪のエルフ……おそろく、これがメインとしているキヤラなのだろう、豚肉500gがそう言うやいなや、オレに向って矢を放った。

矢がものすごい勢いでオレに迫り 命中する。

しかし、矢がオレをすり抜けて、真後ろに出現したMOBに命中した。

「邪魔」

「ぬを。いくら金髪エルフペったんこ生足ステキっ子でも許せん。お前にはハアハアせんぞ！」

「ヤマモト、後ろにすっこんでバナナでも食ってる。豚肉500gさん。ここはオレ達が20分以上前から狩りをしていたんです。狩場はみんなの物でしょう？ みんなで譲りあって」

オレのセリフが終わるまでに、周囲はMOBの死体でいっぱいになっていた。なおも3人のエルフは弓を引き、矢を放つ。

「だから？」

こいつは人の話を聞くつもりなどないらしい。

……どうするか。

リアルのオレとエルト

「場所を変えよう。もう少し奥にいけば、弓矢に耐性のあるMOBがいたはずだ。いくら肉屋でもそれは狙わないだろう。せつかくここに来たんだ、あいつに何を言われようとオレ達はここで狩る。嫌な思いをした奴もいるかもしれないけど、我慢してくれ……PVPなんてこと、したくはないし」

「いや〜しょうがないんじゃない？ 肉屋は何を言ってもムダだから絶対ここかねーよ。それより、むしろ弓矢耐性のMOBをあいつの目の前で狩りまくってやるーぜ。その方が楽しいわw」

すperiおるはそう言って、一足先に炎の奥へと消えて行った。

「ぼくちは、中尉の言う事に従いますお。確かにあの人はちょっとムカつくけど、生足がステキだからこれ以上はなーんも言えませんな。は！？ あの危なっかしい走り方のすperiおるたん……ハアハア。ぬを。けれどすperiおるたん、中身男……うっ。ぼくちはどうすれば……」

ヤマモトは結局ハアハア言いながらすperiおるの後を追っていた。何でもいいのかがあいつは。

「ブン。奥に行こう。ここよりちょっと強いけど、邪魔されるよりマシだ」

「何で」

「ん？」

「何でみんな仲良く一緒に狩れないのかな？>< みんなで狩ったほうが絶対楽しいのに。」

「そうだな。でも、それぞれ事情があるんだよ。一人で狩りたい奴だっているし、時間がないから他人に付き合ってる暇もないのかもしれない」

オレも他人の事は言えないが……。

プンはまだ納得していない様子だが、オレが歩き出すとプンも離れまいとすぐさま後を追ってきた。

場所を変えて、再度すぺりおるのバフを受けて狩りを始める。M O Bの攻撃が少し激しくなったが、狩れないほどのことじゃない。

遠くから矢を放つ音がひっきりなしに聞こえてくるので、肉屋の乱獲は健在のようだ。だが、目論見通りこのあたりは弓矢が通じないM O Bいるので、近くには寄ってこない。

正直、『邪魔』と言われたときにはカチンと来たが、熱くならなくてよかったと思う。今のオレは一人じゃない。不本意ながら……プンのお世話係りでもある。

そのプンと狩り友となってくれるかもしれない、すぺりおるの前で問題を起こすのは得策じゃない。すぺりおる本人も憤慨していたが、彼はあれでいてギルドのマスターだ。

後々に問題になるような事を起こしてはならない。ギルドマスターはギルドの顔だから、その下にいるギルメンにまで迷惑をかけて

しまうことになる。

ギルドマスターはギルメンの事を第一に考えなければいけないんだ。ギルメンは仲間であって家族同然なんだから……。

だから、これはプンを思っただけの行動ではない。すべりおるとプンの関係を円滑に深めてもらうための措置だ。

それは回りまわってオレのためである。こいつがレベル40になればそれまでだ。

「ぬを。プンちゃんレベルアップおめええええ！　いくつになっただの？」

「ありがとー！　28になっちゃった！　えへv^^^v」

あと12レベル……意外とその日は近いのかもしれない。そうなれば、目的のアイテムを得て、プンとお別れだ。このまま順調に育てば、あるいは椀並みに化けるかもしれないな。

「ぎゃーー><　間違えてエリアボスさんにヘイトしちゃったなあ@@; ;　エルくん助けてええええ」

「お前はアホか。なんでよりによってエリアボスにヘイトした！　少し見直したオレの感傷に浸った時間を返せ！」

前言撤回だ。こいつが椀並みに化けるなんてありえない。あいつは冷静で努力家なんだ。こんなに天然ボケてない。

「全員オレの周りに集まれ！　リターンを発動させる」

「ぬを。フレイムガイストたんがハアハア言ってるお！ ぎゃーす！ 一撃でぼくちん、死んだ（（。）。（） ばねえっす！」

ヤマモトの尊い犠牲のお陰でオレ達は無事にリターンでミロンに帰還することができた。

「ヤマちゃん、ごめんよー；；；」

村の広場でヤマモトが大の字になって倒れている。死体ごと村中に転送されたようだ。それを見つけたプンがすぐさまヤマモトに駆けつけた。

「ぬを。プンちゃん、もつとこっちへカモンです。そーそー。あ、もうちょっと右。あ、いきすぎ……半歩左へ」

「このへん^^^?」

「ばつちぐー！ このアングル。マジで神です！ さっそくスクリーンショットにとって寝る前にハアハアを」

すぐにリザレクションをかけてヤマモトを蘇生させた。

「ぬを。まだ保存してないのに！ 中尉、男のロマンを何とするのですか！」

「黙れド変態」

「そんな事言ってる。中尉だってほんとに興味あるんでしょお？ 男子にとって、女子のスカートの下はまさに聖域！ シヤングリラ

よ？ デイスプレイの中の嫁でそ？ ちなみにぼくちは、姉と妹と娘とお母さんも極秘フォルダにいますお」

「いや。俺ウソつかねーし」

「ヤマモト。お前、マジきもいな」

「ヤマちゃん、見損ないました><」

「な、なんですかこの空気は。ぼくちは中尉と違って健全な男子なのにな。><」

「エルくんはかつこよくて優しいからいいけど、ヤマちゃんはダメなの><」

「だそうだ、ヤマモト。今日はこの辺で終わりにしよう。お前もさつさとログアウトして、極秘フォルダ開いてハアハアしとけ」

「くそお！ 中尉が泣いて謝って土下座してフォルダの中身を見せてくださいと頼んできたら、見せてやるからな>< さらばじゃボケー！」

ヤマモトは捨てセリフを残して去っていった。ていうか、始めから見せる気があるんじゃないか。別に見たくないけど。

「ほんじゃー落ちるわな。っと。チビがくずり出した。ああ、それと！ 今日、楽しかったぜ！ なんか、始めたころを思い出したよ。狩りってこんな風に楽しかったんだな。今じゃレベル上げも単なる作業だ。お前らと組めてよかったよ。また今度機会があればどっかいこーぜ！ じゃあな」

すperiおるはソーシャルでかわいらしく一回転すると、フェードアウトして消えて行った。あとに残されたのはオレとブンだけだ。

「エルくん、ありがとう^^」

「何が？」

「ブン、また一人お友達ができたし、知らない狩り場に連れて行ってもらえた。それに、パーティーでの狩り方もお勉強になったよ！」

「そうか。それはよかった」

「ブンは妄想しちゃうのです、リアルのエルくんも、きっとクールそうに見えて熱くて優しい男の子なんじゃないかって><b」

「勝手に妄想するな」

「背は190CM以上あって、アイドルみたいにかっこいい顔で、声はちよつと低めで、特技はブラジリアン柔術@！」

「なんだそれは」

なんでオレの特技がブラジリアン柔術なのかも突っ込みたい。

「いつかね。リアルでエルくんに会えるといいな^^」

「オフ会がしたいのか？」

「うん@w ヤマちゃんも、すperiおるちゃんも呼んでみんなで

お話するの！」

「オレはパス。そういうのに興味ないから」

リアルを持ち出すな。ゲームはゲームだ。ここでのオレはエルトであって、リアルのオレは関係ない。

「うーん、そっか；； じゃあしょうがないね。それじゃブンも落ちるね！ 宿題まだなんだった@o@ 数学は苦手ナンデス……」

「数学はオレも苦手だな。英語とか古文なら教えてあげられるかもだけど」

「エルくんも文系かー。でもブンは英語まったく苦手です！ 昔の日本の偉い人に、ブンが生まれまで鎖国しとけ@@! と言ってやりたいくらいなの……」

「無茶を言っな」

「あは。それじゃ、ブンも落ちるねーお休み、エルくんzzz」

「ああ、お休み」

目の前でブンがログアウトしたのを確認し、オレもまたログアウトしてPCの電源を切った。

ボーナスチャンス到来！？

「オフ会……ね」

自室の学習機のイスに体重を預け、電源が切れたPCを見つめる。真つ暗な液晶画面には何も映し出されていない。それは、リアルのおれの瞳も同じ。

1年前のあれ以来、他人に対してまったく興味がなくなってしまった。けれど、無愛想な顔をして他人を避けていたら、周囲に敵を作りかねない。

だから、作り笑いをして、浅く付き合っただけで本心は決して見せないようにしている。深い所まで踏み込まれたくない。母親が言ったよな、友達を家に連れてくるなんて事は未来永劫ないだろう。

それに、こんな部屋見たらみんなドン引きするだろうし。

ふと、プンの言葉を思い出す。

『リアルでエルくんに会えるといいな^^』

ゲームの中のおれとリアルのおれでは違いすぎる。プンはきっと幻滅するだろうな。だから、会わないほうがいい。

カオス・クロニクルの世界では、容姿をいくらでも美しく設定することが可能だ。だから、そこにリアルの自分の容姿の美醜は関係ない。

ありのままのそいつの姿が……心が浮き彫りになる。文字とわずかなソーシャルとアクションだけで、そいつの本性を知ることが出来るんだ。

一体オレの何がいいと言っただろうか？ オレは偽善者なんだぞ、ブン。

空になったマグカップを片手に、部屋のドアを開けると就寝前のコーヒーを飲むためリビングへと降りていった。

今日も眠い。俺は必死になってあくびをかみ殺しながら、駅の改札をすり抜け学校へと向っていた。

俺の周りには、詰襟の学生服に身を包んだ少年や、黒い生地に白い刺繍のセーラー服に身を包んだ同い年くらいの少女達。

俺の通っている高校の生徒達だ。女子の制服はシンプルだが、胸の白いリボンが大きなチャームポイントで、近所の大きなお友達の間でも人気のある一品だ。シンプルなところがいいらしい。

いや、これは稲田から仕入れた情報だが。

駅から高校までは歩いて20分ほどもかかる。その行程も半分以上を終え、学校を視界の端に捉えた時、石鹸のいい香りがした。

俺には解る。彼女だ。

「相羽さん！ おはよう」

振り返って昨日の夜一生懸命練習した、対相羽 真理奈専用挨拶を爽やかなポーズで決めて、白い歯をキラリと輝かせた。　はず。

「あ、ちょっと待ってよ！」

無視されてしまった。

さては、照れているのか相羽 真理奈！？　ふはは。そうだろう
そうだろう。3時間かけて編み出した俺の最終奥義である。これが
直撃して無事な女子はいないはず！

「あの……相羽さん??」

歩く速度が早い。もしか、予想以上の破壊力だったか？

俺も速度を上げて彼女の横に並んで歩く。と、ようやくこちらを
振り返ってくれた。

「誰……?」

「へ?」

「私、急いでますので」

「ええ?　ちょっと待って、俺だよ、同じクラスで隣の席の、渡辺
だよ!」

「……ああ！ 渡辺くん。ごめんね、私。寝ぼけてたみたい」

普通に俺の事を忘れていたみたいだ。軽くショックである。けれど、その爽やかな笑顔で俺の心は一瞬で満たされる。

真新しいセーラー服に身を包んだ彼女の姿は、さながら女神のようだ。太陽の光を受け、神々しさすら感じる。

油断してしまったせいか、大きなあくびが一つ俺の口から出てしまった。やばい。今の俺はすごく不細工な顔だっただろう。

「……寝不足なの？」

「あ！ う、うん。ちょっと夜遅くまでゲームやってて！ カオス・クロニクルっていうネットゲなんだけど……」

「カオス・クロニクル？」

一瞬で相羽さんの目が大きく見開かれる。相当驚いた様子だ。驚いた顔もカワイイ。この表情はレアかもしれないな。

「あれ？ もしかして、相羽さん知ってるの？ 昔は人気あったみたいだけど、今はもうマイナーもいとこなんだよね」

「あ、ううん。前の学校でプレイしている人がいたから……渡辺くん。カオス・クロニクルやってるんだ……長いの？」

「んー。まだ1年くらいかな？ 初めてプレイした時、ぜんぜん操作が解らなかつただけだけど、カインっていう親切な人が色々教えてくれたんだ。まるで兄貴みたいな人だったよ。でっかいギルドのマ

スターもやっててさ、何だっけ？ えつと灰色の狼？ すっごく強くて、かつこよくて……憧れたなあ」

「カインが……教えた……そう。そう……なんだ」

「相羽さんもやってみない？ 俺がめいっぱいサポートするからさ。きつと楽しいよ？」

これはチャンスだ。相羽さんと接点が出来た。カオス・クロニクルと一緒にプレイして、相羽さんとの思い出を積み重ねていく……学校以外で彼女と過ごす時間を作れる。

「ごめんなさい。私、パソコン苦手なの。だから……」

「あ。ああ、そっか。残念だなあ。でも、もし気が変わったら教えてよ。いつでも育成手伝うからさ！」

「うん。ありがとうね、渡辺くん」

残念だ。相羽さんをエルフのヒーラーにして、ヒールしてもらえたり、ドワ娘のエンチャントにして、バフをかけてもらったり、ダークエルフのナイトにして、守ってもらいたいという、一瞬の妄想が盛大に弾けとんだ。

「私、先に行くね」

相羽さんはさつと駆けて行く。学校の昇降口に入って、下駄箱から上靴を履き替える姿に見とれてしまう。相羽さんのスカート丈はけっこう短い。他の女子に比べるとまだ長いほうだが……。

履き替えるその瞬間にかがみこむ姿勢になって、黒いプリーツカートから、かぶりつきたくなるような、艶のある白い太ももが露になった。

俺はたまらず息を飲んだ。これは、まさか。

ボーナスチャンス!?

あ！ あとちょっと！ もう少し、そうだ。そのまま……。

「ナ〜ベ〜！ よ、おはようさん！」

俺の願いは叶うことなく、代わりに稲田のダミ声と、メガネのフレームが視界に入り込んできた。

「あん!？」

「な、なんだよ何でそんな怖い顔で睨んでんの？ 俺、お前に何かした?？」

「お前は全世界の夢見る青少年の敵だ」

稲田の顔を無理矢理どけると、そこにはすでに相羽さんの姿はなかった。

駅前で発生したイベント

今日も相羽さんの周りにはいつも誰かがいて、賑やかな渦を形作っていた。

俺が付け入る隙なんてまったくくない。授業中ちらちらと隣を盗み見る程度で、話しかけるタイミングが中々みつからない。

カオス・クロニクルと一緒にプレイできれば、学校で話しかけれなくても別に気にする必要はないけど……。しつこく誘ったら嫌われちゃうし。

……何か接点が欲しいな。

そんなことをずっと思案していたら、いつのまにか火曜日の授業が全て終わっていた。

「相羽さん。一緒に帰るよ」

女子グループのリーダーが、カバンに教科書をしまい終った相羽さんに話しかけた。

「……ごめんなさい。今日は、家の用事で早く帰らないといけなの」

「そうなんだよ。じゃ、また明日ね!」

「ごめんなさい」

相羽さんはそう言うと、カバンをつかんで足早に教室を去って行った。転校してまだ間もないから、まだまだ忙しいんだろうな。

話しかけた女子も同じように思ったらしく、相羽さんを引きとめる事はしなかった。

……俺も帰るかな。確か今日は漫画の発売日だ。駅前の本屋に寄って帰るか。

学校を出ると、朝通った通学路を遡って駅へと向う。

駅前には本屋やスーパー、銀行や飲食店が立ち並び、夕方にもなれば人でごった返している。目的の品を手に入れるべく、大型チェーン店の本屋へと足を踏み入れた。

無事に目当ての物を購入して、駅へと向おうとした時だ。本屋のすぐ入り口で大きな袋を抱えた女の子がうずくまっていた。白い長袖のＴシャツにジーンズ姿の、中学１、２年生くらいのかわいらしい子だ。

袋の中身は大量のインスタントコーヒーで、駅前のスーパーの袋にそれがはちきれんばかりに押し込まれている。

あれだけの量を女の子が運ぶのは、きついだろうな。けれど、ちよつと電車が来るいい時間だ。これを逃がすとちよつと待たなければならぬ。

俺は心の中で彼女に手を合わせて、目を合わせないように過ぎ去ろうとした。

一生懸命に袋を両手で抱えようと立ち上がる彼女。ふと、その横顔が視界に入って俺は足を止めた。

その横顔に見覚えがある。つい最近、どこかで会ったような気がする。そんな考えを巡らせていると、目の前でインスタントコーヒーの瓶が大量にばら撒かれた。

「あ！ ご、ごめんなさい！ おケガはありませんか？」

「ああ。大丈夫。ほら、これ。あ、こっちにも」

「あ、ありがとうございます。お優しいんですね」

コーヒーの瓶をつかんだ白く細い腕をたどっていくと、気の弱そうな瞳と目が合った。黒い髪は男の子のように短く切りそろえられており、その下の顔はドワ娘のような愛らしさがあった、きゅっときつく結ばれた唇が緊張をあらわしていた。

瞳は潤んでいて、今にも泣き出しそうな感じである。

「すごい量のコーヒーだね。これ、全部君の？」

「いえ、お姉ちゃんのです。ぼく、コーヒーは苦くて飲めないから……ごめんなさい」

何故か謝られた。

「いや、それよりこんな大量のコーヒーを妹一人に買いに行かせるなんて、鬼みたいな姉貴だな！ 俺だったらそんな姉貴にソバット入れるね！」

「や、やめてください！ お姉ちゃんは何も悪くないんです。ぼくがいつも、ドジで泣き虫だから……ごめんなさい」

また謝られた。

なんだか見ていてかわいそうになった。しょうがない。乗りかかった船だ。どうせ帰ってやることといたら、ゲームくらいだし、たまにはボランテアも悪くないだろ。

「君、お家どこ？ よかったら」

「やめてください！ 誰か、助けて！」

「は？」

「お姉ちゃんに言われてるんです。知らないおじさんに声をかけられたら、股間を蹴り潰して顔面にツバ吐いて逃げろって……ぼく、ツバを吐くのはちょっと……」

どんな姉貴だ！ てか、股間を蹴るのに容赦は無いのかこの子は。

「別に怪しいもんじゃないよ（このセリフ、怪しい奴のセリフか）。この近くの高校の生徒なんだ。ほら、学生証。な？ 目の前で困っている女の子がいたら助けるのは当然……」

俺、さりげにサムいな。

「ごめんなさい！」

「いや、だから謝らなくてもいいって。体力には自信があるし」

「あの、そうじゃなくて……ぼく、男……です」

電撃が俺の体中を駆け巡った。この子は一体何を言っているのだから、一瞬思考が停止する。

「え？ オトコ？ ああ、音子とかいう名前？」

「ぼくの名前、潤です！ 音子じゃありません！」

きょうだい

潤は、小さな肩を震わせ頬を赤く染めて叫んだ。それに驚いた周囲の人々が何事かと振り向き、俺は冷たい視線の集中砲火を受ける。

潤の瞳はすでに決壊寸前のダムのようになっていて、今にも泣き出しそうだ。

「あ、えーと。潤。その、気に障ったなら謝るよ。ごめん。その、純粹に助けたいだけなんだ。その、重そうだったから」

「ごめんなさい。取り乱してしまいました。お姉ちゃんにもよく言われるんです。『あんたは男らしくない』って……毎日……だから、ごめんなさい」

「いや、そんなに謝らなくても……とにかくさ。半分持つてあげよ。俺、目の前で誰かが困っていたらほっとけないんだ。だからさ、手伝わせてくれよ」

潤は、まるで信じられない物を見るような目で、俺の顔をじつと見つめる。背は俺よりも10cmは低い。上目づかいで見つめられている形なっているわけだが……。

やはりこの子の顔……どこかで覚えがある？ けれど、潤に出会ったのは今日が初めてだ。最近出会った誰かに似ている……だめだな、答えが出てこない。

頭の引き出しを一生懸命ほじくり返していると、潤が少しはにかんだ様子でぼそぼそとしゃべりだした。

「あの……じゃあ、お願いします。本当はぼく、少し困っていたんです。ごめんなさい」

『ごめんなさい』というのが口癖になってしまっているのか、潤の口からは何度も『ごめんなさい』が連呼されている。

「じゃあ、俺こっち持つよ。で、家はどっち？」

「あの、三丁目です。ここからだとも10分くらい歩いた所になりますね。付いてきてください」

潤はそう言うと、俺に背中を向けて高校の方向に歩き出した。すると、みるみる小さな背中が遠ざかっていく。

「って歩くの早いな。ちょっと待ってくれ、潤」

速度を上げて潤に追いつくと、横に並んで一緒に歩き出す。

「それにしても……ほんとすごい量のコーヒーだな。これを一人で飲むのか、君のおねーさまは」

「お姉ちゃん、コーヒー大好きなんです。お砂糖も、ミルクも入れずに飲んじゃうんですよ。すごいです。それにしても、この街に親切な人がいて本当に良かった。越してきてまだそんなに時間が経ってないから、知り合いも少ないんです」

「そうなんだ？　じゃあ、このへんはまだあんまり詳しくないのか」

「はい。だから、本当は声をかけてくださった時、すっごく嬉しか

つたんです。でも、誰にも迷惑をかけたくなって……」

「気にするなよ。俺でよければいくらでも声をかけてくれ。困っていることがあるなら、力になるぜ？」

「ありがとうございます！ よかった……いい人に知り合えて。あ、そういえば……まだお名前聞いてませんでした。ごめんなさい」

そういえば、まだ名乗ってなかったな。

「ああ。渡辺 翔っていうんだ」

「渡辺さんですね。本当にありがとうございます。けど……どうしてそんなに親切にしてくれるんですか？」

「ん？ んー。ゲームでさ。ものすごく親切にしてくれた人がいたんだよ。それまでの俺って、別段他人に興味が無くてさ。目の前で誰が転げようが、ケガをしようが見て見ぬフリをする人間味のない奴だったんだ。そんな俺に、1から10までそのゲームの事を手取り足取り教えてくれて……勉強も教えてくれたっけ。とにかく、誰にでも優しくって、強い人がいてさ。憧れたんだ。俺もあんな風になりたいって」

「そうなんですか」

「けれど、ある日……その人は俺の目の前から突然姿を消した。後で聞いた話じゃ、初心者の手をしてる時に何かあったらしくて……しかも、それが原因で自分の作ったギルドからも追い出されて、仲間からも色々言われたらしくてね……。俺は、そのことを知らなかったとはいえ、力になれなかったんだ。あれだけ世話になったの

に……だからさ。目の前で困っている人は助けてあげようって思うようになった。ゲームの中でも、リアルでもね」

カインは、多くの事を俺に教えてくれた。だから……俺もカインのように優しくなりたいと思った。だから、相羽さんがカオス・クロニクルをプレイするのであれば、カインがしてくれたように接してあげたい。

「すごい人ですね。渡辺さんって」

潤が瞳をうるうると輝かせながら、感動していた。

「いや、すごいっていうのならあのんだよ。いつかリアルで会えたらなって、ずっと思ってたけど……MMOだからな。きっと色々あるんだ」

「そうなんですか……それ、なんていうゲームなんですか？ ぼくもやってみたくまりました。渡辺さんのやっているゲーム！」

「カオス・クロニクルだよ。基本料金は無料だから、PCとネットの環境さえあれば、大丈夫」

動作するために必要なスペックもあるが、細かく話すと長くなってしまつので、この場は置いておこう。

「それ、知ってます！ うちのお姉ちゃんも昔やってました。今はどうかわからないけど……」

「そっかー。じゃあ、潤のねーちゃんどこかであってるかもしないな、俺。世間って狭いね」

「あ、でも。ぼくPC音痴なんです。お姉ちゃんはすごく詳しいんですけど、カオス・クロニクルの話に触れると怖くって……」

「持っているのはノート？」

「はい」

「それなら、今度俺がセットアップしてあげるよ。家にはクライアントデータの入ったCDROMがあるし」

ちなみに、カオス・クロニクルのゲーム本体は公式ホームページから無料でダウンロードできる。

「本当ですか！？　じゃあ、明日行ってもいいですか？」

「明日か……いいよ。水曜は5時間目で終わるし、駅前で待ち合わせしようか？」

「はい。じゃあ、ぼくの携帯のメルアド教えておきますね」

潤はそう言うと、コーヒーの袋を地面に置いてポケットから携帯を取り出した。

俺も胸ポケットから携帯を取り出し、赤外線通信で番号を交換する。

「これでよし。じゃあ、明日はPC持って駅前に……そうだな。3時でいいかな。着いたらメールいれるからね」

「はい。本当にありがとうございます、渡辺さん。あ、ぼくの家すぐそこなので、ここまででいいです！」

俺は持っていた袋を潤の左手に握らせた。

「潤はたいへんだな。俺は長男で下に妹がいるから、姉貴がいる奴の気持ちはわからないけど、苦労しそうだ」

「そんなことないですよ。確かにお姉ちゃん、普段は怖いけど優しい時もあるし、両親がいない時はご飯も作ってくれるんです。それに……たった一人のお姉ちゃんですから。だから、大事にしないと」

「今の言葉……家の妹のアホにも聞かせてやりたい！ あいつ、俺に蹴りいれるわ。家族共用のPCに入れといたエロ画像を全部削除するわ。トイレに忘れたエロ本を、俺の部屋でキャンプファイヤーするわ……妹の風上にもおけん奴なんだ！」

「えっと……それはたいへんですね」

俺の2つ年下の妹……名を愛紗あいさという。とにもかくにも生意気で、兄妹仲は基本的に悪い。潤の性格を少しは見習ってもらいたいものである。ていうか、潤みたいなのが欲しかった。今から両親に頼んでも、もう頑張れないから無理だろうけど。

「それじゃあな、潤。色々がんばれよ」

「はい、色々がんばります。さようなら、渡辺さん！」

潤の後姿が住宅街の角で消えて、俺も歩き出す。しばらく駅までの道を歩いていたが、ふと思いついて携帯の電話帳をチェックして

みた。

潤の番号などを一応確認しておこう。電話帳を開いてすぐに潤の名前が見つかった。フルネームで登録しているらしく、あ行のトップにその名前があったからだ。

「相羽 潤……。相羽？ 相羽さんと同じ名字か……。偶然か？」

ザ・ヤマモトセカンド

いや、まて……そういえば、潤は姉がいると言っていた。相羽という名字は珍しいと思う。それに、今になって考えれば潤の横顔が誰に似ているかだなんて、すごく簡単な事だ。

相羽 真理奈。彼女は潤の姉なのだ。そして、またまた潤の話通りであれば、カオス・クロニクルをプレイしていたという……けれど、朝会ったときはプレイしていないと言った。

『カオス・クロニクルの話に触れると怖くって』という潤の言葉。もしかしたら、何かあったのかもしれない。けど、何が？ 解らない……。

そういえば、朝、カインの話題になった時……視線が鋭くなった。あれは気のせいなんかじゃない。まるで別人のような……。

相羽さんは……カインのリアルの知り合いなのか？ もしくは、俺と同じようにカインに世話になった初心者の人かもしれない。

聞きたい。そう思った。もし、カインの事を知っているなら……カインに会ってみたい。今どこでどうしているのか、今のカオス・クロニクルの状況を伝えたい。

カインが戻ってくれば、きっと前のような活気に満ちて……俺も、灰色の狼に戻るかもしれない。そしてもう一度、カインと一緒に冒険がしたい。あの頃みたいに……。

とはいえ、この話題は彼女の前ではタブーらしい。普通に聞き出

すのは無理だな……どうするか。

俺は駅の改札を通ると、ホームで電車を待ち続けながら色々なことに思いを馳せていた。

椛。フェイブナイトで現サーバー最強のナイト。彼に出会ったのは1年近く前……。

今のプンのように装備がめちやくちゃで、TLとは違うMOBを攻撃したり、ダンジョンで迷子になって狩り開始の時間が30分も遅れたことがあった。

でも、真面目な奴で教えた事はすぐに覚えるし、ときおり言う冗談もなかなか笑えるし、優しい奴だった。

聞けば、オレと同じ年で高校生らしく、何度か勉強を教えたことがある。ちなみにあいつの椛という名前は、好物のもみじまんじゅうからとってきたらしい。

漢字一文字でとつてもカツコイイ名前だと思ってたのに、ちょっとがっかりした記憶もある。

いつからかな。椛が隣にいるのが当たり前になったのは。ログインするとあいつがいて、ギルドメンバー数人を引き連れギルドハント……ギルメンのみで構成されたパーティーで狩りをしたものだ。

椛と話したい。あいつはいつもオレの味方だったから……新しい生活に、新しい家に、新しい繋がり……正直、かなり戸惑っている。椛と話して……でも、今のはオレは『エルト』なのだ。椛の知っているオレではない。だから、無理なんだ。けれど……。

「エルくん。こんばんわんわん（＾＾）」

いつの間にかブンがログインして、オレの目の前に立っていた。

「ああ、ブンか。相変わらずだな」

「ブンは相変わらず元気だよ〜^^v プンから元気取ったら何も残らないもん！」

ブンはぐるぐるとオレの周りを、鎖から解き放たれた犬のように走り回る。ちなみにここは、ミロンの村を一步出た所だ。

「そつだな」

面倒なので、適当に相槌を打っておく。

「エルくんひどい……」

「そつだな」

「@@? 何か考え事??」

走り回るのをやめたブンがオレの前までやってきて、顔を覗き込んできた。

「いや、別に」

「プンでよければ何でも相談にのるよ〜^^ まさか@口@~」

「……何だよ」

「恋の悩みか〜>w< こいつめえ。プンというものがありながら〜プンプンしちゃうぞー!」

「いや、違うし。オレ、恋なんてしたこともないし、興味とかなから」

これは本当の話。17歳と2ヶ月生きて今でも、恋なんてものはしたことがない。何度か告白をされた事はあるが……すべて断ってきた。

「ええ〜つまんない……」

「つまってくれ。はあ。で、ヤマモトはどこだ?」

一応オレ達はフレンド登録をしているので、それぞれがログインしているかいないかを知る事ができる。さっき確かにヤマモトがログインしていたのだが、いつのまにログアウトしたらしかった。

「わかんないー。どこいったのかな(?!?)」

ヤマモトの姿を求めてカメラを動かすと、ドワーフの少女がどことどここちらに走ってきた。ちなみに、すべりおるではない。

ピンク色のサイドテールの髪に、体には不釣り合いなほど大きな胸

……短めの黄色いスカートのようなローブをはいており、へそが見えている。トップスも黄色いシャツでそれが前述の胸によって窮屈そうなイメージである。

「エルトお兄ちゃん」

少女はオレに向ってソーシャル抱きつくを強要してきた。無論、これを拒否する。

「誰だお前は」

「ひどい！ 私の事忘れちゃうなんて……」

ドワーフの少女は泣きじゃくり、プンの胸に飛び込んだ。

「よしよし、大丈夫？ エルくんのお知り合いなの？」

「うん！ ちゅ じゃなかった。セイラ、エルトお兄ちゃんのために一生懸命尽くしてきたのに！」

「はあ？ セイラ？」

ドワーフの少女の名前を見ると、セイラ・マスオカという名前だった。こんな名前に心当たりは無い。

「セイラ、お兄ちゃんのこと大好きだよ！ だから……お小遣いちょうだい！」

「お前……さつさと失せる」

「ぬwじゃなつくって、きゃあ！ プンお姉ちゃん、エルトお兄ちゃん
が怖いー……」

「エルくん、ひどいよー@@ この子がかわいそうだよ」

「プン、そこをどけ」

ちなみに、ヒーラーにも一つだけ攻撃魔法がある。『ライトブレスド』という名前で、威力はウィザードのそれとは遠く及ばないが、ないよりマシ程度のものだ。

オレの足元に六芒星の魔方陣が発現し、光の塊が目の前の空間から出現すると、それがセイラ・マスオカの体を貫いた。

「ちょっと、エルくん@@!?!?」

「ぬを。ぼくちんのHPが一桁に……ガクブル()。()」

「ネカマじっこは楽しいか？ ヤマモト」

キレイなバラには残念なトゲがある

「フフ。バレてしまつては仕方がない。中尉の大好きなロリ巨乳を作成した、あなたの心のオアシス、キラ・ヤマモトでございます」

「いや、ロリも巨乳も興味ないんだが」

「なんですと！？ 中尉め、ぼくちんが6時間かけて作成したセイラちゃんを、お気に召さないとは……」

6時間もこれに時間割いたのか、恐ろしい奴だ。

「ヤマちゃん、気持ち悪いからさっさとキャラクターチェンジして
^^」

「ぬを。気持ち悪い(。(。)?」

「どこにそんなバカでかい乳揺らした幼女がいる。いや、それ以上に中身がお前だという時点で吐き気がする」

「ひどす！ ちくしょうめえ；； せつかく考えた脳殺ポーズで、中尉を昇天させてやろうと思つたのにーばかやろうー>< むっさい緑のおっさんでハアハアいつてやるからなー！ 待ってるオオオオ」

セイラ・マスオカは迷惑にもシャウトで叫んで村の中に消えて行った。そして、それと入れ代わる形で本来のヤマモトがやってきた。

やってきたヤマモトは、挨拶代わりにいきなりヘンな事をしゃべりだした。

「べ、別にあんた達と冒険したいわけじゃないんだからね!? 仕方なくなんだからね! 勘違いしないでよね!？」

ツンデレのつもりなのだろうか? 面倒くさくなったので、素っ気無く返してやることにした。

「嫌ならいいよ。さようなら」

「ヤマちゃんばいばい^^ノシ」

「ごめんなさい、冗談です。中尉、ポンちゃん。どうかこのキラ・ヤマモトを見捨てないでやってください; ;」

「つまらん冗談はいいから、さっさと狩りにいくぞ」

「ヤマちゃんのこと大好きだから、見捨てるわけないよ^^」

「ぬを。ふふ、ポンちゃん。ようやくぼくちんの魅力に気が付きましたか! 見よこの筋肉。フフ。さあ、おいでポンちゃん」

「昨日炎の祭壇で戦った、フレイムゾンビさんよりも、ちょっとぴりかっこいいもん^^」

「ぬを。MOBと比べられた……orz」

フレイムゾンビとは、干からびたミイラが炎を纏っているイメージのMOBである。これよりちょっとぴりかっこいいと言われてはさ

すがに入こむだろう。

「いや、待て！ ちょっとぴりとはいえ、かっこいいのだ！ そうだ。ブンちゃんに褒められたのだ！ フフ。見たか中尉よ。ブンちゃんはぼくちゃんにゾッコンなのだぞ！」

「でも、エルくんのほうが1000倍かっこいいけど（／＼／＼／＼）
キャッ」

「orn」

今日も騒がしい。これはこれで……悪くないのか？

二人のやりとりを気にせずにパーティーマッチを開いてみると、珍しく30代後半の狩り場のパーティー募集があった。

「これ、ちょうどいいな。この狩り場なら、オレでもぎりぎり適正だし、ブン達でもなんとかかなりそうな感じだ」

「ぬを。それより中尉！ このマッチの主。ダークエルフサマナーですぞ！ ああ……褐色の肌にステキなお山……躍動感満点のヒッ
プ……ダメージ受けたとき、興奮しちやいそうになる悲鳴。ああ……中尉、止めてくれるな！ ぼくちゃんはこのダークエルフさんのとこに行つてまいります（・）（ゞ」

「いや、どこにもダークエルフの女とは書いてないんだが……ブンはどうしたい？」

すでにハアハアと臨戦態勢に入ったヤマモトはどうでもいいが、ブンはどうだろうか。

「プンもかまわないよー。ダークエルフのお兄さんって、クールでバイオレンスそうでかっこいいよね（　　）」

目が星になっている……というか、どこにも男とか書いてないんだが……。

「名前は……Kerberos……ケルベロス？　かな。もろ男っぽい名前なんだが……」

「きつと、ステキなクールガイだよ！　残念だったね、ヤマちゃん
^^w」

「ぬを。なーんだ野郎か……しょぼーん」

3人でマツチに入ると、Kerberosがオレ達を迎えてくれた。

「どうも^^　アタシ、Kerberosですー。読み辛いし、打ち辛いからケルって呼んでね」

「……ふふ。ぼくちんの予想通り、お姉さんだった。残念でしたね、プンちゃん！」

「えー……」

「ケルさん。サモンお願いできますか？」

「はいな^^　ちよっぴり待っててネ」

サマナーにはサモンメンバーという、パーティーメンバーを近く呼び寄せるスキルがある。これを使えばすぐにメンバーが集められて、狩りの開始をスムーズに行える。

ものの2、3秒でサモンメンバーが発動し、画面が暗転する。

画面の読み込みが始まって景色が開けていくと、周りは木々が生い茂った森の中だった。

ウエルド大森林。30代後半の狩り場で、出現するMOBは主に地属性だ。木に口が生えたマンイーターなど、植物をモチーフにしたものがほとんどである。

木々の間には小さな川が流れており、水の流れる音が心を癒してくれる。昼間はつつすらと霧がたちこめており、MOBさえ出てこなければこの風景を一日中眺めていてもいいかもしれない。

「いらつしゃい^^」

大きな木の下に、ダークエルフの女性が一人座り込んでいた。黒い髪が腰まで伸びていて、薄布一枚を素肌に貼り付けたようなローブを身に着けている。丸みを帯びた四肢。妖艶な眼差しと艶やかな唇。まさしくダークエルフのお姉さんだ。

「女の人だー>< ケルベロスっていうから男の人だと思ってましたー」

「そうよね。こんな名前だと勘違いしちゃうよね^^; まぎらわしくてごめんねー」

「いえいえいえいえいえ！ ギャップ萌えおおいにけっこう！ ハアハア」

「ケルさん。フェイブナイトのブンとオークウォーリアのヤマモトです。二人ともまだそんなに狩りの経験がないけど、仲良くしてやっってください」

「はい。解りました。アタシも先月始めたばかりだから、そんなに変わらないと思うけど、よろしくね それじゃ、こっちもダンナを紹介しちゃうおうかな」

ケルは立ち上がると、少しオレ達と距離を取ってから召喚魔法を発動した。

ケルの体が少し宙に浮いて、地面に六芒星の魔方陣が発現し、そこから炎に包まれた生ける屍……フレイルムゾンビが出てきた。

「ああああん。ダーリン。愛してるう ねえねえねえ！ 見てよ この薄汚れた皮膚と、あるか無いかわからない空洞みたいな目！ 足とかこれでマジで立てんの！？ ていうくらいガタガタのヨレヨレ！ やばいやばいやばいやばいー！ アンデッド最高 ね、逝けメンでしょ、うちのダンナ？」

オレはブンやヤマモトクラスの変人はそうはいないと思っていたが、世界は広いようだ。

『ふざけるなよ』(前書き)

あけましておめでとつございます。
今年もカオス・クロニクルをお願いします。

『ふざけるなよ』

ケルはべたべたと炎に包まれた屍にまわりつく。その様子にオレを含め全員ドン引きしていた。

「さあさあさあ！ おっ始めるわよ、ヤロウ共！ アタシのダンナのアシストよろしくう」

ケルはそう言って、ダンナ……フレイムゾンビをMOBの群れに突っ込ませた。

オレ達も遅れないようにそれに続く。プンがMOBにヘイトをして、近寄ってきたところを全員で叩く流れだ。要は昨日と同じである。

プンのヘイトで引き寄せられたマンイーターに、炎に包まれたダンナの右手が直撃する。炎の打撃エフェクトが激しく鳴動し、マンイーターは瞬く間に枯れ木となって大地に還った。どうやら、クリティカルヒットが出たらしい。

ケルはフレイムゾンビこと、ダンナの勇姿に見惚れていた。相当あのアンデッドに愛着があるようだ。サマナーを選択する人間というのは、変わり者が多いという噂を思い出す。

基本的にサマナーはソコ特化の職業だ。召喚獣専用の回復魔法と強化魔法をそなえ、自分の手足として扱う。召喚獣と一緒に狩りをすることでレベルが上がり、成長ポイントを好みのステータスに振り分けることが出来る。

フレイムゾンビは攻撃力特化のMOBのだが、あの様子を見る限り、さらに攻撃力に成長ポイントを割り振っているのだろう。強化に強化を重ねたダンナの一撃は凄まじい。

それも、ヤマモトの出番がほとんどないくらいで2、3発のダンナの攻撃で次々とマンイーターの墓場ができあがっていく。

「ああああん。ダーリン。最高　ねえねえねえ！　見てよあの炎に包まれた手！　あんな腕に激しく抱かれないと思わない！？　プリンちゃん、エルトくん?!」

何でオレにまで振って来る……いい迷惑だ。

「けっこうです」

この人は相当変わり者だ。

「プン、冷え性だから暖かいの大歓迎です*^^*　ダンナちゃんのツルツルした頭がなんだかカワイイですね、きゃは。〇。〇」

類は友を呼ぶんだな。

「……………」

「どうした、ヤマモト?」

「ダンナさんハアハア……………フレイムゾンビは生前麗しき乙女であったという公式設定が……………」

「ごうごうと炎を逆髪のように、ちょっとグロい頭部から噴出しているダンナが、生前麗しき乙女だと言われてもしっくりくるはずもない。しかし、ヤマモトはそこからさらに想像力をめぐらせ、その姿を脳内で補完したようだ。」

こいつは、相手が女なら生きていようがアンデッドだろうが、どっちでもいいらしい。本当に何でもアリなのか。

ダンナが凄まじい勢いでMOBをひねり潰して進む。正直、オレとヤマモトはやることがなかった。

ブンがMOBを引いて、それを一方的にダンナが倒すというもの、あまりにも単調すぎて拍子抜けする。だから、気を緩めてしまった。まさしくその『矢』先。

「きゃあああああああああ！　だ、ダーリンがあああ！　くおらああああ、どこの誰じゃい！　ウチのダンナの頭に矢あ放ったんは！？」

凄まじいケルのシャウトがエリアー帯に響く。どうやら、ダンナが攻撃を受けたらしい。それもただのMOBではないようだ。

「あ　でもでもお。頭に矢が突き刺さったダンナもステキ……」

……いいのか。

しかし……ここは植物系のMOBが主体の狩り場だ。弓で攻撃してくるMOBはヒューマノイド系がほとんどで、このウェルド大森林には存在しない。

「エルくん、お肉屋さんだよー、ほらあれ^^」

お肉屋さん……ブンが動き出した先、小さな川の向こう岸には三つの人影……肉屋がいた。ダンナを攻撃したのはあいつらしい。

「ここは私の狩り場。それ以上近づくな、PKする」

一方的な肉屋の発言。……冗談じゃない。一度ならず二度までも……昨日だってキレる寸前でなんとか押しとどめたのだ。一言文句を言っただけでやらねば気がすまない。

オレはエルトをみんなから一步前に出し、キーボードを素早く叩き込んだ。

「この狩り場は、昨日の炎の祭壇の倍はあるでしょう？　いくらあんたでも全部のMOBを狩りつくす事はできなはずだ。こっちが端っこで狩りをすれば、住み分けができるんじゃないですか？」

しばらく沈黙があった後。肉屋は再び口を開いた。

「駄目。MOBが足りない。お前達はよそで狩れ。ここは私が4時間前から使ってる。それでもここで狩りを続けるなら」

肉屋のセリフが終わると同時。エルトのHPゲージが赤く点滅した。

「PKする。お前達全員」

エルトのHPは二桁になってしまっていた。肉屋の放った矢が深々とエルトの胸に突き刺さっている。エルトは荒い息を吐いて今に

も倒れそうな状態だ。ディスプレイに映る肉屋の身勝手な振る舞いに、オレの中で熱いモノが煮えたぎった。

『ふざけるなよ』。それは、誰もいない暗い部屋で呟いたリアルの自分の言葉。ぬるくなつたコーヒーを飲み干し、キーボードに指を走らせる。

「エル君に何するの><」

ブンがオレの想像を裏切り、真つ先に肉屋に攻撃を仕掛ける為、動き出した。川を挟んで向かい合う形になっているわけだが、ブンは川を越えるまでに無数の矢を体中に受け、まるでハリネズミのようになっていた。普通なら即死レベルのダメージを受けているはずだが、持っていた回復薬類を全て使用してなんとか耐えているようだ。だが、もう持たないだろう。

「ブン、やめろ！ お前が死ぬぞ！」

「大事な友達にこんな事されて、黙ってられないよ><」

ブンが川の中ほどで歩みを止めた。するとブンの体に光が集まり、それが全身を包み込んだ。そこに再び無数の矢がブンに襲い掛かる。だが、ブンは倒れない。どうやら、防御力を極大化するスキル『ファイナルプロテクション』を使用したらしい。30秒間の間、自分の防御力に+3000されるそのスキルのおかげで、ブンは力尽きることなく向こう岸にたどり着いた。

ブンはすぐさま肉屋の一人、豚肉500gに斬りかかった。

ブンの放った斬撃がエルフの女性を横一文字に切り裂き 牛肉

500gが倒れた。

「あれ@@?」

プンの攻撃はまぎれもなく豚肉500gを捉えていたのだが、直後に倒れたのは何故かその右の牛肉500gであった。

「肉屋YOEEEEEE！そしてUZEEEEEE。正義の味方、みんなのアイドル。斬魔様参上〜はい、拍手〜WWW」

漆黒の塊が牛肉500gの後ろから現れる……それはPK斬魔だった。

たぎる熱い思い

「PK。うざい」

倒れた牛肉500gを見て豚肉500gが発言する。すぐさま攻撃モーションに入り、斬魔に向けて二本の矢が放たれた。

「OSEE E E E ! 当たらないよ〜んwww」

だが、斬魔はそれを余裕で避けきってみせる。それにも構わず肉屋は再度矢を放つ。斬魔は遊んでいるのか、それをのりくらりとかわし、ソーシャル『笑う』で小ばかにしたような低い笑い声を上げると、装備していた防具を脱ぎ、裸（裸体という意味ではなく、防具未装着をいう）になってわざと攻撃を受けてみせた。

逆上した肉屋は、今もなお裸で笑い続ける斬魔に向けて、スキル『ペネトレイトシユート』を豚肉500g、鶏肉500gから同時に放つが、斬魔はそれを待っていたかのように忽然と姿を消し、鶏肉500gの背後を取ると、デュアルスタップで瞬殺した。

「クソ肉乙www 全部まとめて合挽きミンチやなwww」

残された豚肉500gに斬魔が容赦なく罵声を浴びせる……肉屋に注意が向いている今、この隙を突くしかない。

「ブン、こつちに戻って来い！ 肉屋と斬魔が潰し合っている間に逃げるぞ。ケルさんも、いいですね？」

「あー！>< ちよっとまってえ……」

ケルから了解を取り、プンがリターンの適用範囲内に入ったのを確認して、リターンを発動させる。

リターンの発動まで5秒。4……3……しかし、普段の行いが悪いのか、こういう時に限って嫌なことが起きる。

突如、オレの目の前に出現したマンイーター。まずい。こいつはアクティブモンスターだ。プレイヤーが近くにいれば、向こうからやってきて攻撃を仕掛けてくる。

しかも、オレはさっき肉屋から受けた攻撃で瀕死の状態なのだ。一撃でもこいつの攻撃を受ければエルトは即戦闘不能となり、発動中のリターンは解除され、プンも、ケルも、ダンナも、ついでにヤマモトも斬魔にやられてしまう。

他の誰かがこいつを倒そうにも、離れたプンをリターンの範囲に入れる為、ケル達から遠ざかったのがまずかった。

ダメだ。やられる。

マンイーターがオレの眼前に迫る。攻撃の間合いに入ってしまった。だが、まだリターンは発動しない。

その時。急に視界が白い物に遮られ、マンイーターの断末魔が聞こえた。

その白い物は、よく見ると長い銀髪で、フェイブの青年の後姿だった。巨大な剣を構え、青年は斬魔に向かって駆けて行く。

その姿を捉えてすぐ、リターンの詠唱が完了しロード画面に移行すると、ディスプレイは暗黒を映し出した。

「椀……？」

唯一の光源であったディスプレイの光すら失った完全な暗闇の中で、オレは一人そう呟くと、一人安堵した。

この数日で二度もあいつに助けられた。今の今まで……1年近くすれ違うことさえなかったのに……。

ふと、目の前に一筋の光が差した。それは何の比喻でもなく、単にロードが終わり、画面の読み込みが始まったただけだ。

気を取り直して、再び意識をゲームへと戻しディスプレイに視線を注ぐ。

ロードが終わるとディスプレイには、ミロンの村とポン達の姿が映しだされ、全員の無事が確認できた。

「エルくん怖かったよー(;_o;) /」

村の中心で、ポンがオレの姿をみつけるとすぐに駆け寄ってきて、ソーシャルで抱きついてきた。

「全員無事みたいでよかった」

「あれって、斬魔よね？ 肉屋をPKした後、誰かと戦ったみたいだけど、エルトくん誰か知ってる？」

ケルもあの瞬間を目撃したらしく、オレに意見を求めてきた。

「オレも見たのは一瞬だから、確証があるわけじゃないけど……楳だと思っています」

「楳って……確かトーナメント一位で、元灰色の狼の？」

「詳しいですね、ケルさん」

そうだ。楳は元々灰色の狼に所属していて、ある時ギルドを抜けてフリーになった。どういう経緯でそうなったかは知らないが、今は一匹狼になってPKKをしている。

「アタシも一度世話になった事、あるんだよね。ダンナと召喚契^{けっし}約できたのも、あの人が手伝ってくれたお陰だし」

楳はPKK以外にもそんな事をしていたのか……。

「ねーエルくん。楳さんを助けに行かない？」

「はあ？ お前はアホか。楳が負けるわけがないだろう、行ったらただの足手まといだ」

「プンが突然わけの解らないことを言い出したので、即否定してやった。」

「でも、PKの斬魔さんってPKギルドのマスターさんなんじゃない？」
「……」 今日一人とは限らないんじゃない？

意外にも、プンはオレの言葉に逆らってきた。だが……確かにそ

うだ。

斬魔はPKギルド『ヴァーミリオン』のギルドマスターである。前回の教訓から伏兵として仲間を回りに潜ませているかもしれない。多対一では、さすがの椀でも負けるかもしれない。

「ぼくちんもプンちゃんに賛成ですお。この前ぼくちんをバカにしたお礼もしてやりたいし、例え死んで経験値が減ったとしても、あいつに一撃入れば満足しちゃいます」

「アタシは元々椀の世話になってるからねー。やるっていうんならダンナが力を貸すよ?」

いや……状況がはつきりしていない以上へたに動くのは危険だ。けれど……気にはなる。

斬魔は短気で粘着質な奴だ。一度受けた屈辱は必ず返しに来る。どんな手を使っても。

その斬魔を先日から椀が追っていた……ならば……プンの言う事もあり得るかもしれない。

「わかった。けど、まずは状況を確認してからだ。オレが一人でさっきの場所に戻って状況を確認する。なにかあればすぐにチャットで知らせるし、危なくなったら即リターンして逃げる……いいか?」

全員がそれに賛成したのを確認し、テレポーターを使ってウェルド大森林へ一人向った。

周囲のアクティブモンスターに察知されないように注意を払いつ

つ、先ほど肉屋と斬魔がやりあっていた川まで戻つてくると、オレが見たのは森の奥へと消えていく斬魔の後姿だった。

まさか……桜は……？

周りには誰もいない。いや……倒れている三人のエルフに気が付いた。

肉屋なら……何か知っているかもしれない。

「何があつた？ 斬魔と戦つてたフェイブはどこへいった？」

素早くキーボードを叩き、肉屋から情報を聞きだす。

「やられた。急に動きが止まって、斬魔が一方的に一人で殴り続けてたら、やられてた」

「やられた？ ちょっと待って。『一人で殴り続けてたら』てことは斬魔一人つてこと？」

「読解力なさすぎ。斬魔はずっと一人だった。たぶん、回線が切れただか、ラグの間にボコられたんじゃないの」

素直に答えてくれるとは思わなかったが、一応聞きだす事はできた。どうやら相手は斬魔一人で、桜がPCの不調か何かで動きが止まった時を突かれ、やられてしまったようだ。

桜を……許せない。不意打ちでPKをするとは……この前の礼もある。せっかくレベルを上げたブンやヤマモトの経験値を奪って、その上にツバと罵声を浴びせた斬魔……。

椛は今どうしているだろうか？ここに死体がないということは、すでに村に帰還してしまっただか、そのままログアウトしてしまっただかかもしれない。

このままではあいつがかわいそうだ。仇をとってやりたい。

あいつは、曲がったことが嫌いで正々堂々を好む奴だった。だから、この状況に憤っているに違いない。初心者頃から見ていたから解る。……PKKになったのも、おそらくPKを減らして、少しでも他のプレイヤーが安全に狩りができるようにということだろう。オレはすぐさまマップを開いた。斬魔が逃げていった方向を確認する。

ブン、ヤマモト、ケル、そしてオレのレベルとスキルを全て再確認。

条件は整っている。

やれる。

まったく。あれほど熱くなるなど自分に言い聞かせていたのに……これではヒーラー失格だ。

でも、今はそれでいい。1年振りだ、この感じは。

他人に対して熱くなったのは。

やってやるか。そのためにも、こいつの力が必要だ。

オレは、リザレクションを使用して肉屋を蘇生した。

蘇生された肉屋は状況を飲み込めないのだろう。少し間を空けてオレに問いかけた。

「何で蘇生した。頼んでない」

「斬魔が憎いか？」

「当然。3回殺したい」

「なら手を貸せ。その為にお前を蘇生したんだからな」

「何をするの？」

少し興奮していた自分を落ち着かせ、コーヒーを少し口に含む。キーボードの上の指を静かに早く動かし、オレの目的を肉屋に伝える。

「斬魔をPKKする」

張り巡らされた罠

「斬魔をPKK？ バカじゃないの。レベル差がありすぎる、絶対に無理」

当然の答えである。しかし、策はある。その為にもこいつを口説き落とさないといけない。

「ちゃんと考えはある。それとも、お前はあいつに言われたことをもう忘れたのか？」

『クソ肉乙』。『合挽きミンチ』。その二つの単語が肉屋の頭の中で蘇ったのだろう。すぐに問い返してきた。

「何をすればいい？」

単純な奴で助かる。さつき受けたこいつの攻撃と身勝手な振る舞いは、心の奥そこで消化されずに燃え残っているが、この際だ。利用させてもらおう。

「簡単なことだ。今すぐ斬魔を追ってくれ。そして、後ろから絶えず斬魔を弓で狙撃。当たらないだろうが、当てなくていい。斬魔を攻撃し続ける事に意味がある」

「当てなくていい？」

「そうだ。この森の奥からフィールドに出れるが、その奥にあるダンジョン。『魔竜の巣』に足が向くように仕向けてくれればいい、オレもしばらくしたらすぐに後を追う」

『魔竜の巣』はレベル70代のソロ用狩り場である。しかし、M
OBの経験値とドロップが釣り合わず、マズイ狩り場として有名な
所だ。そこに斬魔を誘導する。

「斬魔がもしこっちに向ってきたら？」

「それはない」

「何でそういい切れる？」

「そういう予定になっているからだ。それとも、怖いか？ お前は
あいつの言葉通りの奴なのか？」

「違う。わかった。やる。すぐにあいつを追って、3キャラで弓を
連射する。それでいい？」

「それでいい。斬魔が魔竜の巣に入ったらお前の役目はそこまでだ。
あとは遠くで観察するなり、ログアウトしてくれて構わない」

「わかった。行ってくる」

「いつてらっしゃい」

我ながら苦笑してしまう。これだけ心のこもっていない言葉はな
いだろう。あいつにはせいぜい役に立ってもらわねばならない。

肉屋が斬魔の消えた森の奥へと入っていくのを見届けて、オレは
パーティーチャットで斬魔討伐作戦の概要を皆に伝えた。

皆は最初少し驚いたが、納得してくれた。ここで誰かが反対すれば、この計画はおじやんになり、追って行った肉屋は斬魔に再度PKされてしまうだろう。

それはそれでいい。あいつへの恨みはそこで晴らせる。だが、今一番の優先は斬魔だ。

そのためにはあらゆる手段を使う。PVPは装備やレベルだけで勝敗が決まるわけじゃない。スキルの使い方や経験しだいでいくらでもひっくり返せる。

それを……やり始めて1年足らずのハナタレ小僧に教えてやる。

オレの指示通りに皆が動く。1年前のあの頃感覚が蘇ってくる。

……ギルドを率いて数々の敵と戦っていたあの頃を。

やがて準備が整い、あとはオレの指示を待つのみとなった。

これから少し、忙しくなる。まずは、第一段階だ。

「PK斬魔がウェルド大森林に出ました！ 付近で狩りしてる人は気をつけてください」

オレはシャウトでそう叫ぶ。

「エルトUZEEEE！ 次回はお前PKなWWW」

律儀にシャウトでそう返してくる斬魔。バカな奴。これが終わりへのカウントダウンとも知らずに。

「PKどこですか？ PKK行きます」

斬魔のシャウトが終わってすぐ、ヴェルカという名前のキャラクターが、シャウトでオレに問いかけてきた。

「森を出てすぐの所です。今どこですか？」

オレもシャウトでそう返す。

「ミロンの村です。準備してすぐに向います」

「お願いします」

ヴェルカ……斬魔ならばこの名前を知らないはずがない。PKギルドが存在するならば、それと対をなす、PKKギルドも存在する。

このヴェルカというのは、そのPKKギルド『三散花』さんさんかのギルドマスターなのだ。ヴァーミリオンと三散花は常に戦争をしている。

その三散花のリーダーがミロンにいる。これで斬魔はおいそれとミロンの村に帰還できなくなる。あとは、肉屋が斬魔を魔竜の巣へと誘導してくれるのを、後ろから見届ける作業に移行する。

村に帰還できない斬魔は、このまま魔竜の巣へと逃げるしかない。立ち止まって肉屋をPKしている間に、三散花が来るかもしれないリスクをわざわざ追ったりしないだろう。

ちなみに、ログアウトもできない。なぜなら、カオス・クロニクルの戦闘システムは、攻撃を受けてもよけても戦闘体勢に移行する。戦闘態勢中のキャラクターは、それが解除されるまでログアウトは

できない。

ひっきりなしに斬魔の背中目掛けて、肉屋の矢が襲い掛かる。どれも命中していない。だが、それでいい。斬魔は戦闘態勢に入っているはず。ログアウトを封じることが目的なのだ。斬魔は村に帰還することもできないし、その場でログアウトすることもできない…。

これで斬魔の退路は断たれた。向う先は魔竜の巣……そこが奴の墓場になる。

「調子はどうですか？」

ヴェル力がオレにウイスで話しかけてきた。

「もういいぞ、ヤマモト。すぐにそのキャラを削除してキャラクターチェンジだ」

「ぬを。了解であります、中尉！」

ちなみに、このヴェル力というのは、ヤマモトに作成させたダミィのキャラだ。そもそも今日ヴェル力はログインしていない。いたとしても、時間的に間に合わないだろうし、斬魔を狩る為とはいえ、こんな低レベルのプレイヤーに協力してくれないだろう。

だからヤマモトにダミィキャラを作成させ、芝居を打ってもらった。あと、キャラクターの名前は基本的に被ったら登録できないシステムになっている。だから名前の力をカタカナの力ではなく、漢字の力ちひかりにしている。よく見なければ気付く人間はそうそういない。

単純な斬魔のことだ。まんまと引つ掛かってくれたようで、今もなお駆け足で魔竜の巣に向っている。

斬魔の姿が魔竜の巣の中に消えていくのを確認すると、次はプンの出番である。これが第二段階。

「ブン。まだHPは持つか？」

「ちよつときついかも〜@@」

「あとちよつとで斬魔がくる。それまで堪えてくれ」

「あい〜〜><ゞ」

こちらも準備が要る。斬魔が魔竜の巣に入ったとはいえ、まだまだ予断を許さない。

魔竜の巣は巨大な洞窟である。中は入り組んでいて、多数のアクティブモンスターがいる。今のオレ達がこのMOBの攻撃を受ければ即死亡してしまうだろう。

斬魔なら余裕と言うほどでは無いが、狩りはできる相手だ。ただし、一対一ならば。

オレの狙いはそこにある。肉屋は言った。『レベル差がありすぎる、絶対に無理』と。なら発想を変えよう。オレ達のレベルで戦うから無理なのだ。斬魔以上のレベルの相手をぶつけてやればいい…そう、ここにいるMOBを使う。

MPK。モンスタープレイヤーキル。とでもいうのか。これも大

抵はPKが使う手で、大量のMOBを引き回して、同種類のMOBと戦っているプレイヤーのそばに近寄る。

そこで、自分のターゲットを解除するスキルなり、リターンなどでそこからいなくなれば、MOBの敵対心は、その同種類のMOBと戦っているプレイヤーに全ていく。

結果、PKは自分の手を汚さずに相手をPKできるのだ。

目には目を歯には歯を。

PKにはMPKで応えよう。

だが、前述の通りオレ達のレベルでは、即死レベルのダメージを負ってしまう。そこでプンにファイナルプロテクションを使用させ、大量にMOBを集めてもらっている。

とはいえ、それでも想像以上のダメージをもらっているようだ。すぐに逃げ回っているプンと合流して、ヒールライトを連発する。プンのHPバーが赤くなったり、白くなったりを目が回るくらい繰り返している。

危険な綱渡りだが、あとはこれを斬魔にプレゼントするだけではない。

耐えろよ、プン。

しばらくMOBと楽しいかけっこをしていると、斬魔がアクティブモンスターに引っ掛かり、しぶしぶ戦っている場面に出くわした。

これで終わりだ。

「おいおいおいおいおいおい」

斬魔が明らかにうろたえている。

「斬魔、乙」

オレはそうタイプングして、すぐさまリターンを詠唱した。

「俺だけ死ぬかよ、お前らも一緒じゃボケwww」

斬魔は、一瞬消えて……オレの背中にデュアルスタップを叩き込んだ。幸運な事に不発だったが、斬魔の次の攻撃でエルトの詠唱はキャンセルされてしまった。

再使用するまでの時間は残されていない。MOBはすぐそこまで来ている。このままではオレ達も斬魔と心中だ……。

「ざまあwww 仲良く一緒に逝きましょう」

と、斬魔は考えているのだろう。

「エルくん>< どうしよう、MOBがいっぱいきちゃったよ@@@」

大丈夫。予定通りだ。

「逝くのはお前一人だ、斬魔」

そして、すぐさまチャットをパーティーチャットに切り替えて、

ケルに指示を出す。

「ケル、サモンメンバーを」

「あいよ」

一瞬で画面が暗転し、画面の読み込みが始まると、目の前にはダイクエルフの女性キャラクターがいた。オレとブンは、魔竜の巣から少し離れた所にケルによって転送されたのだ。

ケルのサモンメンバーがあれば、リターンを発動させる必要なかったかもしれない。しかし、念には念を入れておきたかった。

斬魔があの時点で逃げてしまわないとも限らない。だから、斬魔を煽ってオレのリターンを妨害させるように仕向けた。これで今頃斬魔は、MOBの餌食になっているはずだ。

ヘイトは、何もナイトの固有スキルだけではない。言葉による感情の誘発。それもヘイトだ。

「さて、皆お疲れさん。とりあえず、斬魔がどうなったか皆で確認にいくか」

オレとブン、ケルの3人は合流すると、斬魔の最後がどうなったかを確認するため、再び魔竜の巣に戻ろうとした。

すると突然目の前をすごい勢いで何かが迫ってきた。黒い塊のようなそれは、二振りの短剣を構えて黒い髪を振り乱し、こちらへと一直線に向ってくる。

まさか。

「残念無念〜みんなの斬魔様はふ・め・つ〜」

斬魔！？

何故……考える間もなく、オレは背後から光の塊に貫かれた。ダメージはさほどではないが、それでもエルトのHPが三分の一ほど削られた。

このスキルはライトブレード……ヒーラー？

「戦禍、愛してるうううううう W W W 半分お前にやるわ W W W オレはあのヒーラーぶっころちゅ！」

「じゃあ僕はフェイブの女の子がいいな。レアじゃん、アレ。化石並みの価値だよ」

戦禍^{せんか}。ヴァーミリオン所属のドワーフヒーラーだ。

仲間がいたのか……たぶん、あの戦禍がリターンを発動させて斬魔を救出したのだろう。

斬魔同様に黒いローブに身を包み、ドワ坊でありながらダークエルフのような印象の幼い少年……無邪気そうな笑顔を浮かべた幼く愛らしい顔が、斬魔以上の禍々しさを感じさせる。さながら、闇の司祭と言ったところか。

「おい、お前 W W W ヴェルカいねーじゃねーかよ、人をだます悪い子はPKでちゅよー。バブウ」

斬魔のシャウト。今のセリフから察するに、戦渦あたりから聞いたのだろう。ミロンに危険がないことを知って帰還したのか。

斬魔と戦禍。その二人に挟まれ、逃げ場は無い。ここは、やはりリターンで逃げるしかない。

「斬魔。あいつリターンしようとしてるよ。止めたら僕の事もっと褒めてくれる？」

「褒めるZEEEE！ 戦禍YAREEE！」

「僕、頑張るね^^」

戦禍の足元に六芒星の魔方陣が発現し、エルトの頭上に×マークが浮かび上がる。

……やられた、サイレンスだ。沈黙状態になったことで、リターンが不発に終わり、その場に取り残されたオレ達と斬魔の距離がだんだんと縮まっていく。

今のオレは無能だ。何もできない。魔法の使えないヒーラーなんて、ただの荷物だ。

「斬魔、僕、やったよ^^v あとは斬魔が好きにやっちゃってよ。僕、斬魔がPKする所大好きなんだ」

戦禍は無邪気な幼い笑い声を振りまき、スリープを詠唱すると、ポンとケルの動きを止める。

四肢をもがれた昆虫のように、オレ達は何もすることができなくなった。

仕方がない。

できれば、これだけは使いたくなかった。

マウスのカーソルをリスタートボタンへと向わせる。

もう1年近く動かしていないが、やれるだろうか？

オレが長い間このカオス・クロニクルと一緒に生き続けたキャラクター。

椀の師匠で、灰色の狼初代ギルドマスター。

カイン。

カインの戦い

マウスを持つ手が震える。

すでに戦闘状態は解除されているので、ログアウトも可能だ。

カイン……1年前のあれ以来か……。オレにとって今やカインは後悔の象徴であり、消せない傷だ。

ここでカインにキャラクターチェンジするのは、自傷行為でもある。自分の心の傷口にナイフを突き立て、溢れ出した辛い思い出という血を止めようとせせず、そこをさらに塩で塗りたくるようなものだ。

待て。待て。待て。

果たしてそこまでする必要があるのか？

お前はアホか？

別にいいじゃないか。PKされるぐらい。少し経験値が減るだけで、また狩りをして元に戻せばいい。

何でオレはこんなにも悩んでいるんだ？ プンなんて……もうすぐオレから卒業してお別れじゃないか。ケルだって、今日出会ったばかりの人間だぞ？

果たしてそこまでする必要があるのか？

隣でスリープ状態だったケルが、炎の柱に包まれた。HPバーの中身が即座に透過され、0になる。ケルは一瞬悲鳴をあげて、地面に崩れ落ちた。

ケル……。

「比高たんんテラ遅いwww けど、そこが萌えます」

「遅れちゃったー。ごめんちょ」

斬魔の隣に現れたのは、ヒューマンの少女である。装備から察するにウィザード……こいつも確かヴァーミリオンの一員だったはず……。

比高ちひと呼ばれたヒューマンウィザードも、戦禍同様黒いローブに身を包んでいる。ケルがやられたのは彼女の魔法攻撃によるものだろう。

比高の登場に気を取られている暇もなく、目の前のブンに、頭上から金と黒のコントラストが降り注いだ。

ブンは一文字に切り裂かれ、戦闘不能になった。あれはウォーリアのスキル、『クリティカルブレード』……黒い鎧を着たエルフの男が、60レベル代で着用可能な大剣『クリムゾンエッジ』を構え、こちらに振り返った。

「心機も到着ううwww はい、エルトくん死亡フラグびんびんに立ってます。ちなみにオレもびんびんだよ？ どこが？ 聞くな変態www」

相変わらずつるさい斬魔のシャウト。

「斬魔黙れ。4人も出張る必要あったのか？ どころかどう見ても初心者さまご一行じゃないか。狩りのし甲斐がないだろ。ない。はっきり言ってない」

心機^{しんき}。こちらは知っている。ヴァーミリオンのナンバーツーだ。斬魔と同レベルだと考えて間違いない。

「エルくん><」

プンが、戦闘不能になったままでしゃべりだした。

わかつている。いくらでもオレを恨め。オレが悪い。オレの浅はかな考えで、しなくてもいいPKKに付き合わされて、MPKの真似事をさせられて死に掛けた挙句、PKされてしまったんだ。時間も幾分かムダにした。本当なら、もう寝てる時間だろう。

だから、なんとも罵ってくれて構わない。オレにはそれを聞く義務がある。

「ごめんね；； プン、エルくん守りたかったけどできなかった@ @ セツかくすごい作戦成功させたのに、真正面からやり合つとやっぱりプンは何もできなかったよ^^； プン、役立たずだから……」

やっぱりこいつは……ヘンだ。こんなくだらなことに巻き込まれたんだ。もつと怒れよ。オレなら、怒る。

「ごめんね」

プンのチャットが表示されたディスプレイがなぜか、歪んで見える。おかしい、ディスプレイの故障か？ それともグラフィックボードがいかれたか？

「p u n p u n 3 2 1 萌ええええwww 抱きつく以上のソーシャル不是吗？ GMさん？ むひよひよひよwww」

歪んだ視界の向こうで、斬魔が倒れたプンの上に覆いかぶさろうとするのが見えた。

プンに……。確かにそれはリアルの自分の体ではないし、ただ3Dのモデリングに、CGのテクスチャが貼り付けられただけのデータだ。

けれど……。そうじゃない。違う。そこにある確かな悪意をひしひしと感じる。

カオス・クロニクルの……。MMOでは、文字とわずかなソーシャルとアクションだけで、そいつの本性を知ることが出来る。ありのままのそいつの姿がそこに映し出される。

斬魔本人にとっては、それは大した行為ではないのだろう。けれど、それはされた方にしか解らない屈辱。中身が女性のプンならなおさら嫌悪感を覚えたはず。

オレだって……。嫌だ。

拳を思い切り机に叩きつける。

「アホは私だ……プンを……こない子に、こんな事されて……
何で黙って見てるの?」

確かにプンは色々と問題があつて、やきもきさせられる。イライラした事も数えるほどある。

けれど、プンがいなかったらヤマモトや、すperiおるや、ケルにだって会えなかったし、このわずかな時間の間に思い出を作ることもできなかった。

目頭が熱い。理由は解らない。けれどそれが誰のためのモノで、自分が何をどうするかなんて解りきっている。

果たしてそこまでする必要があるのか? 三度自分へ問いかける。

「あるに……決まってる。私はプンの師匠になったんだから……レベル40になるまでは、この子に色々教えて、守ってあげなくちゃいけない」

服の袖で涙を拭って……PCのディスプレイを見据える。

歪みは無い。画面にも、心にも。まっすぐに向おう。

「プン。すぐに戻ってくるから」

それだけチャットで発言し、リスタートボタンをクリックする。

キャラクター選択画面へと移動すると、そこには二人の少年が青空をバックに草原で佇んでいた。

エルトと……カイン。

カインを選択して、ローディング画面へ。

いつもなら、特に気にもしないローディング画面だが、今は一分一秒が惜しい。

「早くしてよ……」

自分の口からその一言が漏れ出る。完全に独り言だ。けど、そんなことはどうだっていい。早くブン達の所に戻らなければいけない。

やがて画面の読み込みが終わると、そこは懐かしい場所だった。

初めてできた狩り友との思い出の場所……ミロンの村の前に流れる川……そこで1年前カインはここでログアウトした。もう戻らないと決めて。

ログインすると、何通ものメールが着ていた。どうせ、恨み言の数々だろう。今はそんな物に気を取られている暇は無い。行かないと。

長い金髪をポニーテールのようにしてまとめた髪。全身を包んだ派手な装飾の蒼い鎧。光り輝く剣と盾。

「久しぶり、カイン……」

これもまた、リアルの独り言。

さあ、行こう。ブンの……友達の所へ。

テレポーターを使って魔竜の巢へ。そこから少しばかり歩くとさつきりスタートした場所に出た。

ブンも、ケルも、まだそこにいた。そして。

「「「オレがガ ダムだ！！！！！」」」

「「「オレがガ ダムだ！！！！！」」」

「「「オレがガ ダムだ！！！！！」」」

「「「オレがガ ダムだ！！！！！」」」

「ｗｗｗｗ ヤマトキモスｗｗｗｗ」

ヤマトが何故かそこにいて、四方からの攻撃を受けながらも、斬魔に斬りかかっていた。言わずもがな、遊ばれている。

「エルトくんは怖くて逃げたのかなーｗｗｗｗ それともおしっこちびりまちたかあ？ くちやいくちやいｗｗｗｗ」

「中尉は逃げねーよ！ 昨日今日の付き合いで、まだよくわかんねーけど。あの人はなあ、優しくて、頭がよくて、ムツツリで女に興味ないけど……それでも俺の事、うざがらずに狩りに誘ってくれたんだ！ 前のサーバーで、誰からもハブられてた俺みたいな奴を！」

ヤマト……そうだったのか。ブン達がPKされて、オレがいなくなっただけで様子を見に来たらこいつらに出くわして……逆上したのかも知れない。こいつの事はずっとエロくて、バカで、オタクで

ハアハア言ってるヘンな奴だとばかり思っていたけど……本当は心の熱い男なのかもしれない。

「ロボットアニメの主人公はなあ！ピンチになったら覚醒して、敵をけちよんけちよんにするんだ！中尉は今まさに修行タイムで、精神と時の部屋なんだよ！だから逃げてねええええ！」

後で勝手な設定をつくるなど言ってやるか。今はそれよりも……。

「はいはいwww 中二乙www じゃー戦禍。キモオタにスリープいれて、オレ、なぶり殺しにするからwww」

「楽しそうだね^^ 僕もやりたーい」

戦禍に向けて、ヘイトの上位スキル『フォースヘイト』を使用する。

戦禍はみるみるオレの目の前へと引き寄せられ、攻撃の間合いに入った。そこを攻撃スキル『ホーリーブレード』で一撃を加え瞬殺。

「あれ？なんで>< なにこれ？」

「あ？www どうした戦禍www どこいったwww」

フォースヘイトは敵対心を煽った上で、敵を近くに引き寄せ防御力を低下させる。ヒューマンナイトの上位クラス『パラディン』がレベル60で覚えるスキルだ。

そしてホーリーブレードは、パラディンが覚える唯一の攻撃スキルで、聖属性を加え、二倍にした攻撃力で敵を攻撃するスキルであ

る。

一番厄介な戦禍を仕留めた。これでヒールができれば、リターンもできない。あとはじっくり料理してやる。

「斬魔！助けて！　へんな鎧の奴にやられたー……　しかもこいつ　すごく強い><」

戦禍のセリフを受けて、斬魔たちがこちらに気付く。すぐに見つかり、3人で掛かってきた。

来い。

カインが相手になる。

かつてサーバー最強と言われたナイトの実力を。友達を傷つけられた怒りを。

それを……やり始めて1年足らずのハナタレ小僧達に教えてやる。

「なにこいつwww　一人で向ってくるなんてえらいwww　とりあえず戦禍のカタキな！」

斬魔。比高。心機。3人がこちらに向ってくる。

比高がブレイズアローを放ち、炎の塊がオレへと向ってくる。

心機がスキル『メガクラッシュ』を発動し、ジャンプして頭上から迫る。

そして、斬魔が姿を消し、オレの背後から現れデュアルスタッフを叩き込んできた。

三者三様の攻撃がカインに命中する。

カインは燃え、斬られ、突かれる。

ギルドメンバーだけあっていいコンビネーションだ。60代のナイトなら死んでいたな。

「はあ？www ナニコレwww 何でダメージが1なの？www
ああ、そっかwww ファイナルプロテクションねwww 30
秒間のお楽しみかwww」

「違うぞ斬魔。こいつ、スキルなんか使ってない……この防御力で……素なのか？」

「物理的な攻撃なら、でそ？ 魔法攻撃なら違うんじゃないの！」

比高がさらにブレイズアローの上位スキル『バーストフレア』を詠唱する。比高の足元に巨大な魔法陣が描かれ、オレの足元が一瞬で溶岩になる。そしてそこから巨大な火の柱が立ち上り、オレは炎の中に消える。

先ほどケルがやられた魔法だ。

だがしかし、彼らには悪いがムダだ。

「ダメージ……0？ え？」

心機を目の前に捉え、ホーリーブレードで一閃。鮮やかな銀の残滓をそこに残して、心機は倒れる。

「おい！ ちょっと待て！ なんだよこのダメージ！？ 1万6000!？」

「おいおいおいおいおい。オレのデュアルスタッフの倍以上じやねーか。こいつ、ナイトのくせになんてこんな……」

斬魔が本日二度目のうろたえを見せた。

「比高。逃げるぞ。アレ、絶対無理www」

「わかった」

逃げ出した二人のPK。もちろん逃がすつもりなんてない。あるわけがない。

フォースヘイトの範囲拡大版スキル『マスフォースヘイト』を使って二人のPKを手繰り寄せる。

「なんじゃこれwww 動けないんですけどwww」

「こんなの知らない！ なにこのスキル!？」

知らないのも当然だ。これは最大レベルまで上げたパラディンしか習得できないスキルなのだから。

これを習得しているのは、カインともう一人……現灰色の狼ギルドマスターだけだ。

先に比高を通常攻撃で戦闘不能にする。

そして、次はメインディッシュだ。

しかし、斬魔は悪あがきを最後まで続ける。真正面に引き寄せたと同時に、デュアルスタップを打ち込んできた。

しかし、ダメージは1である。

「お前はアホか？ いや、アホだな」

カインのホーリーブレードが斬魔を横一文字に切り裂き、斬魔は力尽きた。

お土産を乗せたてのひらに

「斬魔乙」

斬魔以外のPKは、次々とその姿を消して村へと帰還する。しばらくして斬魔もその姿を消した後、唐突に斬魔からウィスがきた。

「覚えてろよ。絶対にオレは忘れねえからな」

「オレはもう忘れたよ」

そう返してやった。さぞや悔しいだろうな。頭にきただろう。ディスプレイの前で顔を真っ赤にしているかもしれない。だが、それ以上の怒りと辱めを、今までお前達にPKされた連中は味わってきたんだ。

痛みを知れ。

さて。ヴァーミリオンの一部とはいえ、マスターとナンバーツィの主戦力を一人で壊滅させた。これで当然やつらも大人しくなるだろう。

オレもすぐにエルトに戻らないといけない。

カインが今日ここに現れた事は、いずれこのサーバーの人間に知られるところになる。

さっき斬魔を煽ったのは、今日エルト達が斬魔をMPKしかけた件よりも、強い屈辱と印象を与えるためでもあった。奴らはたった

一人のナイトにやられたのだ。十分すぎるほどオレを憎んでくれるだろう。

これで全ての憎しみがカインにいく。今日の件で、エルト達もヴァーミリオンの恨みを買ってしまったが、それとは比にならないくらい屈辱を与えてやった。

カインは盾なのだ。ブン達の……だから、それでいい。カインがエルトであるということも、まだ明かすつもりは無い。

ブンを守るためにカインを使ったが、このままカインに戻ることできない。カインが抱えている問題は根が深い。けれどいずれ向き合わないといけない時が来るだろう。

ここに……カオス・クロニクルにログインしている限りは。

それに、ヴァーミリオンの奴らにエルト＝カインであることがバレれば、必ず奴らはオレだけでなくブンやヤマモト、ケルを狙ってくるだろう。

だから、またしばらくカインでログインすることはない。

何より……今のブンに必要なのは、カインではなく、エルトだからだ。

オレ以外にあいつの世話と、HP管理をできるヒーラーはいない。

さて、灰色の狼のメンバーに見つかりと厄介なことになる。早々にリスタートしなければならぬ。特に、現ギルドマスターには……。

しばらくお別れだ、カイン……。

回線の不調で落ちていたということにでもして、戻るとしよう。

オレは呆然と眺めていたヤマモトに近づいて、神秘の復活薬を二つ放り投げると何も言わずリスタートした。

キャラクター選択画面でエルトを選択し、エルトとして戻る。

「ぬを。中尉！ 精神と時の部屋でスーパーになったとですか！？」

目の前には、ヤマモトに蘇生されたのだろう。ブンとケルが全快の状態でそこに立っていた。神秘の復活薬のおかげで、経験値も下がっていないはず。

「なんだそれは。回線の調子が悪かったから落ちていたんだ。それより、あいつらは？」

「いや、なんか。ものすっごい強いナイトがやってきて……種割れとトランザムとハイパーモードとゼロシステムとニュータイプが発動したみたいな感じで……あと、ついでにXラウンダーも（。。（。）」

おそらくカインのことを言っているのだろう。強さの表現がヤマモトらしい。しかし、半分は解るが残り半分はまったくわからない……。

「なんだそれは、意味が解らん。……ごめん、ブン。回線の調子がおかしくて、落ちそうになってたんだ。結局、落ちちゃって……す

ぐに戻れると思ったんだけど……」

「エルくんエルくん、ブンなら大丈夫だよ^^v 蒼い鎧のナイトさんがやってきて、PKさんを倒して、神秘の復活薬を置いていつてくれたから>< かつこよかつたんだよおおお。あれがカインさんなんだね^^ プン、一目惚れしちゃったかも(ノノノノ)」

ブンは元気そうだった。特に落ち込んでいる様子は無い。

「アタシも見惚れちゃった けど、ダンナに比べたらまだまだだけどネ」

ケルも、特に先ほどPKされたことを根には持っていないさそうだ。

カインの登場と、圧倒的な勝利。それが、彼らの中の暗い感情を吹き飛ばしたのかもしれない。

カインを操作した意味はちゃんとあった。

「あ！ 桜さんだー！。おーい^^ノ」

カメラを動かし、ウエルド大森林の方向を見ると、桜がこちらに向ってくるのが見えた。PCの調子が戻ったのだろうか？

やがて桜はこちらにたどり着くと、早々に質問を繰り出してきた。

「ここにカインさんが来たって、掲示板で噂になっているのを見たんですが……知りませんか？」

早くも話題になったか……斬魔か、そのサブキャラあたりが情報

収集目的で書き込んだのだろう。それを見た椛がここにやってきた……といったところか。

「はい^^ すっごく強くてかつこよかったです！ エルくんには負けるけど>w<」

カインはオレなだけどな。けど、それをまだ明かすわけにはいかない。

「そうですか……やっぱり。カインさんが戻ってきた……戻ってきたんだ」

悪いな、椛。まだカインは戻れない。少なくとも、ヴァーミリオンのいざこざのほとぼりが冷めるまでは……。

それに、今のオレはエルトとして、プンを育てなくちゃいけない。プンは……大切な友達だ。

いつか時期が来たらこいつらに話せるだろうか？ 1年前の事……リアルのオレの事を。

椛。ごめんね。

でも、いつかまた……エルトとしてではなく、カインとして……あなたの前に立ちたい。

今日はものすごく気分がいい。

また、会えるかもしれない。あの人に。

学校までの足取りは非常に軽かった。

俺はいつもの通学路を少し足早に歩いている。そういえば、今日は潤を家に連れて行くんだった。まあ、そんなに部屋は散らかっていないから大丈夫だろう。

潤か……。あいつ、相羽さんの弟なんだよな。相羽さんって、家じゃどう過ごしてるんだろうか？ ちょっと気になる。

それに……。何でカオス・クロニクルをやめちゃったのかも。

彼女の事を考えていたら偶然、石鹸の匂いがした。俺は振り向く。

「相羽さん！ おはよう」

振り返って昨日の夜一生懸命練習した、対相羽 真理奈専用挨拶（改）を爽やかなポーズで決めて、白い歯をキラリと輝かせ、セクシーに指をアゴに添えて見せた。はず。

「あ、ちょっと待ってよ！」

また無視されてしまった。

さては、今度こそ照れているな相羽 真理奈！？ ふはは。そうだろうそうだろう。5時間かけて編み出した俺のファイナルウエポンである。これが直撃して無事な女子はいないはず！ ……いない

と思いたい。」

「ちょ……相羽さん！」

この展開、昨日と同じ！？　ってことはまさか？　また俺の名前忘れられてる？

不意に相羽さんが立ち止まる。そして、こちらに振り返って微笑んだ。

天使です。翼はありませんが、まさしく天使です。

「おはよう！　渡辺くん」

「あ。う、うん。おはよう、相羽さん」

なんだろう、すごく機嫌がいいぞ。何かいい事があったんだろうか。

そうか。俺のファイナルウェポンが炸裂したのだ。心血をそそぎ、ラブコメを見て、主人公の恋敵の動きを一生懸命5時間もトレースした努力が実ったのだ……！

「渡辺くん、なんだか嬉しそう。何かあったの？」

逆に聞かれてしまい、焦ってしまう。相羽さんにオレのファイナルウェポンが炸裂したからだなんてストレートに言ったら、周りの女子に勘違いされて、俺は稲田2号の烙印を押されかねない。

……は……。

「あ、うん。そうそう。昨日カオス・クロニクルでさ、ちょっといい事があったんだ」

「何があったの？」

「昨日話したカインがさ……戻ってきたんだ。俺、もう会えないと思ってた。けど戻ってきてくれたんだ、カイン……」

「渡辺くん……」

しまった。潤の言うとおり、カオス・クロニクルの話題はNGだったか。

相羽さんが少し気まずそうな顔をしている。仕方がない。秘密兵器の投入だ。

俺は胸ポケットに入れておいた和菓子を取り出して、相羽さんの柔らかい掌にそっと乗せた。このまま握っていたい気持ちをぐっと抑えて、手を離す。

かすかに残った体温を忘れないように、自分の掌を握り締める。

……3日はこの手を洗わない。

「これ、相羽さんにあげるよ！ 親父が出張で広島に行つててさ、お土産のお裾分け」

「ありがとう……これって……？」

「うん。もみじまんじゅうだよ。コーヒート合つのかな？ 試した

「ことがないから解らないけど……俺の好物なんだ」

俺の妹が……以下略

相羽さんは少し驚いていた。もみじまんじゅうが珍しいのだろうか？ 掌に乗せたそれを、じっと見つめている。

そして、俺の顔を少し緊張した様子で覗き込んで、こう言った。

「椀……？」

「え」

「なーーーーーべーーーー！」

後ろから衝撃を受け、前に倒れそうになる。目の前には相羽さんのセーラー服。事故と見せかけて飛び込んでしまいたくなるが、俺はそんなに下劣な人間じゃない。

いつかこの胸に相羽さんのほうから飛び込ませてやるんだ。

俺は上半身を思い切りひねり、相羽さんをよけて地面に倒れた。

「渡辺くん、大丈夫！？」

「いたたた。ごめん、相羽さん。ケガない？ 俺は大丈夫。毎日妹に蹴られてるから、体は頑丈なんだ」

「指から血……出てるよ。貸して、私、絆創膏持ってるから貼ってあげる」

「あ、ありがとう」

俺の右手に相羽さんの手が触れる。カバンからキャラクターモノのかわいらしい絆創膏を取り出し、それを丁寧に俺の指に巻きつけてくれた。

その動作は優しさに満ちている。俺のHPは全回復した！ もう何も怖くない。いまなら一人で魔竜の巣に飛び込んでもいい。まさしく相羽さんは俺のヒーラーだ。

「私……二つ下の弟がいるんだけど。けっこうドジな子なの。だからいつも、転んだ弟を起こして、こんな風に絆創膏貼ってあげてたんだ」

潤のことだ。確かに昨日も盛大に転んでいたな。潤め。くそう。あいつが羨ましい。俺が潤だったら毎日転んで、絆創膏だらけになってもいい。

でも、ちょっとこの絆創膏……かわいらしすぎて恥かしいんだけど……。

「痛い痛いのとんでけー」

相羽さんはそう言って俺の指をさすった。

「へ？」

「あ……」

相羽さんは顔を真っ赤にして、うつむいている。

「ごめん、弟にもこうしてたから……その……」

クセになっているのか。潤め、あいつどんだけ転んでるんだ。ドジっ子の領域だな、生きるアニメキャラかあいつは。

「あ、いいよ！ ぜんぜん！ 俺、もう痛くないし！」

素早くそう言って立ち上がり、正拳突きを10回目の前で繰り出す。痛みなんかどこにもない。あるもんか。今まで生きてきた中で、一番幸せです。

もう死んでもいい。いや、指にケガしただけで死んだら、体もたないけど。

「渡辺くん。ケガ、大事にね。それとこのもみじまんじゅう……ありがとう。コーヒーと一緒にいただくから……それじゃ」

「あ、うん。また教室で」

相羽さんの姿が昇降口へと消える。石鹸の香りが消えるのと同じ、俺は振り返って拳を繰り出した。

ズドンと音がして、稲田は吹っ飛ぶ。

「ナベ、ごめん。ちょっとした挨拶のつもりだったんだ。そう……これは不器用な愛情表現なんだ！ ほら、よく言うだろ、好きな子にはイジワルしたくなるって！」

「そうか。稲田は俺の事が好きか」

「うんうん、大親友だし。同じ工口本を読んだ仲だし！」

同じ釜の飯を食った仲みたいな使い方をするなと言いたい。

「稲田、俺もお前の事が好きだぜ」

「じゃあ、俺たち相思相愛だな！　じゃ、そういうことで！」

「まてい」

俺は稲田の腹に不器用な愛情表現を叩き込んで、教室へと向った。

そして、その日の授業が始まり、昼休みになると、相羽さんの周りにまた人垣ができる。

もみじまんじゅう、食べてくれるだろうか……。

その日の授業が終わると、俺は足早に教室を去り駅前へと向った。

駅前はまだ夕方の買い物ラッシュや帰宅ラッシュに巻き込まれておらず、静かに人の波を受け流し、その中に一人の少年をはらんでいた。

「あ、渡辺さん！　ここです」

潤が手を振ってこちらに駆けて来る。子犬のような奴だ。すでに私服に着替えており、ビジネスバッグを小さな体で引きずるようにして抱えていた。

俺の目の前まで来て、潤は足をつまずけた。やばい。今の状態で転んだらPCが壊れるぞ。

とっさに潤の体とバッグを受け止めて、元の場所によいしょして戻す。

「危なかったです……ごめんなさい、渡辺さん」

「コーヒーの瓶と違ってPCは精密機器だからな。保証期間中でも、落として壊したら修理費はかかるぞ」

「え！ そうなんですか……よかった。まだ買って1月も経ってないから……ごめんなさい渡辺さん、P子の命を助けて頂いて」

「ピー子？ このPCはファッションチェックでもできるのだろうか？」

「潤、ピー子って？」

「この子の名前です。PCのP子。かわいいでしょ??」

潤は満面の笑みでビジネスバッグの中身を俺に見せた。いや、かわいいと言われても……。

「お姉ちゃんも自分のPCに名前付けてるんですよ。めったに呼ばないけど」

「なに？ な、なんて名前なんだ？」

「フランソワーズです」

なんて微妙なネーミングセンスだ！ ちょっと相羽さんのセンスがわからない。

……とりあえず気を取り直して、家に帰るか。

「いや、それより行こうか。もうすぐ電車が来る時間だし……切符は二駅先のを買ったぞ」

「はい！」

俺は潤を伴い、駅の発券機の前に立った。俺には定期があるので買わない。潤の分が必要だ。

潤に譲り、必要な金額を指示する。しかし、潤は発券機の前で止まったまま虚空を見つめていた。

「潤？」

「あ、あの……ぼく、切符買ったことなくて……いつもお姉ちゃんが買ってくれるから、使い方が……」

潤は……まさか、恐るべきシスコンなのではないか？ いや、逆か？ 相羽さんがブラコンなのか？

とにかく俺は潤に発券機の使い方を教えて、やってきた電車にぎりぎりですり込むと空いている席に座った。

「お家、近いんですね」

「うん。本当はチャリで行ける距離なんだけどさ……電車通学って憧れないか？」

「そうですか？」

「憧れるだろ！ 電車の中でステキな出会いがあるかもしれないし、それにキレイなお姉さんが居眠りして、自分の肩によりかかってきたらお前はと思うっ!？」

「肩が懲りますね」

「そうだろう、肩が凝るだろう！ って違うわ！」

俺は潤に電車の中でノリ突っ込みをしてしまった。まあ、実際にキレイなお姉さんが肩によりかかってきたことは無い。

ハゲたおっさんが肩によりかかったことはある……それも、左右から。肩に残った感触は今も忘れない。悲しい記憶だ。

やがて目的地に着くと、俺と潤は電車を降り、駅の改札から人ごみと一緒に吐き出される。

「こっちだよ、潤。迷子になるなよ」

背中に潤の気配があることを確認しながら、帰路を辿る。ものの数分で我が家へと帰り着き、玄関のドアを開けて中に入った。

「おじやまします……」

「ただいま」

玄関で靴を脱ぎ、リビングの家族共用パソコンへと向う。

俺専用のPCがないので、親父と妹と俺が共有して使っているのだ。

リビングのドアを開けると、PCラックの前に我が最愛の妹がいた。ヘッドホンを付けて、ニンマリ動画という動画投稿サイトで何かを見ている。

俺は妹の背後に立つと、肩を優しく揺すって、そこをどくように頼もうと思った。

「おい」

返事がない。どうやらただの屍のようだ。

屍にPCは必要ないので、PCラックのイスを引いて、そのままテーブルヘランページさせた。ヘッドホンが差込口から抜けて、大音量のアニソンが渡辺家を貫く。

「ご近所迷惑である。」

「愛紗。優しくてかつこいい、お前の大好きなお兄ちゃんが帰ってきたぞ」

最愛の妹はヘッドホンを着けたままイスを倒して、俺に向って走ってきた。きつと、感動のあまり俺の胸めがけて、飛び膝蹴りでも見舞ってくれるのだらう。恐るべき照れ隠しである。

そうだったらしいのだが。

最愛の妹は、跳躍するとカカトをめいっぱい振り上げて、俺の頭上に直撃させた。スカートはいてるのに、こんなはしたない事をするなんて信じられない。ていうか、これは新技だ。

俺はこんな子に育てた覚えはないんだが。

しかも頭部にクリティカルヒットだ。スタンだ。ものすごく痛い。

「キモイんだよ、バカ翔。『誰が優しくてかつこいい、お前の大好きなお兄ちゃん』だ？ 神様にクリーニングオフできるならしたいんですけど？」

「それは無理だ。お前はすでに14年と7ヶ月生きている。クリーニングオフの期限はとっくに過ぎているのさ、妹よ」

これが俺の妹。 渡辺 愛紗 14歳 中学3年生である。

IN THE WORLD

愛紗はセミロングの髪をふあさりと揺らし、俺がリビングで妹をランペイジさせたイスをPCラックに戻した。学校から帰ってまだ間もないのだろうか、制服を着たままであった。

「あの……お邪魔してます」

「あん？」

潤がおずおずと一歩ずつ足場を確かめるようにリビングに入ってきた。それを鋭い目で睨んだ愛紗だったが、途端に目が見開かれて硬直した。

「あの……ぼく、相羽 潤です。昨日、渡辺さん……翔さんと知り合って……」

緊張してうつむいた潤。それを見た愛紗の時間は止まったままだ。

「昨日潤と仲良くなってさ。それで、こいつもカオス・クロニクルに興味があるっていうんで、俺がPCにインストールしてセットアップしてやることになったんだ」

「……」

愛紗は頬を少し赤らめて未だに潤を見つめていた。

「あの……愛紗さんですよ？ 翔さんから少しお話は聞いています。同じ年みたいだし、仲良くしてくれると……嬉しいです」

今にも消え入りそうな潤のか細い声。そして、潤は愛紗におそるおそる右手を差し出した。愛紗はそれをがっちりつつかんで鼻息を荒くし自己紹介を始める。

「あ！ あの、あたし渡辺 愛紗ですす！ 好きな食べ物はインスタントラーメンの固めででで！」

愛紗は顔を真っ赤にして、セリフを噛みまくった。いつもとキャラが違う。

潤はそれを見てくすりと笑い、愛紗は照れ笑いをしながら頭をぼりぼりとかいていた。

「あ！ あたしお茶入れてきます！ 潤くん、ゆっくりしてってください！ 何かあったらその役立たずをこき使ってくれて構いませんから！」

そう言って、愛紗は台所に向って歩き出した。なぜか油のきれたロボットのようには歩きかたがぎこちない。

「面白い子ですね。渡辺さんの妹さん……えっと、愛紗ちゃん」

あんな愛紗は初めて見た。まさかあいつ……潤に……。

一目惚れ？

俺達渡辺兄妹は、偶然にも相羽姉弟に恋をしてしまったらしい。

まったく、兄妹そろって……。

「さて、と。そうだなあ。まずは俺の部屋に行こうか。クライアン
トロムでインストールして、それからキャラを作って少し一緒に狩
りをしてみよう」

「はい！」

潤は力強く頷く。俺はリビングをでて、玄関横の階段を昇り二階
の自室へと向う。自室のドアを開け、潤に入るように促した。

「どうぞ」

「お邪魔します……あ」

潤は俺の部屋に入って少し驚いていた。

「ごめんな。少し散らかってるけど……適当にかけてくれ」

潤は俺のベッドの上に腰をおろして、溜め息を付いて周りを見回
す。

「散らかってるだなんてとんでもないです。すごいキレイなお部屋
ですね。きちんと整理整頓されて……うちのお姉ちゃんも見習って
欲しいくらいです」

「え？」

「年がら年中散らかり放題なんです。ぼくが片付けてあげるって言
つても、『余計なことはするな、この散らかり具合がいいんだ』っ
て言っただけで怒り出して……足の踏み場がないんですよ」

相羽さんはもしかして、家事能力0なのでは……外見からは想像がつかないけど、相当がさつなのかもしれない。

「まあ、俺は物が乱雑に置かれてるとイライラして、直しちゃうんだよね。スーパーの売り場とか、店員でもないのに勝手に整理しちやったりとかさ」

「それ、ぼくもわかります。なんだか放っておけないですよね」

潤とヘンな共通点が見つかってしまった。

「じゃあえっと……PC出して」

「P子です」

潤は真面目な顔になって、きっぱりとそう言った。

「……P子を出してくれ」

「はい！」

P子と呼ばないとダメらしい。ちょっと面倒くさいな。

ビジネスバッグから出されたP子はまだ買って間もないどころか、ぴかぴかの新品であった。相当大事にしているのだろう。

「お……これって最新機種じゃないか。ブルーレイドライブ内臓、最新のCPUに……4GBのメモリ……うちのボロいデスクトップよりも断然性能がいい……」

P子のスペックに驚愕する。これだけの性能だ。かなり高額なんだろうな……しかも話を聞く限りだと、これは潤専用の物らしいし、相羽さんもフランケンだったか、フランクフルトっていう名前のPCを持っていると潤は言っていた。

相羽家は金持ちか！？ 身分違いの恋でなければいいが……。

・「ぼくのP子……ダメですか？ カオス・クロニクルできませんか？」

潤は不安な表情でP子を見つめていた。

「いや、大丈夫。むしろ推称環境以上だからキレイに映るし、ラグもほとんど無いと思うよ。うちのボロPCと交換して欲しいくらい」

「そうですか……渡辺さん家のボロPCより上ですか……よかったです」

潤はほっと安堵して胸を押さえた。今、ボロPCって言った？ 言ったよね？ 確かにボロいけど、あれには俺の全てが詰まっているんだぞ！

くそっ……セレブめ。

潤が目を離してる間に、メモリを引っこ抜いてやるのかな。などと考えているうちにP子は起動して、デスクトップ画面が表示された。

画面には、ゴミ箱と、ウイルスソフトとワードなどのビジネスソフトのショートカットくらいしかなく、なんとも寂しい状態だ。

エロ画像やエロゲーくらい入ってもいいものだが、ハードディスクの容量は数百GB以上が空いている。

まあ、これだけ容量が余っているならカオス・クロニクルのアップリケーションは十分に入るだろう。

俺は机の引き出しからロムを取り出して、それをドライブに挿入した。しばらくしてセットアップが始まり、ドライブからはロムの回転音がぶんぶんと聞こえる。

「さて……少し時間がかかるな。そのへんの本でも適当に読んで待っていてくれ。30分はかかるはず……」

「はい。それじゃあ……」

潤は立ち上がり本棚へと向う。

「すごいですね……渡辺さん、プログラム関係の本がいっぱい……プログラマー目指してるんですか？」

本棚の半分以上を独占しているのはプログラム関係の専門書だ。それを見た潤が感嘆の声を上げた。

「ああ。それ、親父からもらったのがほとんどなんだよ。家の親父、プログラマーだから」

「なんだか、かっこいいですね」

潤はうるつると瞳をうるわせて感動していた。いや、そんなたい

したもんでもないぞ、あのおっさん。

プログラマーになった理由だって、自分で理想のエロゲーをプログラミングできるようにになりたいとかいう、不純なものだし。

でも、男手一つで俺と愛紗を育ててくれたのにはすごい感謝してるけど……。

「俺も時間が空いてヒマなときは、たまに簡単なプログラム組んでるよ。最近はObjective-Cで遊んでるんだけどね」

「なんの話だかさっぱりです……」

ちなみに、Objective-Cはプログラミング言語の一種で、 아이폰やiPadのアプリケーションはこの言語で開発されている。親父の趣味に少し付き合った程度の知識しかないけど。

「おっと、ごめん。まあ興味があるならいつか俺がプログラムを教えてあげるよ。けっこう楽しいぜ？ バグが出ずに無事コンパイルできた時は」

と、俺が雄弁に語っているとP子が軽快な効果音を鳴らして、インストールが完了したことを告げた。

「え？ 早すぎだろ！ うちのポロPCなんか一時間近くかかったのよ……」

「ぼくのP子。すごいでしょ？」

P子おそろえし。

「じゃあ、さっそくゲームに接続してみるか。ちょっと待ってるよ、親父の部屋からLAN取ってくるから」

俺はそう言っただけ自分の部屋を出ると、向かいにある親父の部屋に入った。

家には家族共用のPCが一台あるが、それとは別に親父が一台持っている。仕事用ということと入っているOSがMACであることもあって、親父もリビングのPCを使っているのだ。

俺は、親父の机の上にあったMACからLANを抜いて、それを持って部屋に戻り、P子に差しした。

「さて、インストールは終わったけど、アップデートがまだだからな。またこれから少し時間が……」

かかると思ったが、すんなりと自動アップデートが終了し、瞬間にP子はゲーム画面を映し出した。

P子すげえ。

「それじゃあまずはキャラを作らないとな。名前はもう決めてるのか？」

「はい。ぼくの名前で」

「えー。つまらないな。アニメのキャラとかは？ この前、キラ・ヤマモトって奴がいたっけ。あいつ、なかなか面白い奴だったなあ。punn321はちょっと名前の意味がわからないけど」

「ぼく、アニメ知らないから……潤でいいです」

潤はそう言って、名前の欄に潤と入力したが、受け付けられなかった。すでに同じ名前が存在したのだ。

その後、じゅんもダメだったので、ぴゅあと入力したら今度はうまくいった。

ぴゅあって……何か、すごいかわいらしい女の子を想像する名前だ。

「じゃあ、次……種族だな。ヒューマン、エルフ、ダークエルフ、ドワーフ、オーク、フェイブ……どれにする？」

「一番男らしいのがいいです！ ぼく、ゲームの中ではせめて男らしくなりたいから」

「……じゃあ、オークか……」

「はい！ うわあ。かっこいい！ ぼくこんな風になりたいなあ」

潤は、むきむきマッチョな緑の巨人をすっかり気に入ってしまったようだ。ていうか、ぴゅあっていう名前とこのビジュアルは見事にミスマッチだ。

体型ももちろん、ボディービルダーのような体つきで、背も2メートル以上ありそうなくらいバカでかい。

これの中身がこんな美少年だと知ったら、みんな驚くだろうな……

…。

すべての設定を終え、潤はカオス・クロニクルの世界に降り立った。

いや、ここでは、ぴゅあと言おう。

ぴゅあは、初心者村……ハリの村に降り立ち、周りを走り回っていた。見るもの触れるもの、その全てが新鮮なのだろう。

俺も、一年前はそうだったな。そして、装備も何もつけずに狩りをして死に掛けたんだっけ。そこをカインが助けてくれて色々教えてくれた。

俺もカインになろう。潤にとってのカインに。

「潤、P子を持って下に行こう。俺もレベルの近いキャラで狩りをして色々教えてあげるよ」

「はい、お願いします!」

リビングに入り、カオス・クロニクルを起動し、ゲームへ。

キャラクター画面には3人のキャラが佇んでいた。二つの短剣を装備したダークエルフの男……全身を黒いレザーアーマーに身を包んでいる。

こいつではレベル差がありすぎるので、隣のヒューマンウィザードを選択する。下着同然の派手な格好をした若い女で名前はマリアベル……。

「これが一番、ぴゅあとレベルに近い。よし、これにしよう。」

「潤。俺が狩りの基本を教えてやる、しっかりついてこいよ。」

初めての日

ぴゅあは、マリアベルの支援と定番育成ルートを経て、30分もしなういちに15レベルになり、ハリの村を卒業するとミロンの村へと拠点を移した。

もちろん師弟関係を結んでいるので、成長は驚くほど早い。それは取得経験値の増加という意味だけでなく、潤の飲み込みの早さも相まって、1時間を過ぎる頃にはレベルが24になっていた。

「だいぶ慣れてきたな、潤。教え甲斐がなくてちょっと残念だよ。愛紗はここまで来るのに倍かかったんだぜ？」

潤にはムダな動きが一切ない。俺のいう事を忠実に守り、俺の指示の一手先に行く行動を取ってみせる。

ちゃんと自分で考えて、最善の選択を取っている。手間のかからない生徒である。学校の成績もかなりいいのではないか。とはいえ、『勉強ができる』頭のイイ奴、という図式は社会に出たら当てはまらない』と親父がよく言っていた。

状況判断。観察力。決断力。応用力。想像力。色んな力が必要だとも。俺にはまだこの言葉の意味は解らないけど、潤にはそういった素養があるのかもしれない。

このおどおどした性格さえ直せば、人の上に立つ立派なリーダーになれるんじゃないか？

カオス・クロニクルを始めとするMMOでは、他人と面と向って

話すことは無い。すべてが文字による意思疎通に委ねられる。だから、口下手な奴でもスィスイ発言できるし、口では言えないことだって、文字でなら数回キーボードを叩くだけで簡単に現せる。

だからこそ、言葉の齟齬そごや、過剰な表現にならないように気をつける必要がある。とカインが言っていたな。

まったくその通りだった。

潤がチャットになれて、もっとゲームの経験を積んだら……第二のカインになれるかも……。

「潤はすごいな、まるでカインみたいだ」

「カインって誰ですか？」

「陳腐な表現をすると、ヒーローかな。このゲーム、75レベルが最高レベルなんだけど、74〜75の区間は1年間狩りをして、ようやくたどり着けるんだ。カインは数少ない75レベルで、装備もゲーム内最強の物をそろえてた。でも、カインがすごいのはそこじゃない。カインは無敵なんだ。どんなに不利な状況でも、覆しちまう。ギルド間戦争で灰色の狼が全滅寸前だったのを、とっさの機転と奇策でひっくり返したこともある」

あれは今も忘れない。あのギルド戦争で灰色の狼はサーバー最強の戦力と規模を誇示するようになった。

そのこともあって、俺はカインに男惚れした。この人なら全部賭けてもいい。それだけの価値のある人だと思っただ。けれど、カインが去ってからギルドは大きく変わった。だから、俺もそこに

用は無い。

カインがいる所が俺の場所なんだ。俺はカインの指示で動く。カインの剣で盾だ。

「すごい人なんですね、カインさんって……どんな人なんだろう」

「案外、女の子だったりしてな。俺や潤とそう変わらない年かもしれない」

「じゃあ、家のお姉ちゃんかもしれませんね」

「はははは。そうだったらすごいな。もしそうなら、俺びっくりして学校を半裸で逆立ちして爆走するよ」

そんな事、あるわけないさ。カインは男だ。一人称は『オレ』だし。相羽さんがカインだなんて、ありえない。

「そういえばさっき、愛紗ちゃんの名前が出ましたけど、愛紗ちゃんもやっているんですか？」

「ああ。ていうか、このマリABELは愛紗のキャラなんだ。俺と愛紗で一つのアカウントを共有しているからな。俺のキャラは一人だよ。ちなみに愛紗の奴、生意気にもギルドマスターなんかやってんだよね。ほら、さっき黒いダークエルフいたろ？ あれが愛紗のメインキャラなんだ」

「へえ、いいな……兄妹でゲームしてるんですね」

「まあ、数少ない共通の話題だな。兄妹って言っても、男と女だけか

ら、昔は話す話題もいっぱいあったけど、今はそうはいかないだろ？ カオス・クロニクルが今や唯一の兄妹の繋がり……ってちょっと悲しいか」

「いえ、羨ましいです。ぼくもお姉ちゃんとお話したいけど、何を話せばいいか解らなくて……でも、カオス・クロニクルの話題は禁止だし……」

「そうか……潤のねーちゃんの趣味って他にないのか？」

さりげに相羽 真理奈情報をゲットできるチャンスが到来した。

「お料理ですね……。インターネットで見たレシピを試して色々作ってくれます。この前は鶏レバーの甘辛煮を作ってくれたんです。臭みが無くておいしかったな」

料理！ 俺と同じだ。実は渡辺家の食事は俺が担当している。

母親はいないので、親父がインスタントや冷凍食品、スーパーの惣菜しか用意できない。そこで、俺が料理を覚えて腕を振舞っているのだ。

カオス・クロニクル以外の共通点……ようやく見つけた！ これ
で相羽 真理奈攻略計画は第二段階に進むぞ。

「つと。そろそろ休憩してミロンに戻ろうか。クエストも一回清算しとかないと」

ぴゅあは俺と一緒にゴブリン前線基地の最奥で、エリートゴブリンを狩っていた。20代はここが一番効率がいいのだ。

「はい！ ……あれ？　なんか、黒い物が落ちていませんか？　なんだろう」

潤の言う通り、目の前には黒い物体が落ちていた。あれは……。

ダメだ！　あれに近づいたらダメだ！

「潤、ぴゅあをすぐにそいつから放せ！　それで、すぐにここを離れるぞ！」

「え？」

しかし、潤はすぐに動くことが出来ず、ぴゅあは黒い物体……そいつに取り込まれた。

「なんですか？　これ？　ぼくのぴゅあがごっこつしたヘンな奴に変身しちゃいました！」

「潤。そいつは魔剣だ。魔剣はワールド内を徘徊して、近くにいるプレイヤーに寄生する。そいつに寄生されたプレイヤーは魔剣に呪われて姿を変えられる。でも、安心しろ。時間が経てば元に戻るし、魔剣装備中はステータスが飛躍的に上昇するんだ。その状態なら、レベルが10以上上の相手でも狩れるぜ？」

「ほんとですか？　じゃあ喜んでいいのかな。でも、ぴゅあの愛らしさがどにもないです……こんな黒くてごっこつしたの、ぼく、好きじゃありません……」

魔剣に取り込まれると、強制的に『魔剣士シャドウナイト』へと

変貌させられる。シャドウナイトは、全身から黒い蒸気を噴出し、漆黒の鎧に身を包んだ禍々しい存在であるが、ビジュアルには人気がある。

少なくとも、10人が見たら10人ともぴゅあよりシャドウナイトの方が断然いいと言っただろうが……。

「あれ？ 何だろう、魔法が飛んできた？」

シャドウナイトが、一瞬氷の槍に貫かれた。

「ん？ このあたりにMOBはいないだろ……見間違えじゃ……」

見えた。見間違いじゃない。いる。

エルフウィザードだ。今のはあいつのスキル、『アイスグレイブ』だ。名前は……加齢の王子様。なんだこいつ、ネタキャラか？

加齢の王子様はエルフの少年で、青いローブに身を包み、魔法書を広げて俺たちから少し離れたところに立っていた。

「H A H A H A！ シャドウナイトよ！ 覚悟しろ、今宵こそ我が魔剣を貰い受ける！」

いっせ……。

「潤。逃げようか、たぶんこいつ魔剣ハンターだ。さっきもいったけど、魔剣士ってステータスが飛躍的に上がるから、それを目当てに魔剣を追ってる連中もいるんだよね」

魔剣ハンターの目的は、魔剣を所有者から奪ってそれで狩りをすることだ。魔剣士は戦闘不能になると魔剣から解放され、それを倒したのがプレイヤーならそいつが次の魔剣の所有者になる。

だから、わざとこいつにやられて魔剣を譲ったほうがいい。こういう輩は何時間でもへばりついて、空気を読んでくれない。

「潤。しょうがないから、わざとこいつにやられるんだ。大丈夫、戦闘不能になったら俺が神秘の復活薬で蘇生してやるから気にするな。こつこつという連中は」

俺が言う前に、すでに加齢の王子様は地面に横たわり、戦闘不能になっていた。

「あれ？」

後ろからやってきたエリートゴブリンが、加齢の王子様を一撃で瞬殺してしまった。とりあえず、ターゲットをこちらに移したゴブリンに向けて魔法を放ち掃除しておく。

「H A H A H A！ やるな、シャドウナイトよ！ だが我は決して諦めん！ また会おう！ その時までその魔剣預けるぞ！」

最後はシャウトでそう叫んで消えて行った。一体なんなんだあいつは……もしかして、キラ・ヤマモトの別キャラだろうか？

今度こそ帰ろうと思ったのに、また他の魔剣ハンターがやってきた。今度は加齢の王子様のような低レベルのプレイヤーではない。

灰色の狼の現ギルドメンバーだ。しかもあいつは、俺と同じ時期

に入って、カインに色々教えてもらっていた……左 翔太郎。

あいつとはあまり仲がよくない。基本的に無口で何を考えているか解らないからだ。狩りに没頭すると、ギルドチャットでは何も発言しないどころか、挨拶すらしない。いるのかいないのか、はつきりしないなんとも無愛想な奴なのである。

思ったとおりに、あいつは何も告げずにぴゅあの魔剣を奪おうと攻撃を繰り返してきた。

シャドウナイトになっているとはいえ、ぴゅあはまだ24レベルだ。

左 翔太郎のレベルは68だったはず……しかもダークエルフエUNCHャンターで、遠近数種類の武器を持っていて、それを状況に合わせて使いこなす。

本人曰く、フォームチェンジらしい。ただ武器を装備し直すだけなのに。

左 翔太郎は弓でシャドウナイトを狙い撃つ。強力なバフがかけられているため、本職のそれと同程度の威力の矢がシャドウナイトに突き刺さる。

矢を発射したのと同時に左 翔太郎は一気に距離を詰め、デュアルソードに装備を持ち変えると、それでシャドウナイトを十文字に切り裂く。その全てがクリティカルヒットして、ぴゅあは魔剣から解放された。

「ああ……ぼくのぴゅあが……」

「大丈夫、すぐに俺が蘇生するよ。だからそこで待っていてくれ」
「せっかく、育てたのに……」

魔剣を奪うためとはいえ、これはPKと同じだ。魔剣システムは、奪い合うことが前提のため、魔剣所持者がプレイヤーに倒されても経験値が減ることはない。

だが……始めたばかりの潤にはそんな事がわかるはずもないし、関係ないだろう。しゅんと落ち込んだ潤の横顔……口の中に苦い味が広がる。潤がかわいそうだ。すぐに蘇生してやるう。そして、もっといっぱい狩りをして、今の沈んだ気持ちを吹き飛ばしてやるんだ。

俺は、そう決めて前を見た。

左 翔太郎の足元に落ちた魔剣……それは、左 翔太郎を新しい主と認め、魔剣士へとその姿を変えさせる。

さあ。さっさと行け。お前の目的は達成しただろう？

俺たちはまだここで狩りの続きをするんだ。

早く行ってくれよ。

左 翔太郎は帰るそぶりを見せず、俺に……マリアベルに向って歩いてくる。黒い蒸気を引き連れて、漆黒の鎧が魔剣を振りかざし、それを振り下ろした。

野郎。試し切りか。

マリアベルのHPは即座に0になる。

こいつ……カインに何を教わった？ 自分よりレベルの低いキャラの相手をするなんて……。

「渡辺さん……ぼくが渡辺さんのいう事を聞かなかったばかりに……ごめんなさい。本当に、ごめんなさい」

「別にお前のせいじゃないよ。相手が悪かったんだ、気にするな」

俺はまだいい。しかし……。

「ごめんなさい……」

潤は涙目になっていた。相当責任を感じているらしい。

魔剣なんて興味は無い。けれど……潤の仇をとってやりたい。

好きな子の弟だから、親切にしてるわけじゃない。潤はいい子なんだ。泣き虫だけど、正直で今一つはつきりしない所もあるけど、いい子なんだ。

俺は……潤にとってのカインになる。

あの日、俺を助けてくれたカインのように、俺が潤を助ける。

左 翔太郎は魔剣士状態だ。今ならば、魔剣を奪うという立派な名目がある。灰色の狼にケンカを売りに行くワケじゃない。

魔剣士になった左 翔太郎のステータスがいかほどのモノかは知らない。

けれど、やってやる！

正々堂々と、真っ向勝負だ！

「潤。ちょっとそのまま待ってるよ。あいつには前から色々と借りがあるんだ。お前のカタキをとるついでに、ここで一気に返してやる」

「え？」

俺はリスタートする。

愛紗のキャラは2人。俺のキャラは1人。唯一の俺の分身を選択する。

長い銀髪と、白い素肌。赤い瞳。フェイブの証だ。

「行くうぜ、椀。あいつを正々堂々真正面から倒す！」

窮鼠、魔剣を噛む

ミロンの村の中央で、椛は目覚める。昨日、カインのことを聞いて知り合いに色々聞いて回った後、ここでログアウトしたんだ。

早く行かないと、左 翔太郎を見失ってしまう。椛をテレポーターでゴブリン前線基地へ飛ばし、奴の元へと急がせる。

「潤。あいつはまだそこにいるか？」

「はい。エリートゴブリンを何匹か狩って……今、加齢の王子様を返り討ちにしたところです」

懲りないな、加齢の王子様。

椛は駆ける。白い風になって、行く手を阻むゴブリンを屠り、加齢の王子様の屍を踏ん付けてぴゅあの所に帰ってきた。

「左 翔太郎……久しぶりだな」

「椛か。ちょうどよかった。俺もお前に会いたかったんだ。俺の強さを測るために斬らせてくれ。そのザコや、このMOBじゃ物足りない。お前なら俺の攻撃に少しは耐えてくれるんだろ？」

嫌な言い方だな。今に始まったことじゃないけど、たまに口を開いてもコレだ。そんなに自分が好きか、お前は。

「いいぜ。こつちもお前をぶちのめしたいと思ってたところだ」

倒れたぴゅあを背後に、左 翔太朗こと、シャドウナイトと対峙する。

「行くぜ」

正面から堂々と。それが俺の……椀のスタイル。ヴァンガードのショートカットアイコンを視界の隅に捉えて、マウスを的確に操作する。

ヴァンガードはトグル型スキルだ。こいつのオン・オフのタイミングが勝敗を決する。相手の攻撃モーションを見切り、即座に展開すれば、椀は絶対の攻撃力と防御力を発揮する。

負けはしない。相手が魔剣士だろうとなんだろうと。

シャドウナイトに向って椀は駆ける。奴はまったく微動だにしない。

なら、先手必勝。攻撃は最大の防御だ。攻撃の間合いに入ると同時、ヴァンガードを解除して、椀は背中の大剣……70レベルで装備できる『ガラドボルグ』を機敏な動作で、シャドウナイトに叩きつける。

クリティカルヒットだ。シャドウナイトに一撃を加えると、反撃を警戒しつつ距離を取り、ヴァンガードをオンにする。

今の一撃はかなり効いたはず。

斬魔クラスのPKなら、HPの半分は削っただろう。

「すごいな」

不意に黒い鎧……シャドウナイトがそう発言した。

よし。着実にダメージを与えている。勝てない相手じゃないんだ。レベルだって俺の方が4つも上なんだし、左 翔太郎のプレイスタイルは知り尽くしている。

「すごいな、魔剣は。お前の攻撃で、HPゲージが10分の1も減ってないよ。すごいなw なあ、今度はこっちから攻撃していいか？ 頼むから……一撃で死ぬなよ？」

今ので10分の1以下……単純計算で、あと10発以上攻撃を加えないといけないのか。

さすが、魔剣。けど、大丈夫。俺にはヴァンガードがある。

やってやるぞ。

けれど俺の余裕は、シャドウナイトの一撃で盛大にぶっ飛んだ。

十分に距離を取っていたはずなのに、遠距離から攻撃を受けた。とっさにヴァンガードを展開させたが、椋のHPが一瞬で1ケタだ。

おいおい。何だこりゃ。

「お前なら耐えてくれると思ったよ、椋。じゃあ、次のスキルを試してやるっ」

どうやら、今のは魔剣士専用の攻撃スキルだったらしい。……厄

介だな。

しかし、気合で負けるわけにはいかない。ここははったりをかまして余裕をアピールしておく。

「すごいな、魔剣は。今の攻撃で、俺のHPゲージ100分の1も減ってないぜ？ もっと強力なので来いよ。でないと寝落ちしそうだわ」

「渡辺さん、かつこいいです！ まだ何か作戦があるんですよね？ すごいです！」

ウソです。もう強力な攻撃は勘弁してください！

と、潤の手前もあるので余裕の笑みを浮かべて、冷や汗を必死に隠した。

「見てろ、潤。渡辺さんは追い込まれば追い込まれるほど、実力を発揮するんだ。当然、夏休みの宿題だって8月31日の夜11時から始める！ 絵日記も一ヶ月まとめて書くんだ」

「すごいです！ うちのお姉ちゃんも終業式が終わって、家に帰って1時間で全部終わらせちゃうんです！ ぼくは、30分で全部終わらせちゃいますけど」

相羽姉弟。真面目すぎ！ 愛紗と俺は9月1日は学校から帰って即昼寝なんだぞ！ 起きたら晩御飯食ってまた寝るんだ。優等生どもめ。

と、余裕ぶっこいてる場合じゃないな。次の攻撃を受けたらマジ

で詰む。かといって、今から10回攻撃して、都合よく全部がクリティカルヒットするわけでもない。

……こんな時、カインならどうするかな。

考える。ファイナルプロテクションを使用して突っ込むか？

ダメだ。2、3発耐えられても、その先がない。

考える。……だめだ。思い浮かばない。

正面から殴るだけじゃ、負けは見えている。

正面からやってくるシャドウナイトに、一歩一歩後ずさる。

柵は次第に崖へと追いやられ、逃げ場を失う。

考える。俺はカインじゃない。けれど、考える。

あいつを倒す方法が何かあるはず。潤の前でかつこ悪い所をみせるわけにはいかない。俺のポリシーに反するが、潤の仇を討つ為……今はそれを横に置いておく。

カメラを回転させ、後ろを見る。かなり高い崖だ。おそらく下に落ちれば、落下のダメージを食らう。

それもこの高さだ。レベルに関係なく、落ちればその時点でHPが1となる。そうなれば、ヴァンガードを展開しようが、ファイナルプロテクションを発動しようが無意味。

一撃で倒される。このゴブリン程度のMOBにすらだ。

いや。そうか……。これだ！

「潤。カオス・クロニクル 魔剣士 スキルでぐぐってくれ！ 早く」

「あ、はい！」

俺は隣にいた潤に頼んで、情報を検索してもらった。それを確認すると、シャドウナイトに向き直り、動きを止める。

「椛。ここでいいのか？ お前の墓場は？」

「クサイセリフばかり発言してんなよ。左 翔太郎。あいかわらずイタイ子だな。知ってるぜ？ お前、中身小学生なんだろ？ 外部掲示板でお前のリアル晒されてたぜ」

もちろんウソだ。あいつのリアルなんて、これっぽっちも知らないし晒された事実もない。

とりあえず、この挑発に乗ってくれればいい。

「どこの掲示板だ、URL言え。誰だ俺のリアル晒した奴」

あら、マジだったの？

「いわねーよ。それより早くスキル叩き込んでくれよ？ 一番強力なヤツをさ」

俺はそう発言すると、即座にファイナルプロテクションを発動させた。

「言われなくても、ぶちこんでやる」

「きっちり受け止めてやるぜ」

シャドウナイトが俺に向かって猛烈な勢いで突っ込んでくる。

椀は一步前に出て、やる気を見せると、それを受け止める体勢に入った。

だが、すぐにファイナルプロテクションを解除する。

そして……崖から飛び降りた。

「はあ？ 自殺か？」

シャドウナイトは攻撃モーションを解除して、崖上で無防備に見下ろしていた。

ここだ。

俺は落下しながら、フォースハイトをシャドウナイトに使用する。

「え？ なに!?!」

俺のフォースハイトに釣られ、シャドウナイトも一緒に崖の下へ真っ逆さまだ。

棍の使用したフォースヘイトが解除されるまでシャドウナイトは次の行動を起こせない。解除されるには、棍の攻撃の間合いに入らなければならない。

しかし、落下している棍に追いつくことは無い。次にこんにちわするのは、地上に帰還した瞬間。

そして、落下してHPが1になったとしても、先に地上に落ちた棍が先手を打てる。

俺の勝ちだ。

「潤。ありがとな。魔剣士の最強攻撃スキルが接近形で助かったよ。遠距離だったら、落下前に俺がやられてる」

「いえ、渡辺さんの役に立ててよかったです」

即席の作戦にはうまくいった。シャドウナイトを崖に落とすため、フォースヘイトの適用圏内に誘導する必要がある。

しかし、ヤツの情報がないし、遠距離のスキルでも使われたら終わりだ。

だから潤に頼んで調べてもらい、最強スキルが接近用だということがわかった。あとは、なんとかしてあいつを挑発して接近させ、フォースヘイトをかける……あんまりスマートじゃない気がするけど、これでいい。

あいつのリアルが、小学生だったのには驚いたが……。

椀は落ちる。ゲームの中の3D空間とはいえ、落ちている気分と言つのは妙に迫力があつた。そして、目の前に地面が迫り……椀は着地と同時にHPが1になる。

仕上げだ。落ちてくるシャドウナイトをターゲットして、攻撃に移る。

捉えた。真正面から……叩き斬る！

椀の刃がヒットするより早く、シャドウナイトを氷の槍が貫いた。

何？ 誰だ？

「H A H A H A！ シャドウナイトよ！ 今こそ我が魔剣を貰い受ける！」

加齢の王子様だ。野郎め。漁夫の利を狙いやがった。

左 翔太郎は、魔剣から解放されるとその体を大地に横たわらせた。

そして、魔剣は加齢の王子様の元へと向かい。新たな魔剣士が誕生する。

「H A H A H A！ さらばだ！ 魔剣の主となった我は無敵！」

加齢の王子様は高笑いをして去つて言った。トドメは持っていかけたが、まあ目的は達した。とりあえずよしとするか……。

「……あんな奴にやられたのが納得いかない」

左 翔太郎がふとそう呟いた。たしかに……あれにトドメをさされたのはシヨックでかいな。

「まさか、俺を落下させるとはな。カインばりに頭が回るじゃないか。いや……正直、カインみたいだったよ、お前」

「ぜんぜん。カインはもっとすげーよ」

「そうだなW お前は正面バカだからなWWW」

「失礼か、お前は」

「なあ、お前、戻ってこないのか？」

「は？」

「ギルドに……戻って来いよ」

「なんだいきなり気持ち悪い。キャラを急に変えんな」

「あんなのもうギルドじゃねーよ。みんな好き勝手やってるし、ギルドハントも皆無。連子さんもほとんどインしてねーし……」

連子^{れんじ}。灰色の狼の二代目マスターで、カインの狩り友だった人だ。灰色の狼は、カインと連子の2人が中心となってきたギルドで、発足当初はカインと連子の数名だけだったらしい。

「カインがいなくなって、連子さんが継いだけど……ありやだめだ。ガキの俺でも解るわW せいぜい給食当番のごはん盛る係りの器だ

よw」

いやに例えがガキくさい上に、かなり地味な役割だな。ごはん盛る係りって……あれはあれで、けっこう気を遣うんだぞ。多すぎてもいけないし、少なすぎたら文句言われるからな。

「知ってるか？ 昨日カインが帰ってきたこと」

「ああ」

「それを知ったギルドは、意見が二つに分かれてんだ。連子をマスタ―から引きずり下ろして、カインに戻ってきてもらうってのと、連子を支持する連中だな。いうなれば、カイン派と連子派ね」

「お前けっこうしゃべるな……今、軽く引いてるぞ」

「しゃべらなかつただけだよ。チャットもそんなにうまくなかつたし。とにかくさ、今ギルドはめちゃくちゃなんだ。カインでもなんでもいいけど、俺としてはなんとかして欲しいわけ。このままじゃ、真つ二つだぜ？ そうなったらいいよいよギルド内で抗争とかになるんじゃない？ めんどいだろ、そんなの」

「なるほどね」

「……それより、俺のリアルさらしてあるURL教えろよ。俺が女だってこともどうせばれてんだろうな……」

「え！？ お前女の子なの？」

「何だ知らなかったのか……」

「いや、ごめん。さっきのウソなんだよ。お前を誘導するための」

「はあ!?! マジかよ。まあ、いいや……椀、ギルドの事、考えとけよ」

「ああ……一応な」

「じゃあな、俺行くわ」

しかし、左 翔太郎はすぐに村に帰還しなかった。

「ああ、それと」

「何だよ?」

「さっきのウソだから。俺、男だぜ? マジで女だと思った? 騙されてやんのw ばーかw」

それだけ言って、左 翔太郎は消えた。

ちよっと、むかついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3140z/>

カオス・クロニクル

2012年1月9日22時52分発行